茨城県教育財団文化財調査報告第410集

田 宮 平 遺 跡

都市計画道路田宮・中柏田線整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平 成 28 年 3 月

茨城県竜ケ崎工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第410集

田宮平遺跡

都市計画道路田宮・中柏田線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県竜ケ崎工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は，国や県などの各事業者から委託を受けて，埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として，昭和52年に調査課が設置されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度，茨城県竜ケ崎工事事務所による都市計画道路田宮・中柏田線整備事業に伴って実施した田宮平遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって，旧石器時代から室町時代まで断続的に続く人々の生活の様子についての一部が明らかになりました。

本書が，歴史研究の学術資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，多大な御協力を賜りました委託者である茨城県竜ケ崎工事事務所に厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，牛久市教育委員会をはじめ，御指導，御協力をいただきました関係各位に対し，深く感謝申し上げます。

平成28年 3月

公益財団法人茨城県教育財団
理 事 長　鈴 木 欣 一

例　　言

1　本書は，茨城県竜ケ崎工事事務所の委託により，公益財団法人茨城県教育財団が平成 26 年度に発掘調査を実施した，茨城県牛久市田宮町字平 1030 番地ほかに所在する田宮平（たくうだいら）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　平成 26 年 10 月 1 日～ 11 月 30 日

整理　平成 27 年 6 月 1 日～ 8 月 31 日

3　発掘調査は，調査課長白田正子のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　寺内　久永

首　席　調　査　員　　兼子　博史

調　　査　　員　　田村　雅樹

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長後藤一成のもと，首席調査員兼子博史が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，Ｘ＝－ 1,680 ｍ，Ｙ＝＋ 26,920 ｍの交点を基準点（Ａ１a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 ｍ四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し，４ｍ四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へ a，b，c…j，西から東へ 1，2，3，…0 と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「Ａ１a1 区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　　Ｐ－ピット　SB －掘立柱建物跡　SD －溝跡　SF －道路跡　SI －竪穴建物跡　SK －土坑
　　SS －石器集中地点　TP －陥し穴

遺物　　DP －土製品　Ｍ－金属製品　Ｑ－石器・石核・剥片　TP －拓本記録土器

土層　　Ｋ－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

⑴　遺構全体図は 400 分の１，各遺構の実測図は原則として 60 分の１の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

⑵　遺物実測図は，原則として３分の１の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

⑶　遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

焼土・施釉　　火床面

粘土範囲　　柱痕跡・柱あたり

●土器　○土製品　□石器・石製品　△金属製品　－ - － - － 硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量を記述した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記は，次のとおりである。

⑴　計測値の単位はｍ，㎝，ｇで示した。なお，現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。

⑵　遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

⑶　遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

6　竪穴建物跡の「主軸」は，竈を通る軸線とし，主軸方向は，その他の遺構の長軸（径）方向と共に，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　Ｎ－ 10 °－Ｅ）。

7　今回の報告分で，整理作業の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは，以下のとおりである。

変更　SK24 → SB ３　P10，SK27・34 → SB ４　P11
　　SK39 → TP １，SK42 → TP ２，SK63 → TP ３，SK40 → TP ４
　　SB ３　P10 → SK67

欠番　SF ４，SK43・51

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
田宮平遺跡の概要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 3
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　位置と地形 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の成果 …… 11
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　基本層序 …… 11
　第３節　遺構と遺物 …… 13
　　１　旧石器時代の遺構と遺物 …… 13
　　石器集中地点 …… 14
　　２　縄文時代の遺構と遺物 …… 18
　　⑴　陥し穴 …… 18
　　⑵　土坑 …… 21
　　３　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 23
　　⑴　竪穴建物跡 …… 23
　　⑵　掘立柱建物跡 …… 39
　　⑶　土坑 …… 41
　　４　室町時代の遺構と遺物 …… 42
　　⑴　掘立柱建物跡 …… 42
　　⑵　土坑 …… 44
　　５　その他の遺構と遺物 …… 45
　　⑴　掘立柱建物跡 …… 45
　　⑵　溝跡 …… 48
　　⑶　道路跡 …… 48
　　⑷　土坑 …… 50
　　⑸　遺構外出土遺物 …… 53
　第４節　まとめ …… 56
　写真図版 …… PL １～PL10
　抄　録

田宮平遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

田宮平遺跡は，牛久市の西部に位置し，稲荷川左岸の標高 23 ～ 24 mの台地縁辺部に位置しています。今回の調査は，都市計画道路田宮・中柏田線整備事業に伴って失われる遺跡の内容を，図や写真に記録して保存するため，平成 26 年 10・11 月の２か月間，茨城県教育財団が実施しました。

調査の内容

調査では，竪穴建物跡４棟（奈良・平安時代），掘立柱建物跡４棟（平安時代１，室町時代１，時期不明２），溝跡２条（時期不明），道路跡３条（時期不明），陥し穴４基（縄文時代），土坑 58 基（縄文時代２，奈良・平安時代２，室町時代１，時期不明 53），石器集中地点１か所（旧石器時代）などを確認しました。主な出土遺物は，縄文土器（深鉢），土師器（甕・甑），須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・甕・甑），土師質土器（内耳鍋），灰釉陶器（長頸瓶），土製品（支脚），石器（尖頭器・掻器・削器・鏃・砥石），石核，剥片，金属製品（刀子・釘），椀形滓などです。

田宮平遺跡全景（上空から）

出土した石器類

縄文時代の陥し穴

第４号竪穴建物跡調査風景

竪穴建物跡から出土した遺物

調査の成果

今回の調査で，当遺跡は旧石器時代から室町時代まで，断続的に人々の生活が続いていることが分かりました。旧石器時代の石器集中地点は，石を加工するときに出る剥片が多いことから，石器を製作する場所であったと考えられます。石材は栃木県高原山産の黒曜石が多く，当時の人々の交流を考える上で，大変重要な資料となります。また，縄文時代の陥し穴４基を確認しており，当遺跡の周辺は，狩猟場であったことが分かりました。

その後，奈良・平安時代になると集落が形成され始めます。第３号竪穴建物跡は建物を拡張した様子を，第４号竪穴建物跡は竈を北から東へ作り変えた様子を確認しました。また，第２号竪穴建物跡からは椀形滓が出土し，第１・３号竪穴建物跡からは鉄滓がそれぞれ出土していることから，周辺に鍛冶工房があった可能性があります。今回の調査区は，集落の南端であり北側に集落が広がっていると考えられます。

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県竜ケ崎工事事務所は，牛久市において交通の円滑化を図るために都市計画道路田宮・中柏田線整備事業を進めている。

平成21年5月26日，茨城県竜ケ崎工事事務所長は，茨城県教育委員会教育長あてに，都市計画道路田宮・中柏田線整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成21年9月10日に現地踏査を，平成25年6月6日，平成26年2月28日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。茨城県教育委員会教育長は，平成25年6月12日，平成26年3月5日に，茨城県竜ケ崎工事事務所長あてに，事業地内に田宮平遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

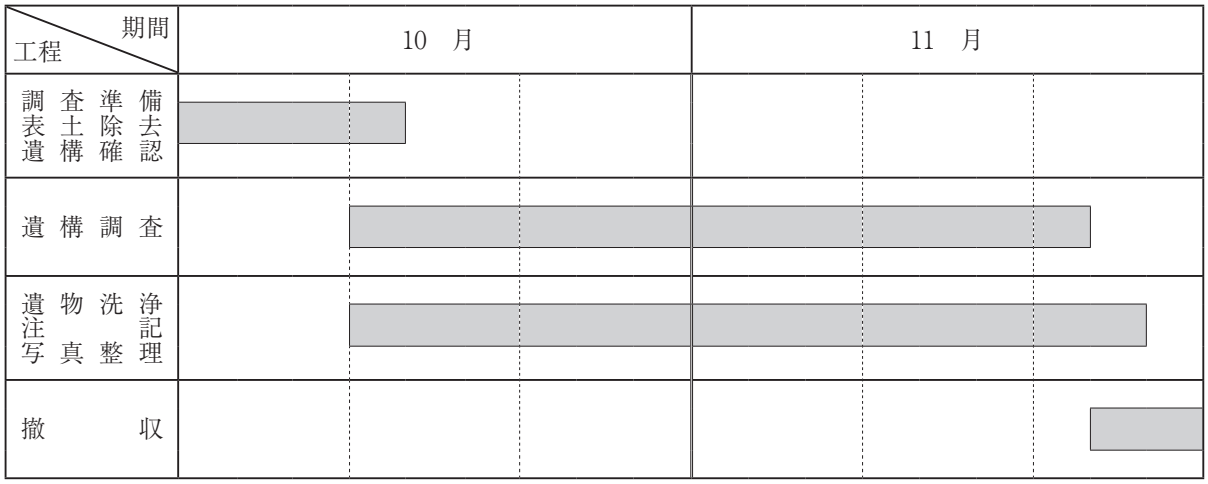
平成26年2月6日，茨城県竜ケ崎工事事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第94条の規定に基づき，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，平成26年2月21日，茨城県竜ケ崎工事事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成26年3月5日，茨城県竜ケ崎工事事務所長は，茨城県教育委員会教育長あてに，都市計画道路田宮・中柏田線整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成26年3月20日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県竜ケ崎工事事務所長あてに，田宮平遺跡について，発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて調査機関として，公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は，茨城県竜ケ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成26年10月1日から11月30日まで発掘調査を実施した。

第2節　調　査　経　過

田宮平遺跡の調査は，平成26年10月1日から11月30日までの2か月間にわたって実施した。以下，その概要を表で記載する。



第2章　位 置 と 環 境

第1節　位 置 と 地 形

田宮平遺跡は，茨城県牛久市田宮町字平1030番地ほかに所在している。

牛久市は，茨城県の南部に位置し，標高25～28ｍの洪積台地である筑波・稲敷台地と，稲荷川や小野川，乙戸川，桂川水系の沖積低地とからなっている。筑波・稲敷台地には，小野川や乙戸川，桂川とその支流が樹枝状に入り込み，台地は複雑な地形となっている。牛久市の西部を北から南へ流れる稲荷川は，小野川からつくば市内で分流し，市の西端に形成されている牛久沼に流れ込み，更に小貝川へと合流している。

筑波・稲敷台地は，第四紀洪積世古東京湾時代に堆積し，貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として，その上にシルト礫や軽石を含み，斜交葉理のある砂層・礫層である竜ヶ崎層，さらに粘着性の高い青灰色から灰色の火山灰質粘土層である常総粘土層，褐色の関東ローム層が連続して堆積し，最上部は腐食土層になっている[1)]。

当遺跡は，牛久市の西部，つくば市（旧茎崎町）との市境に位置し，稲荷川と小野川に挟まれた標高20～25ｍの台地上に立地している。当遺跡が立地する台地平坦部は，東西の幅が3.7㎞で，南北の長さが1.2㎞である。台地西部は，８～13ｍほどの比高をもって稲荷川の流れる沖積地に臨み，北部と南部は稲荷川左岸から小支谷が入り込んでいる。当遺跡は台地縁辺部に位置し，遺跡を囲むように入り込んでいる小支谷に向かって緩やかに傾斜している。調査前の現況は畑地である。

第2節　歴 史 的 環 境

田宮平遺跡〈１〉周辺の稲荷川左岸，牛久沼東部の低地部，当遺跡北部の稲荷川と小野川に挟まれた台地上は，古くから人々の生活が営まれてきた地域である。ここでは，『茨城県遺跡地図』[2)]に登録されている当該地域の主な遺跡を中心に，時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡は，当遺跡北部の台地上に点在している。守子橋（もりこばし）遺跡〈46〉では石刃が表面採取され[3)]，当遺跡に隣接するつくば市（旧茎崎町）の五十塚（いそつか）古墳群〈57〉では，第５号墳の前方部周溝内から縦長の刃器が出土している[4)]。旧茎崎町で旧石器時代の存在が初めて確認された点で注目される。また，当遺跡北東部の小野川流域はナイフ形石器文化の遺跡が集中している。小野川右岸の下大井（しもおおい）遺跡[5)]，小野川左岸にある下根地域のヤツノ上遺跡[6)]，中下根（なかしもね）遺跡[7)]，西ノ原（にしのはら）遺跡[8)]，隼人山（はやとやま）遺跡[9)]などから石器が出土している。中でも西ノ原遺跡では，石器集中地点が５か所確認され，大型のナイフ形石器，不整形の石刃石核，楔状石器，サイド・スクレイパー，剥片，礫など約370点余りの石器が出土し，これらの中には良質な黒曜石が含まれている。更に，下大井遺跡や隼人山遺跡，当遺跡の南西部，牛久沼西岸の細長い台地先端部に位置する泊崎（はつさき）城址では，黒曜石のナイフ形石器などが出土している[10)]。下大井遺跡で出土した黒曜石は，信州系及び高原山産であり，当時の人々の他地域との関係を考える上で大変貴重である。これら旧石器時代の遺跡は，小野川や稲荷川沿いの小支谷付近に多くみられ，その谷沿いか谷頭近辺に多い[11)]。このような場所は人々が水を得るだけでなく，動物などもよく集まる場所であったので，水場は同時に狩猟場であったとも思われる[12)]。

縄文時代になり気候が温暖になると海進期に入り，当遺跡周辺の沖積地の多くや，牛久沼にも海水が浸入し

ている[13]。そうした湾奥，入り江沿岸に多くの集落が形成されている。当遺跡周辺では，稲荷川左岸から牛久沼東部にかけての台地縁辺部で，縄文前期から晩期の土器が表面採取されている。今回報告する田宮平遺跡では，縄文時代中・後期（大木式・五領ケ台式・称名寺式）の土器片，石斧，磨り石などを表面採集している[14]。また，城中貝塚〈20〉では縄文早期から晩期の土器や石器，貝刃が出土している[15]。当遺跡北部の小野川・稲荷川流域の天宝喜貝塚〈64〉，天宝喜Ｃ遺跡〈65〉，小茎貝塚〈67〉では，縄文前期から晩期の土器が表面採取され，中でも天宝喜Ｃ遺跡では，かなりの範囲で縄文中期の土器（阿玉台式・加曽利Ｅ式）の散布が見られる。また天宝喜Ｃ遺跡，小茎貝塚では，呪術具と考えられる土版が出土しており，縄文の人々の内面を知る資料である[16]。以上のように，当遺跡周辺の台地上は，遺跡が点在しており，生活に極めて良好な空間を有していたと考えられる。

弥生時代の遺跡は，牛久沼東岸と牛久市東部の河川流域で確認されている。当遺跡周辺では，小馬様台遺跡〈22〉と中ノ台Ｂ遺跡で弥生時代後期の土器片が表面採取されている[17]。

古墳時代の遺跡は，市北部下根東猫穴地区のヤツノ上遺跡，中久喜遺跡[18]，東山遺跡[19]，馬場遺跡[20]，行人田遺跡[21]，中下根遺跡，西ノ原遺跡，隼人山遺跡で，古墳時代中期の集落跡が確認され，古墳時代中期に突如いくつもの大集落が形成される様子が伺える。また，大明神西遺跡〈11〉では，古墳時代前期から後期の土師器片が採集されている[22]。古墳時代の遺跡は，大部分が河川あるいは河川から入り込んでいる支谷に面した舌状台地上や台地縁辺部に存在している。このことは水田を経営していた河川の後背湿地や，谷津に面した高燥の地を選んだことによると思われる[23]。

奈良・平安時代の当地域は，「和名類聚抄」によると，河内郡に属し，当遺跡は河内郡河内郷に比定されている[24]。当時代の遺跡は，河川流域や河川に挟まれた台地上に分布している。当遺跡の北東部下根地域の馬場遺跡，行人田遺跡，東山遺跡，隼人山遺跡，ヤツノ上遺跡，中久喜遺跡，ヤツノ上遺跡と小野川を挟んだ対岸の下大井遺跡で，８世紀初頭から10世紀代の竪穴建物跡が確認されている。行人田遺跡では，９世紀初頭の竪穴建物跡から井ケ谷78号窯式の灰釉陶器長頸瓶が，ヤツノ上遺跡では，平安時代初頭の竪穴建物跡から猿投窯産とされる灰釉陶器短頸壺が出土している。更に，ヤツノ上遺跡で確認された平安時代の掘立柱建物跡の７棟のうちの１棟は，仏堂と思われる２×２間の側柱建物跡が検出され，この掘立柱建物跡の周囲の竪穴建物跡からは「佛」と書かれた墨書土器や灯明皿に使用された坏，仏鉢が出土している。また，下大井遺跡からも，身舎４間×２間で四面に庇が付く掘立柱建物跡が検出されている。建物跡の形状から仏堂的な建物で村落内寺院であった可能性が想定される[25]。８世紀後葉と９世紀後葉の竪穴建物跡からは，「上寺」・「×寺」と書かれた墨書土器，瓦塔片，灯明具として使用された坏，須恵器円面硯，鉄鉢形土器などが出土している。これらのことから，８世紀の後葉から９世紀代に当地域内にも仏教が浸透していたことが想定される[26]。また，稲荷川右岸から牛久沼東部にかけての一本榎遺跡〈10〉，大明神西遺跡，稲荷台遺跡〈16〉では，土師器片・須恵器片が表面採取されているが，集落跡は確認されていない[27]。更に，当時は河川や湖沼，海上を利用した水上交通の利用も盛んに行われていたと考えられている。平安時代になると，牛久市東部の龍ケ崎市と，稲敷市（旧江戸崎市）との市境を，古代官道「東海大道」が小野川を横切るように通っていたと推定されている[28]。当遺跡は小野川･稲荷川に挟まれており，陸路だけでなく，霞ヶ浦や牛久沼などを経由し川をさかのぼり，様々な物資がもたらされた可能性もある。

鎌倉時代になると河内郡は，公領の河内郡と大井荘に分かれ，当遺跡周辺は公領河内郡に含まれる[29]。その後，南北朝から室町時代にかけ，当地域は小田氏の支配下となる。その後小田氏一族の岡見氏が台頭し，当遺跡から南へ約3.5kmほどにある牛久城を居城とし，当地域を支配していく。岡見氏の支城として，当遺跡周辺では

第１図　田宮平遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の１「牛久」）

表１　田宮平遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	田宮平遺跡	○	○			○	○		36	牛久遺跡		○		○			
2	笹塚遺跡		○						37	貝塚台遺跡		○					
3	石瓦遺跡		○						38	河原代遺跡		○					
4	刈谷古墳				○				39	蛇喰遺跡				○			
5	城中A遺跡		○		○				40	貝塚台古墳		○		○			
6	六万部A遺跡				○				41	田宮一里塚							○
7	六万部B遺跡				○				42	前山久保遺跡				○			
8	刈谷遺跡				○				43	山際A遺跡		○					
9	梶窪遺跡				○				44	山際B遺跡		○					
10	一本榎遺跡		○		○				45	道山古墳群				○			
11	大明神西遺跡		○		○				46	守子橋遺跡				○			
12	新地貝塚		○		○				47	坂本遺跡	○						
13	水井神台遺跡		○		○				48	道山下遺跡				○			
14	東林寺城跡		○		○		○		49	稲荷下遺跡				○			
15	身上遺跡		○		○				50	古屋敷遺跡				○			
16	稲荷台遺跡		○						51	坂本遺跡		○					
17	谷田部宿遺跡		○						52	塚原山古墳群				○			
18	愛宕神社古墳				○				53	中宿遺跡				○			
19	陣屋城跡							○	54	根柄遺跡		○		○			
20	城中貝塚		○						55	小屋前遺跡				○			
21	水神塚古墳				○				56	大井遺跡	○			○	○	○	○
22	小馬様台遺跡		○		○				57	五十塚古墳群	○			○			
23	山王前遺跡		○		○				58	郷中塚古墳群				○			
24	山王塚古墳				○				59	高見原A遺跡		○					○
25	明神遺跡		○		○		○		60	孝学院遺跡		○				○	
26	明神塚古墳群				○				61	高崎城跡				○	○	○	○
27	東城台遺跡		○		○				62	高美原B遺跡		○		○			
28	向台遺跡		○		○				63	高見原番外遺跡		○	○	○			
29	鳳王前B遺跡		○		○				64	天宝喜貝塚		○				○	○
30	甲塚遺跡		○		○				65	天宝喜C遺跡	○	○		○		○	○
31	甲塚古墳				○				66	小茎北遺跡		○		○		○	○
32	桜塚古墳群				○				67	小茎貝塚	○	○			○	○	○
33	藤窪遺跡		○						68	小茎南遺跡		○		○	○	○	○
34	衛門廊遺跡				○				69	天宝喜西遺跡		○					○
35	冨士塚古墳		○														

稲荷川左岸に東林寺（とうりんじ）城〈14〉，高崎（たかさき）城がある。戦国期，当地域は北条・岡見氏と反対勢力の佐竹・多賀谷氏が激しく対立した境目であり，戦国末期に至るまで合戦のやむことのない地域であった[30]。

近世になると，当地域は牛久藩となり稲荷川左岸に陣屋が置かれ[31]，現在も陣屋城跡〈19〉として堀や土

塁が残り，当時の面影を偲ぶことができる。

※文中の〈　〉内の番号は，第１図及び第１表の該当番号と同じである。

註

１）日本の地質「関東地方」編集委員会　『日本の地質３　関東地方』　共立出版　1986 年 10 月

２）茨城県教育庁文化課編　『茨城県遺跡地図　地図編』　茨城県教育委員会　2001 年３月

３）牛久市史編さん委員会　『牛久市史料　原始・古代－考古資料編－』　牛久市　1999 年８月

４）茎崎町史編さん委員会　『茎崎町史』　茎崎町　1994 年３月

５）ａ川津法典「一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書１　下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 171 集　2001 年３月

ｂ島田和宏「下大井遺跡２　一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 197 集　2003 年３月

６）小高五十二　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）　ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 81 集　1993 年３月

７）深谷憲二　柴田博行　「牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　中下根遺跡･西ノ原遺跡･隼人山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 113 集　1996 年６月

８）註７に同じ

９）註７に同じ

10）註４に同じ

11）註３に同じ

12）茨城県史編集委員会　『茨城県史　原始古代編』茨城県　1985 年３月

13）註３に同じ

14）註３に同じ

15）牛久市史編さん委員会　『牛久市史　原始古代中世』牛久市　2004 年３月

16）註４に同じ

17）註 15 に同じ

18）荒井保雄　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）　中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 86 集　1993 年９月

19）松浦敏　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）　東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 101 集　1995 年９月

20）白田正子　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）　馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 106 集　1996 年３月

21）註 20 に同じ

22）註３に同じ

23）註 15 に同じ

24）中山信名著　栗田寛補訂　『新編常陸国誌』宮崎報恩会　1969 年

25）川井正一「茎崎町下大井遺跡」『研究ノート』11 号　茨城県教育財団　2002 年６月

26）註 15 に同じ

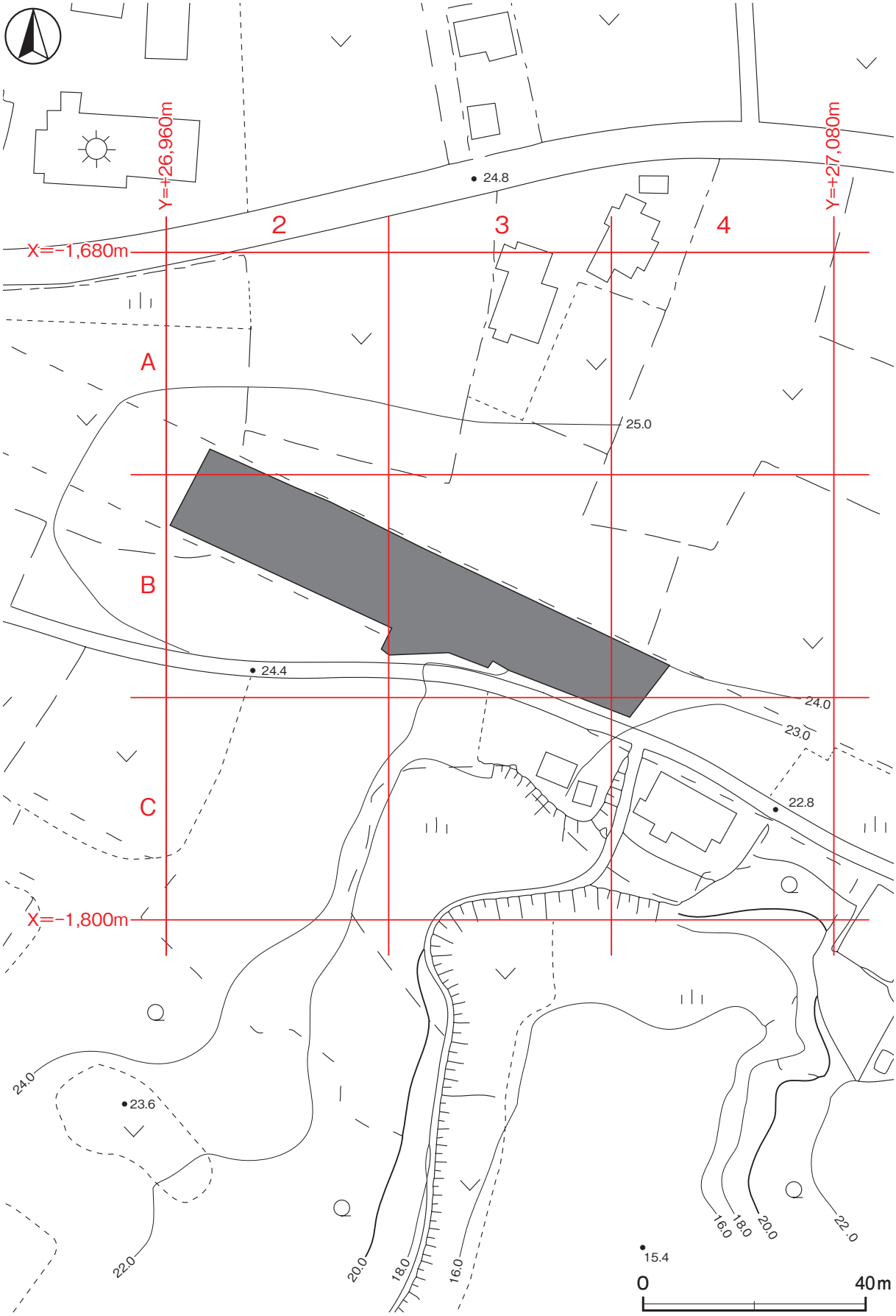
27）註３に同じ

28）註 15 に同じ

29）註 15 に同じ

30）註 15 に同じ

31）註 15 に同じ



第２図　田宮平遺跡調査区設定図（牛久市都市計画図 2,500 分の１）

第３図　田宮平遺跡遺構全体図

第３章　調　査　の　成　果

第１節　調　査　の　概　要

田宮平遺跡は，牛久市の西部に位置し，牛久沼東岸に流入する稲荷川左岸の標高約 23 ～ 24 ｍの台地斜面部に立地している。調査面積は 1,362㎡で，調査前の現況は畑地である。

調査の結果，竪穴建物跡４棟（奈良･平安時代），掘立柱建物跡４棟（平安時代１，室町時代１，時期不明２），溝跡２条（時期不明），道路跡３条（時期不明），陥し穴４基（縄文時代），土坑 58 基（縄文時代２，奈良・平安時代２，室町時代１，時期不明 53），石器集中地点１か所（旧石器時代）を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20㎝）に８箱出土している。主な遺物は，縄文土器（深鉢），土師器（甕・甑），須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・甕・甑），土師質土器（内耳鍋），灰釉陶器（長頸瓶），土製品（支脚・スタンプ形土製品），石器（尖頭器・掻器・削器・鏃・砥石），石核，剥片，金属製品（刀子・釘），椀形滓などである。

第２節　基　本　層　序

調査区西部（Ｂ１j2 区）にテストピット１を，南東部（Ｂ３j8 区）と（Ｂ３h9 ～Ｂ３j8 区）にテストピット２・３を設定し，基本土層（第４図）の観察を行った。以下，観察結果に基づき層序を説明する。

第１層は，黒褐色の耕作土である。層厚は６～ 32㎝である。

第２層は，褐色の旧耕作土である。層厚は 18 ～ 28㎝である。

第３層は，灰黄褐色のソフトローム層への漸移層である。ローム粒子を中量含み，粘性･締まりとも普通で，層厚は５～ 12cm である。

第４層は，にぶい黄褐色のソフトローム層である。締まりが強く，層厚は５～ 22㎝である。

第５層は，にぶい黄褐色のハードローム層への漸移層である。締まりが強く，層厚は 10 ～ 20㎝である。

第６層は，黄褐色のハードローム層である。白色粒子を少量，黒色粒子を微量含み，締まりが極めて強く，層厚は５～ 15㎝である。

第７層は，明黄褐色のハードローム層である。白色粒子・橙色粒子を微量含み，締まりが極めて強く，層厚は 20 ～ 38㎝である。

第８層は，にぶい黄褐色のハードローム層である。白色粒子を少量，黒色粒子を微量含み，締まりが極めて強く，層厚は 16 ～ 22㎝である。

第９層は，にぶい黄橙色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み，締まりが極めて強く，層厚は 14 ～ 22㎝である。

第 10 層は，にぶい黄橙色のハードローム層である。黒色粒子を微量含み，締まりが強く，層厚は 20 ～ 25㎝である。

第 11 層は，黄褐色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み，締まりが極めて強く，層厚は２～ 45㎝である。

第 12 層は，にぶい黄橙色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み，締まりが極めて強く，

層厚は 16 ～ 25cmである。

第 13 層は，にぶい黄褐色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み，締まりが極めて強く，層厚は 10 ～ 30cmである。

第 14 層は，にぶい黄褐色のハードローム層である。浅黄橙色軽石を微量含み，締まりが極めて強く，層厚は 12 ～ 34cmである。

第 15 層は，にぶい黄橙色のハードローム層である。粘土小ブロック・浅黄橙色軽石を微量を含み，締りが強く，層厚は 30cm以上である。

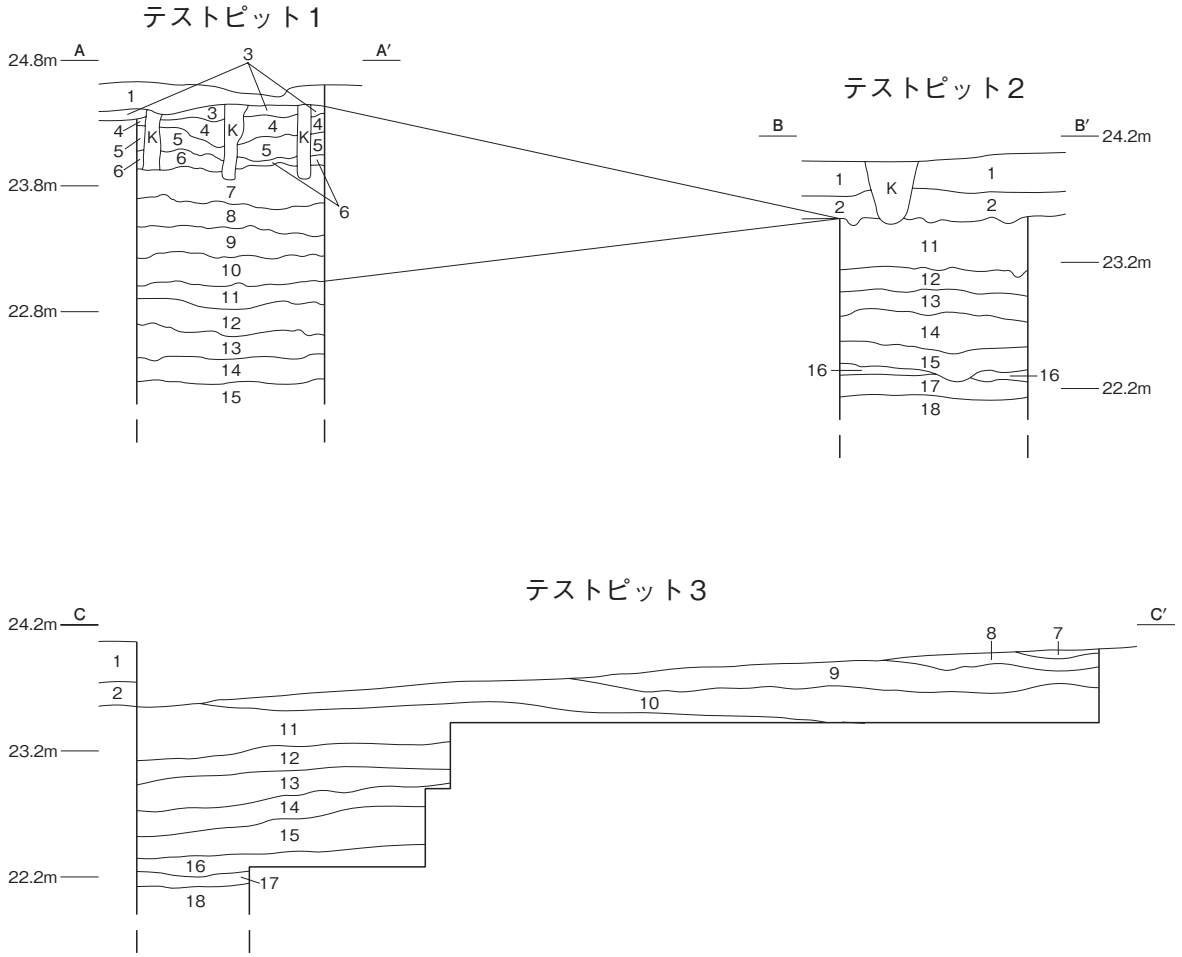
第 16 層は，にぶい黄褐色の粘土層への漸移層である。粘土小ブロックを中量，浅黄橙色軽石を少量含み，粘性・締まりともに強く，層厚は２～ 15cmである。

第 17 層は，暗灰黄色の粘土層である。黒色粒子・橙色粒子を微量含み，粘性・締まりともに強く，層厚は 10 ～ 15cmである。

第 18 層は，灰白色の常総粘土層である。黒色粒子・橙色粒子を微量含み，粘性・締まりともに強い。

なお，テストピット１の第 15 層の下層とテストピット２・３の第 18 層の下層は，いずれも未掘のため，本来の層厚は不明である。

遺構は，西部から中央部においては第３層の上面，東部では第７層の上面で確認した。



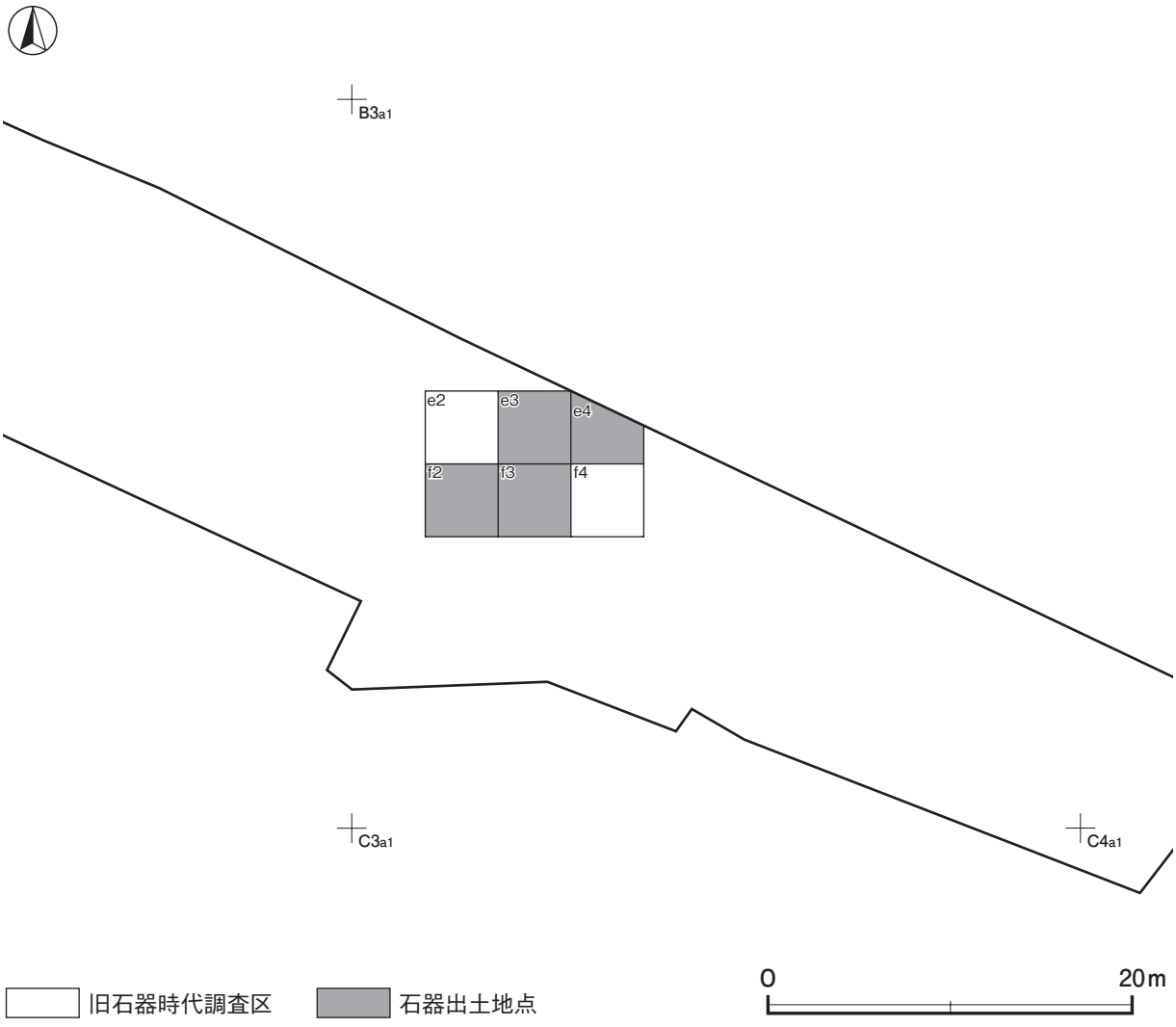
第４図　基本土層図

第３節 遺 構 と 遺 物

１　旧石器時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，石器集中地点１か所を確認した。調査は，石器が採取できた地点に４ｍ四方のグリッドを設定し，調査範囲を拡張しながらローム層の掘削を行った。調査区は南北８ｍ，東西 12 ｍで，調査面積は 96㎡である。

出土した石器類の総数は，84 点である。出土した石器類すべてに通し番号を付し，観察表を掲載した。石器及び二次調整剥片，特徴的な剥片については実測図を掲載し，実測番号を観察表の備考欄に記載した。



第５図　旧石器時代調査区設定図

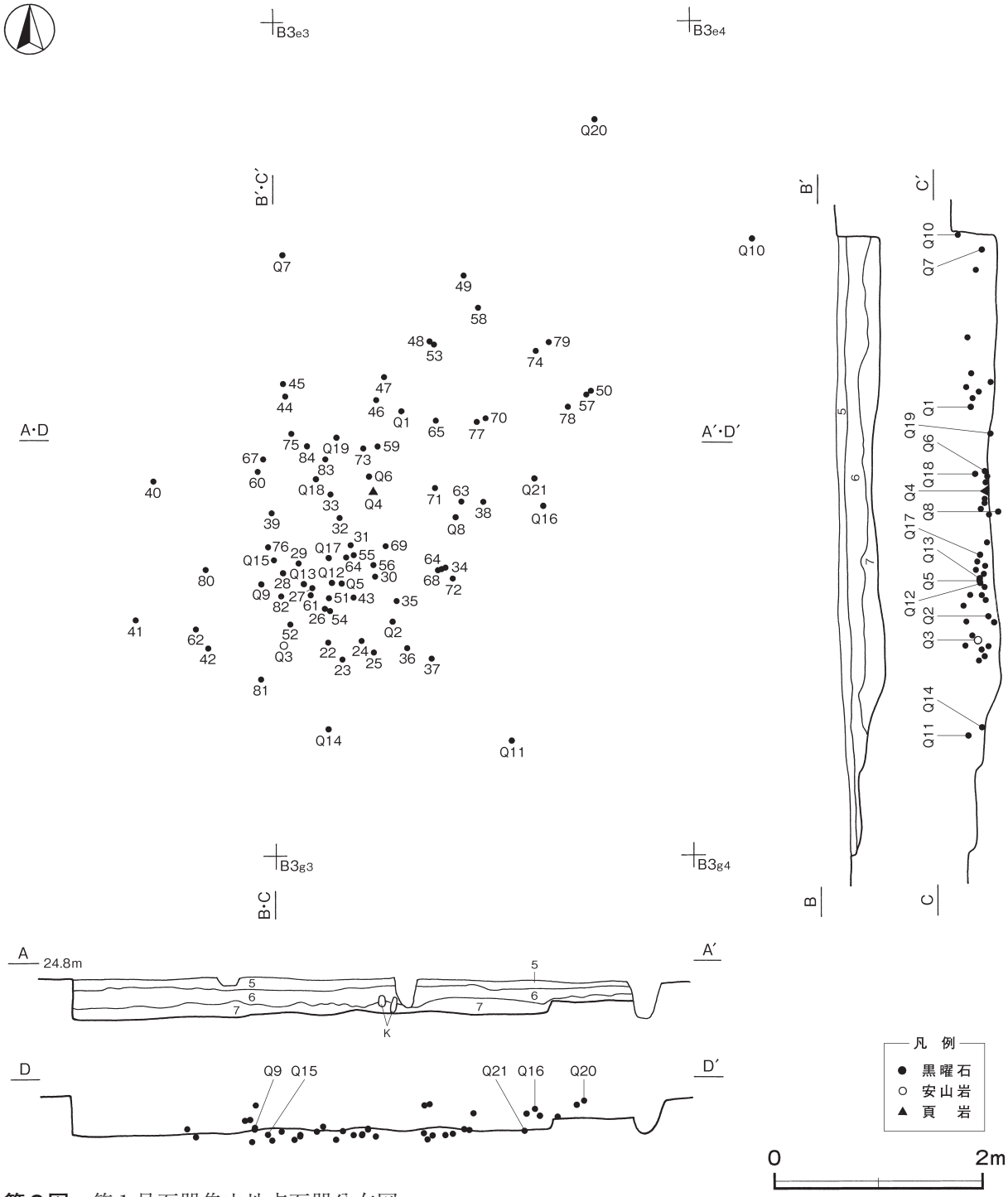
石器集中地点

第１号石器集中地点（第６～８図）

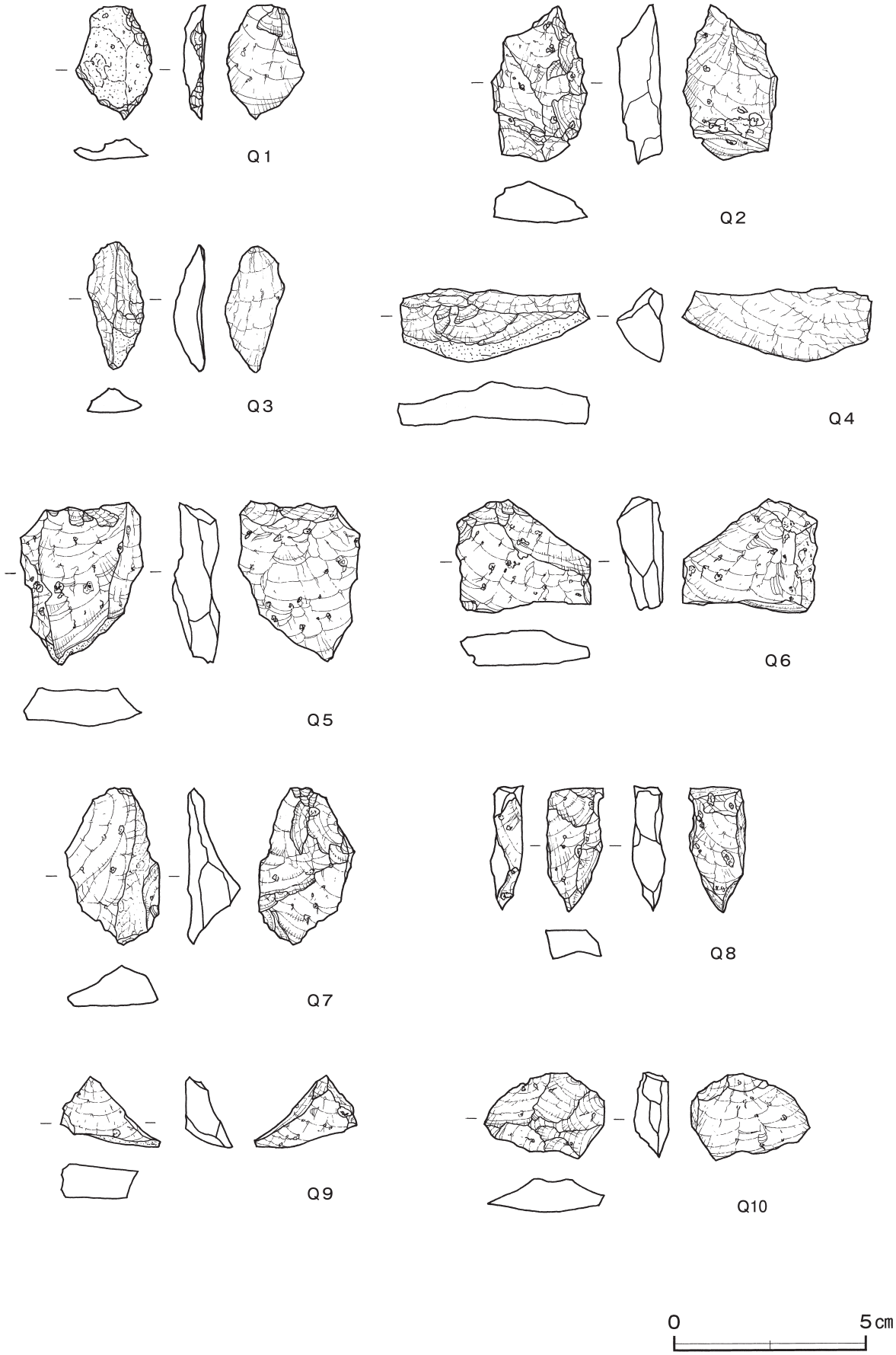
位置　調査区のＢ３e3～Ｂ３f3区，標高24ｍほどの平坦な台地上に位置している。

遺物出土状況　掻器１点（黒曜石），削器１点（黒曜石），二次調整剥片１点（安山岩），剥片81点が，基本層序の第５層（ハードローム層漸移層），第６・７層（ハードローム層）から出土している。石材は，安山岩１点，頁岩１点，黒曜石82点である。

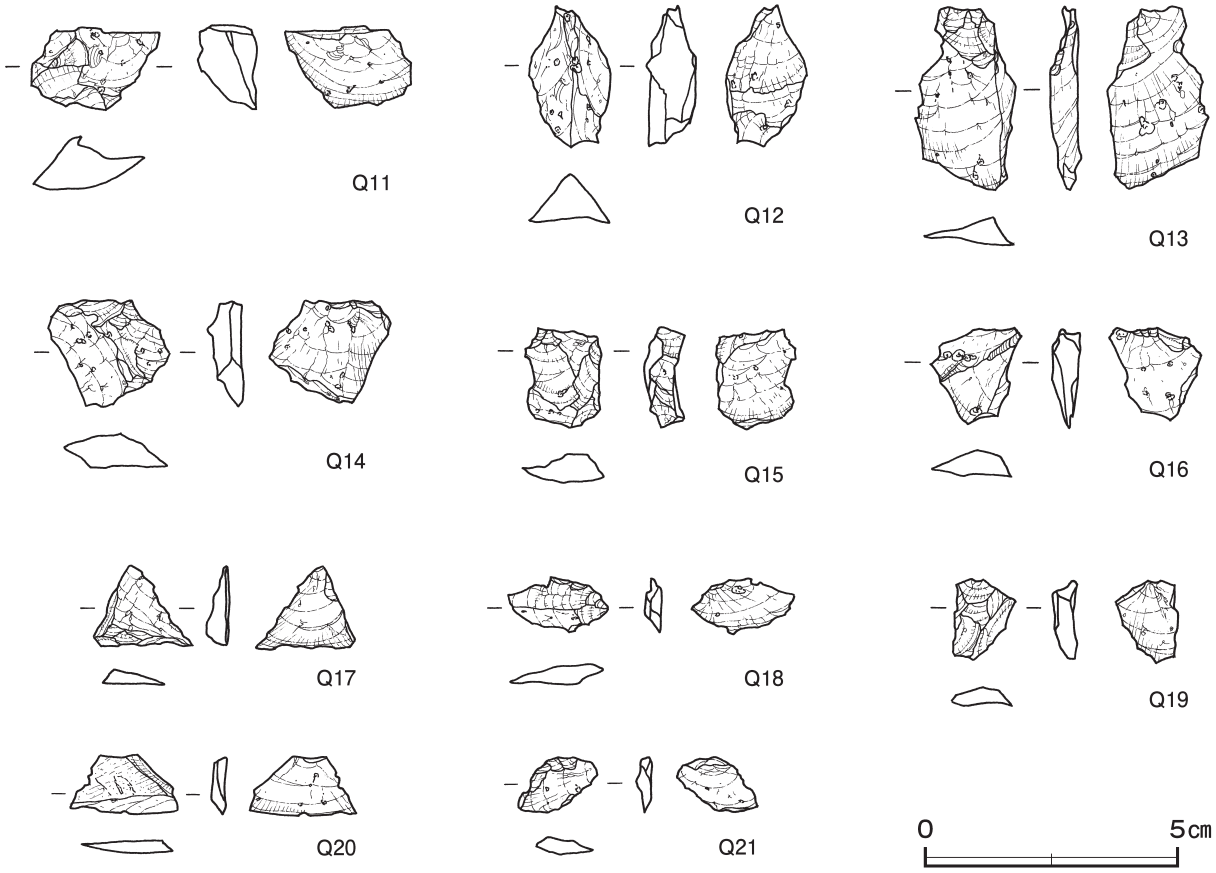
所見　時期は，出土層位から後期旧石器時代に比定できる。出土石器類の大部分が黒曜石の剥片であることから，小振りな母岩から製品を作った石器製作跡であったと考えられる。



第６図　第１号石器集中地点石器分布図



第７図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(1)



第８図　第１号石器集中地点出土遺物実測図(2)

第１号石器集中地点出土遺物観察表（第７・８図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	標　高	備　考
1	掻器	3.1	2.0	0.7	5.18	黒曜石	縦長剥片を素材とし，主要剥離面側からの急角度の調整をほぼ全周に施す	Ｂ３e3	24.441	Ｑ１ PL ８・10
2	削器	4.1	2.6	1.2	9.70	黒曜石	縦長剥片を素材とし，１側縁に主要剥離面側からの連続した急角度の調整を施す　打面，剥片下端部及び左側縁を欠く	Ｂ３f3	24.279	Ｑ２ PL ８・10
3	二次調整剥片	3.3	1.5	0.8	2.71	安山岩	２次加工を有する剥片　縦長剥片の１側縁の一部に細かい調整を施す	Ｂ３f3	24.407	Ｑ３ PL ８・10
4	剥片	1.4	5.0	1.2	9.98	頁岩	横長剥片　背面に自然面と前段階の同一方向の別剥離面を有する　剥片の左右先端部を欠く　打面は複剥離面	Ｂ３f3	24.283	Ｑ４　PL10
5	剥片	4.2	3.2	1.2	14.28	黒曜石	縦長剥片　背面に前段階の同一方向からの剥離面を有する　下端部に自然面を残し打面は複剥離面	Ｂ３f3	24.327	Ｑ５　PL10
6	剥片	3.0	3.5	1.2	10.66	黒曜石	横長剥片　元は縦長剥片であるが，剥片の下部を主要剥離面側からの加圧によって折断している　打面は単剥離面　一部に節理面を残す	Ｂ３f3	24.283	Ｑ６　PL10
7	剥片	4.1	2.5	1.4	8.05	黒曜石	縦長剥片　背面に前段階の剥離面と自然面を残し主要剥離面は打点付近の側縁に細かい調整を施し，下半部に石核底面を残す	Ｂ３e3	24.307	Ｑ７　PL10
8	剥片	3.3	1.5	0.8	4.16	黒曜石	縦長剥片　打面は単剥離面　剥片の左右側縁を欠く	Ｂ３f3	24.196	Ｑ８　PL10
9	剥片	2.6	1.6	1.3	3.88	黒曜石	横長剥片　下端部は石核底面の自然面を残す　背面側からの加圧によって剥片の右側を欠く	Ｂ３f2	24.320	Ｑ９　PL10
10	剥片	2.3	3.1	0.9	3.48	黒曜石	横長剥片　背面に前段階の多方向の剥離面　打面は複剥離面	Ｂ３e4	24.549	Ｑ10　PL10
11	剥片	1.7	2.5	1.2	3.23	黒曜石	横長剥片　打面は複剥離面　背面に前段階の多方向の剥離面	Ｂ３f3	24.470	Ｑ11
12	剥片	2.8	1.6	1.0	3.19	黒曜石	縦長剥片　両面に前段階の剥離面　主要剥離面側からの加圧によって剥片の右側を欠く	Ｂ３f3	24.336	Ｑ12
13	剥片	3.6	2.0	0.6	3.05	黒曜石	縦長剥片　背面に前段階の同一方向の剥離面　打面側からの加圧によって剥片の右側を欠く　ナイフ形石器の素材?	Ｂ３f3	24.326	Ｑ13　PL10
14	剥片	2.3	2.1	0.9	2.74	黒曜石	横長剥片　打面は複剥離面　背面に前段階の多方向の別剥離面　主要剥離面側からの加圧により，剥片の下端部を欠く	Ｂ３f3	24.291	Ｑ14
15	剥片	2.0	1.6	0.8	2.08	黒曜石	縦長剥片　打面及び剥片の下端部，右側縁部を欠く　背面に前段階の多方向の剥離面を残す	Ｂ３f2	24.218	Ｑ15
16	剥片	1.9	1.8	0.6	1.79	黒曜石	縦長剥片　背面に前段階の剥離面を残し，剥片の両側縁部を主要剥離側からの加圧により欠く　打面は複剥離面	Ｂ３f3	24.459	Ｑ16
17	剥片	1.9	1.7	0.5	0.88	黒曜石	横長剥片　背面に前段階の剥離面と，その下端部に石核底面を有する　背面側からの加圧により剥片の左側を欠く	Ｂ３f3	24.360	Ｑ17
18	剥片	1.2	1.9	0.4	0.72	黒曜石	横長剥片　背面は主要剥離の打撃方向に直行方向の前段階の前段階の剥離面を有する	Ｂ３f3	24.363	Ｑ18
19	剥片	1.6	1.3	0.5	0.54	黒曜石	縦長剥片　背面は多方向の前段階の剥離面を有する	Ｂ３e3	24.240	Ｑ19
20	剥片	1.2	2.1	0.3	0.52	黒曜石	横長剥片　背面に前段階の剥離面と自然面を残す打面は単剥離面	Ｂ３e3	24.545	Ｑ20

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	標　高	備　考
21	剥片	1.7	1.0	0.4	0.48	黒曜石	横長剥片　背面は主要剥離面の打撃方向と直交方向の前段階の剥離面　打面は複剥離面	Ｂ３f3	24.250	Ｑ21
22	剥片	1.9	1.3	0.4	0.85	黒曜石	背面に自然面残存	Ｂ３f3	24.462	
23	剥片	1.3	0.8	0.5	0.34	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.420	
24	剥片	1.5	0.7	0.2	0.12	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.458	
25	剥片	1.8	1.4	0.5	0.63	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.378	
26	剥片	0.2	0.1	0.2	0.14	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.556	
27	剥片	1.2	1.0	0.4	0.14	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.352	
28	剥片	1.3	0.8	0.3	0.78	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.399	
29	剥片	0.9	0.9	0.2	0.10	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.377	
30	剥片	1.2	0.6	0.4	0.19	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.347	
31	剥片	1.0	0.7	0.3	0.17	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.267	
32	剥片	1.4	0.9	0.2	0.21	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.293	
33	剥片	0.9	0.9	0.2	0.12	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.340	
34	剥片	0.6	0.5	0.4	0.10	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.397	
35	剥片	1.1	0.5	0.3	0.08	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.311	
36	剥片	1.0	0.8	0.2	0.12	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.329	
37	剥片	1.2	0.6	0.3	0.11	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.361	
38	剥片	1.2	1.1	0.2	0.22	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.310	
39	剥片	1.2	0.9	0.4	0.35	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f2	24.411	
40	剥片	1.3	0.9	0.6	0.56	黒曜石	背面に自然面残存	Ｂ３f2	24.291	
41	剥片	1.3	1.1	0.3	0.41	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f2	24.567	
42	剥片	1.5	0.6	0.4	0.29	黒曜石	背面に自然面残存	Ｂ３f2	24.561	
43	剥片	1.1	0.9	0.6	0.37	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.351	
44	剥片	1.6	1.2	0.6	0.68	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３e3	24.361	
45	剥片	1.2	0.9	0.2	0.15	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.246	
46	剥片	0.9	0.9	0.5	0.18	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.478	
47	剥片	1.3	1.0	0.2	0.30	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.439	
48	剥片	1.2	0.7	0.2	0.11	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.528	
49	剥片	1.0	0.8	0.3	0.22	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３e3	24.384	
50	剥片	1.1	0.7	0.2	0.10	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.535	
51	剥片	1.0	0.8	0.4	0.17	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.486	
52	剥片	0.7	0.6	0.2	0.06	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.249	
53	剥片	1.6	0.9	0.2	0.18	黒曜石	自然面残存	Ｂ３e3	24.525	
54	剥片	0.4	0.2	0.01	0.01 未満	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.274	
55	剥片	1.8	1.0	0.7	0.35	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.242	
56	剥片	1.0	0.4	0.1	0.03	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.248	
57	剥片	0.7	0.7	1.6	0.05	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.505	
58	剥片	0.9	0.6	0.7	0.11	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３e3	24.290	
59	剥片	1.1	0.8	0.2	0.09	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.297	
60	剥片	0.9	0.6	0.2	0.12	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f2	24.377	
61	剥片	0.6	0.4	0.01	0.01 未満	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.223	
62	剥片	1.2	5.8	0.2	0.12	黒曜石	自然面残存	Ｂ３f2	24.289	
63	剥片	0.7	0.6	0.1	0.02	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.231	
64	剥片	1.5	1.3	0.3	0.58	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.199	
65	剥片	1.0	0.7	0.2	0.23	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.543	
66	剥片	0.9	04	0.2	0.05	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.238	
67	剥片	2.0	1.3	0.3	0.45	黒曜石	自然面残存	Ｂ３f2	24.555	
68	剥片	1.2	0.7	0.2	0.11	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.222	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	標　高	備　考
69	剥片	1.0	0.7	0.3	0.11	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.245	
70	剥片	1.0	0.6	0.4	0.14	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.470	
71	剥片	1.8	1.4	0.4	0.50	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.250	
72	剥片	1.6	1.1	0.2	0.39	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３f3	24.232	
73	剥片	1.1	0.3	0.1	0.05	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.259	
74	剥片	1.0	0.9	2.0	0.19	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	Ｂ３e3	24.441	
75	剥片	0.8	0.7	0.2	0.05	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.271	
76	剥片	1.1	0.8	0.3	0.13	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f2	24.344	
77	剥片	0.5	0.5	1.0	0.01	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.283	
78	剥片	0.9	0.8	0.2	0.11	黒曜石	自然面残存	Ｂ３e3	24.402	
79	剥片	0.8	0.7	0.4	0.17	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３e3	24.430	
80	剥片	1.4	0.6	0.1	0.08	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f2	24.237	
81	剥片	0.6	0.2	0.3	0.01	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f2	24.183	
82	剥片	0.7	0.7	0.3	0.10	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	Ｂ３f3	24.196	
83	剥片	1.7	0.9	0.3	0.49	黒曜石	自然面残存	Ｂ３f3	24.234	
84	剥片	1.2	0.8	0.2	0.11	黒曜石	自然面残存	Ｂ３f3	24.193	

２　縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，陥し穴４基，土坑２基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

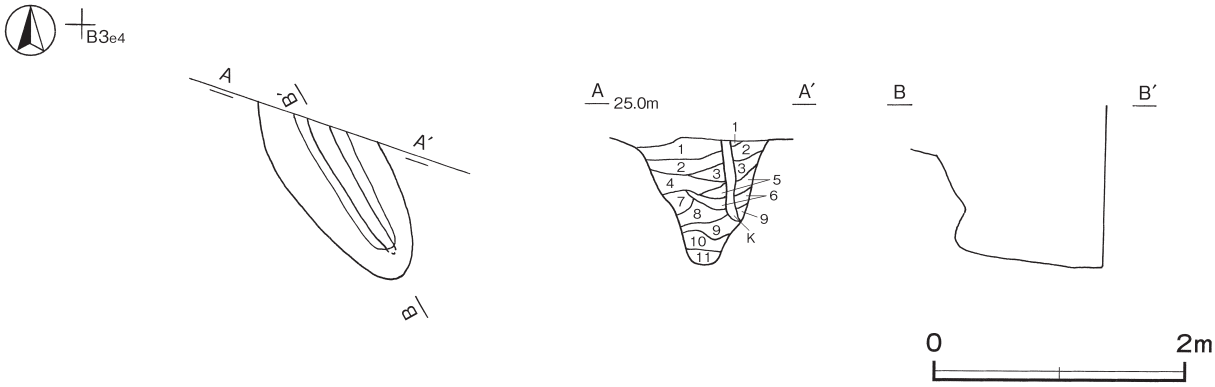
(1)　陥し穴

第１号陥し穴（第９図）

位置　調査区中央部のＢ３e4 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状　北部が調査区域外に延びているため，北西・南東径は 1.48 m，北東・南西径は 0.78 mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ，長径方向はＮ－ 32°－Ｗと推測できる。深さは 90 ～ 100㎝で，底面は南東側から中央部に向かって傾斜している。北東・南西径の断面はＵ字状を呈している。南東壁は内彎して立ち上がり，くびれ部から外傾している。底面からくびれ部までの高さは，30㎝である。

覆土　11 層に分層できる。多くの層にロームブロックや，黒色土ブロックが含まれていることから，埋め戻されている。



第９図　第１号陥し穴実測図

土層解説

1　灰 黄 褐 色　ローム粒子中量，黒色土ブロック少量
2　にぶい黄褐色　ローム粒子中量，黒色土ブロック微量
3　灰 黄 褐 色　ロームブロック・黒色土ブロック少量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック少量，黒色土ブロック微量
5　黄　褐　色　ロームブロック少量
6　にぶい黄褐色　黒色土ブロック中量，ロームブロック少量
7　黄　褐　色　ロームブロック中量，黒色土ブロック微量
8　灰 黄 褐 色　ローム粒子多量，黒色土ブロック微量
9　暗　褐　色　ロームブロック中量，黒色土ブロック微量
10　にぶい黄褐色　ローム粒子多量，黒色土ブロック微量
11　黒　褐　色　ローム粒子少量，黒色土ブロック微量

所見　時期は，出土遺物がないため明確ではないが，形状から縄文時代と考えられる。

第２号陥し穴（第 10 図）

位置　調査区中央部のＢ３f1 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第 19・20・46 号土坑に掘り込まれている。

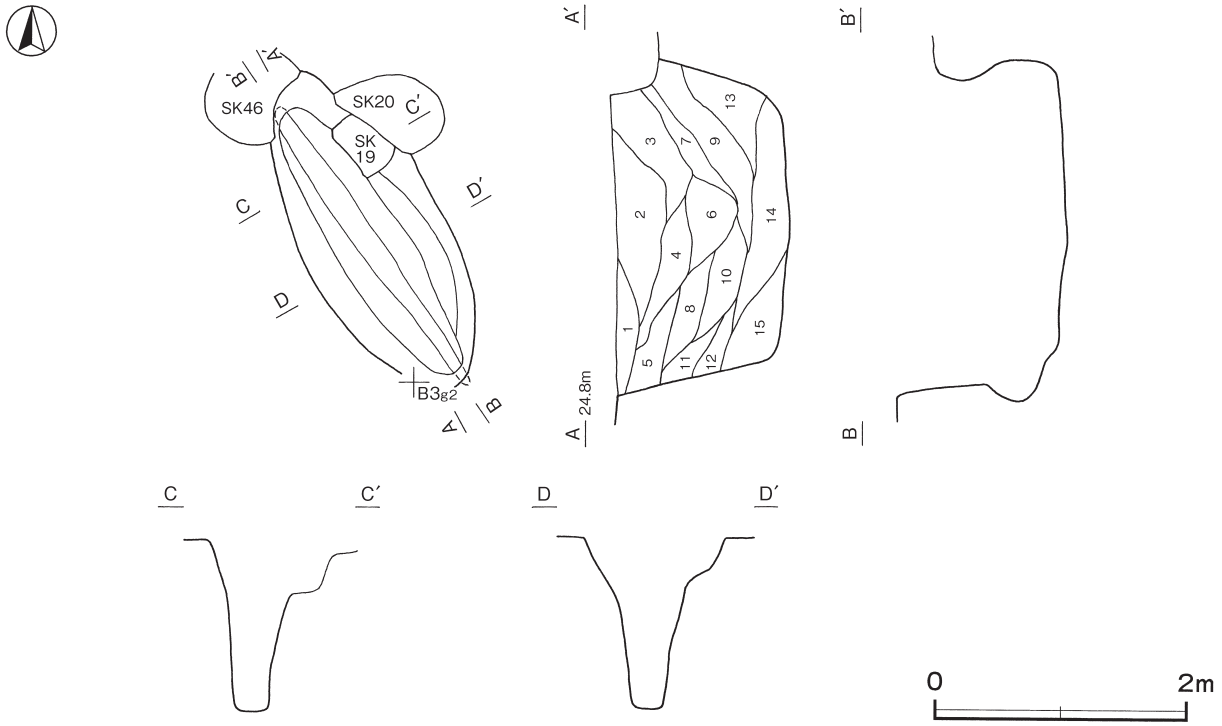
規模と形状　長径 2.70 m，短径 1.14 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 28°－Ｗである。深さは 134cmで，底面はほぼ平坦である。短径の断面はＵ字状を呈している。長径壁は内彎して立ち上がり，北西壁はくびれ部から外傾し，南東壁はくびれ部から直立している。底面からくびれ部までの高さは，北壁が 75cm，南壁が 40cmである。

覆土　15 層に分層できる。ロームブロックや，黒色土ブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

1　にぶい黄橙色　ローム粒子中量
2　灰 黄 褐 色　ローム粒子中量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック少量，橙色粒子微量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，橙色粒子微量
5　にぶい黄褐色　ロームブロック・黒色土ブロック微量
6　褐　灰　色　ロームブロック・黒色土ブロック少量
7　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，黒色土ブロック微量
8　にぶい黄褐色　黒色土ブロック・ローム粒子微量
9　褐　灰　色　黒色土ブロック少量，ロームブロック微量
10　褐　　色　ロームブロック・黒色土ブロック少量
11　にぶい黄橙色　ローム粒子多量，黒色土ブロック微量
12　にぶい黄褐色　ローム粒子多量，黒色土ブロック少量
13　褐　灰　色　砂粒少量，ロームブロック・黒色土ブロック微量
14　灰 黄 褐 色　ロームブロック・黒色土ブロック・砂粒少量
15　にぶい黄褐色　ロームブロック・黒色土ブロック・砂粒少量

所見　時期は，出土遺物がないため明確ではないが，形状から縄文時代と考えられる。



第 10 図　第２号陥し穴実測図

第３号陥し穴（第 11 図）

位置　調査区中央部のＢ３g1 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第１号道路に掘り込まれている。

規模と形状　長径 2.66 m，短径 0.85 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 36°－Ｗである。深さは 110cmで，底面はほぼ平坦である。短径の断面はＵ字状を呈している。長径壁は内彎して立ち上がり，北西壁はくびれ部から直立し，南東壁はくびれ部から外傾している。底面からくびれ部までの高さは，北西壁が 40cm，南東壁が 25cmである。

ピット　２か所。Ｐ１は径 15cm，深さ 34cm，Ｐ２は径 12cm，深さ 22cmである。逆茂木が立てられていた痕跡の可能性がある。

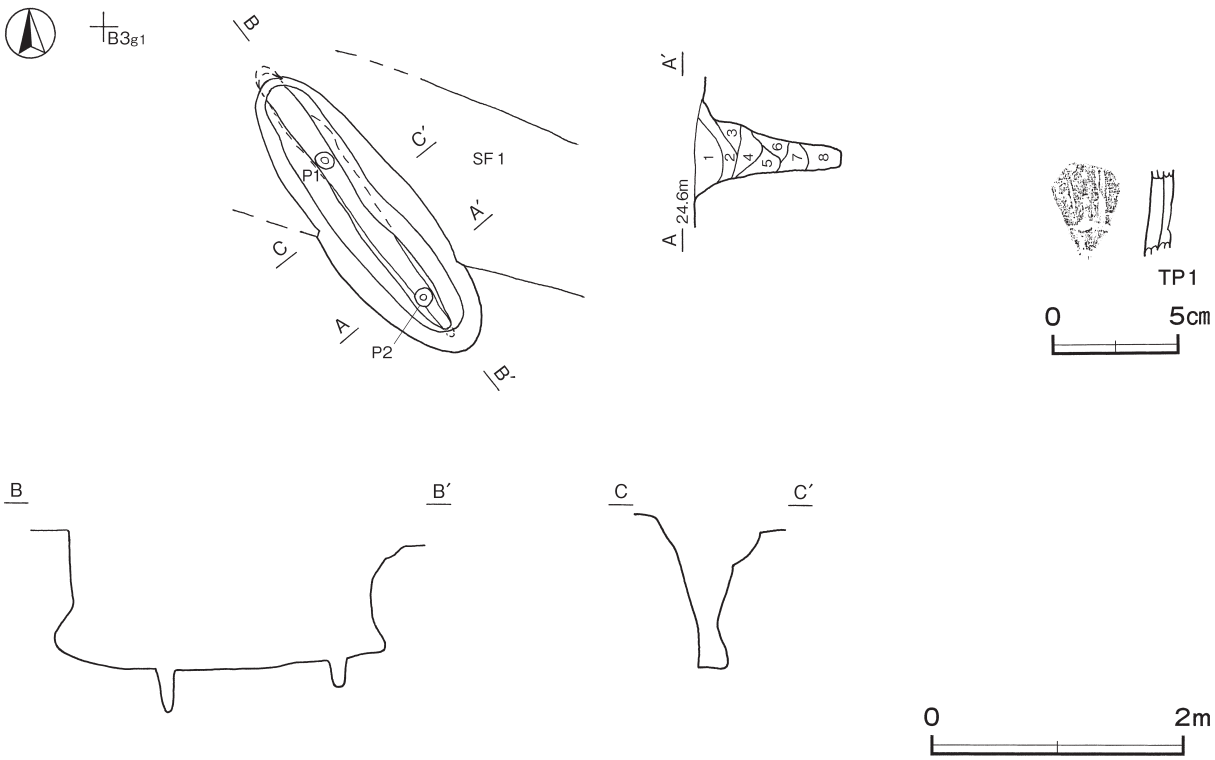
覆土　８層に分層できる。ロームブロックや黒色土ブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

1	灰黄褐色	ロームブロック少量・黒色土ブロック微量	
2	にぶい黄橙色	ローム粒子中量・黒色土ブロック微量	
3	にぶい黄褐色	ロームブロック少量，黒色土ブロック微量	
4	にぶい黄褐色	ロームブロック中量，黒色土ブロック微量	
5	褐灰色	ロームブロック少量	
6	にぶい黄褐色	ロームブロック中量	
7	にぶい黄橙色	ローム粒子多量	
8	灰黄褐色	ロームブロック少量	

遺物出土状況　縄文土器片１点（深鉢）が出土している。TP １は，埋め戻す過程で混入したものと思われる。

所見　時期は，出土土器や形状から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 11 図　第３号陥し穴・出土遺物実測図

第３号陥し穴出土遺物観察表（第 11 図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	断面三角形の微隆起をもつ	覆土中	

第４号陥し穴（第 12 図）

位置　調査区中央部のＢ２g0 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

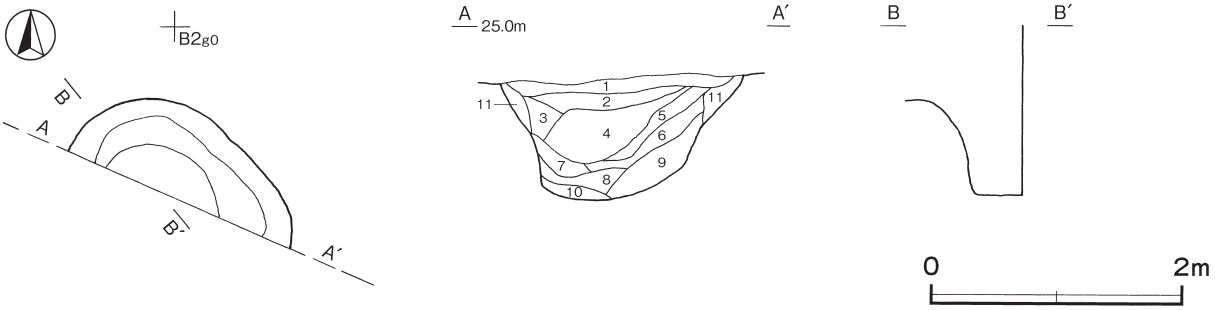
規模と形状　南部が調査区外に延びているため，北西・南東径は 1.90 m，北東・南西径は 0.72 mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ，長径方向はＮ－ 66°－Ｗと推測できる。深さは 98cmで，底面は平坦である。北西・北東壁は緩やかに外傾している。

覆土　11 層に分層できる。第１層はローム粒子を含む自然堆積層である。第２～ 11 層はロームブロックや黒色土ブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子微量
2　にぶい黄褐色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック微量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
5　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，黒色土ブロック少量
6　黄　褐　色　ロームブロック・黒色土ブロック微量
7　明 黄 褐 色　ロームブロック少量
8　褐　　色　ロームブロック少量
9　明 黄 褐 色　黒色土ブロック少量，ロームブロック微量
10　黄　橙　色　ロームブロック少量
11　黄　褐　色　ロームブロック微量

所見　時期は，出土遺物がないため明確ではないが，形状から縄文時代と考えられる。



第 12 図　第４号陥し穴実測図

表２　縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径 × 短径(m)	規模 深さ (cm)	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
1	Ｂ３e4	Ｎ－32°－Ｗ	［楕円形］	(1.48) × (0.78)	90 ～ 100	平坦	内彎・外傾	人為		
2	Ｂ３f1	Ｎ－28°－Ｗ	［楕円形］	(2.70) × 1.14	134	平坦	内彎・外傾・直立	人為		本跡→ SK19・20・46
3	Ｂ３g1	Ｎ－36°－Ｗ	［楕円形］	(2.66) × (0.85)	110	平坦	内彎・外傾・直立	人為	縄文土器	本跡→ SF 1
4	Ｂ２g0	Ｎ－66°－Ｗ	［楕円形］	(1.90) × (0.72)	98	平坦	外傾	人為		

(2)　土坑

第６号土坑（第 13 図）

位置　調査区のＢ２e8 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

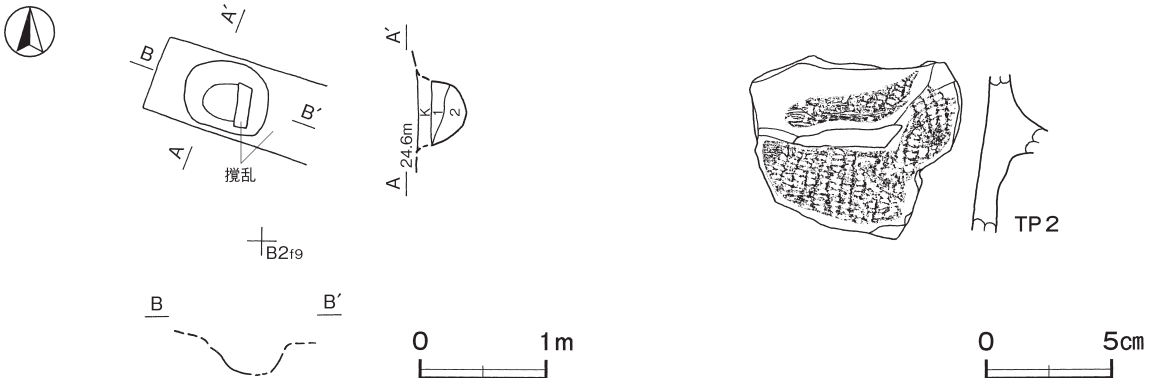
規模と形状　上部と底部が攪乱を受けており，北西･南東径 0.68 m，北東･南西径 0.56 mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ，長径方向はＮ－ 68°－Ｗと推測できる。深さは 26cmで，底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　２層に分層できる。両層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量　　2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片１点（深鉢）が覆土上層から出土している。TP ２は，埋め戻す過程で混入したものと思われる。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期と考えられる。



第 13 図　第６号土坑・出土遺物実測図

第６号土坑出土遺物観察表（第 13 図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP ２	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	０段多条縄文ＲＬ→縄文磨消→把手貼付	覆土中	PL ９

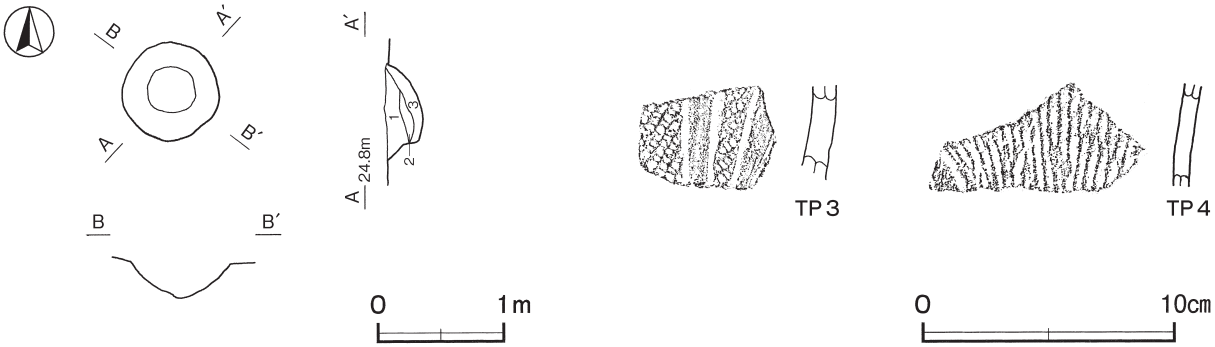
第 36 号土坑（第 14 図）

位置　調査区のＢ３f2 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状　長径 0.78m，短径 0.76 mの円形である。深さは 28㎝で，底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　３層に分層できる。第２・３層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。第１層は，第２・３層が埋まった後の窪地に流れ込んだ層である。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子微量　　3　黄　褐　色　ロームブロック中量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量



第 14 図　第 36 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器片５点（深鉢）が覆土中から出土している。TP ３・TP ４は，埋め戻す過程で混入したものと思われる。

所見　時期は，出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

第 36 号土坑出土遺物観察表（第 14 図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	文様の特徴ほか	出土位置	備　考
TP ３	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単節縄文ＲＬ→沈線間磨消	覆土中	PL ９
TP ４	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄褐	無節縄文→一部磨消	覆土中	

表３　縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
6	Ｂ２e8	Ｎ－68°－Ｗ	［楕円形］	(0.68) × (0.56)	26	皿状	緩斜	人為	縄文土器	
36	Ｂ３f2	－	円形	0.78 × 0.76	28	皿状	緩斜	人為	縄文土器	

３　奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，竪穴建物跡４棟，掘立柱建物跡１棟，土坑２基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第 15・16 図）

位置　調査区中央部のＢ３f5 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状　長軸 3.97 m，短軸 3.55 mの方形で，主軸方向はＮ－８°－Ｅである。壁高は３～ 12cmで，外傾している。北壁には粘土が貼り付けられている。

床　平坦な貼床で，東西壁際を除いて踏み固められている。南西コーナー部は地山を掘り残し，２～５cmほど高くなっている。貼床は，第 11 層を２～ 10cmほど埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 130cmで，燃焼部幅は 45cmである。全体を楕円形に床面から 20cmほど掘りくぼめ，ロームブロックや粘土ブロックを含んだ第９・10 層を埋土して構築されている。袖部は，地山の上に締まりの強いロームブロックや粘土ブロックを含んだ第６～８層を積み上げて構築されている。燃焼部及び煙道部は壁外に 75cm掘り込まれ，火床部から外傾している。

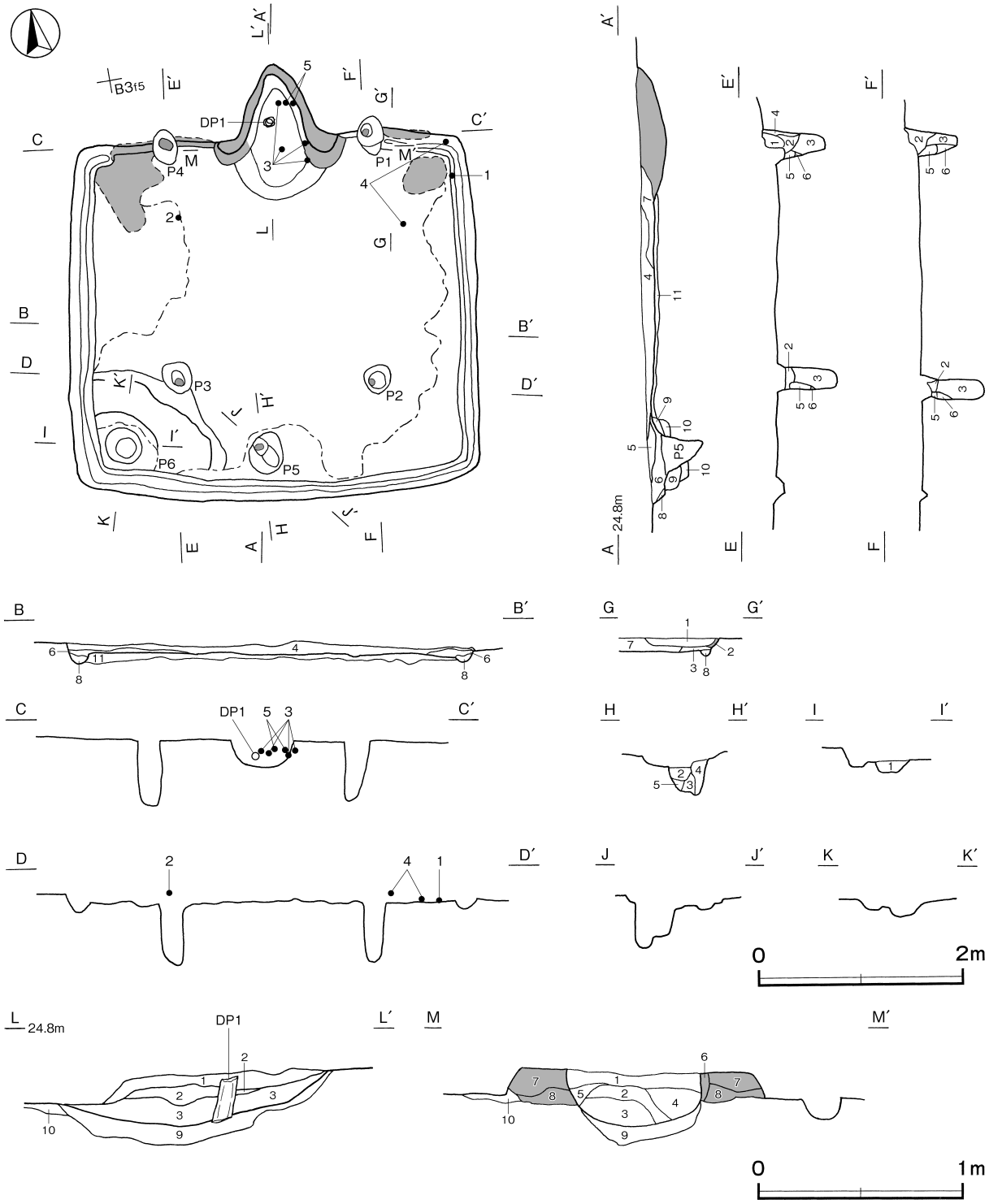
竈土層解説

1　灰黄褐色　砂質粒子中量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子・砂質粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　にぶい黄褐色　焼土ブロック・砂質粒子中量，炭化粒子微量
5　暗　褐　色　砂質粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
6　灰　赤　色　粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土粒子少量
7　赤　灰　色　粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
8　赤　灰　色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量，焼土ブロック微量
9　にぶい黄褐色　焼土粒子中量，粘土ブロック少量
10　にぶい黄褐色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量

ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ 48 ～ 68cmで，配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ 44cmで，配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６は深さ 10cmで性格は不明である。第１～４層は柱抜き取り後の堆積層，第５・６層は埋土である。

ピット土層解説（Ｐ１～Ｐ６共通）

1　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
4　黄　褐　色　ローム粒子多量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　にぶい黄褐色　ロームブロック少量



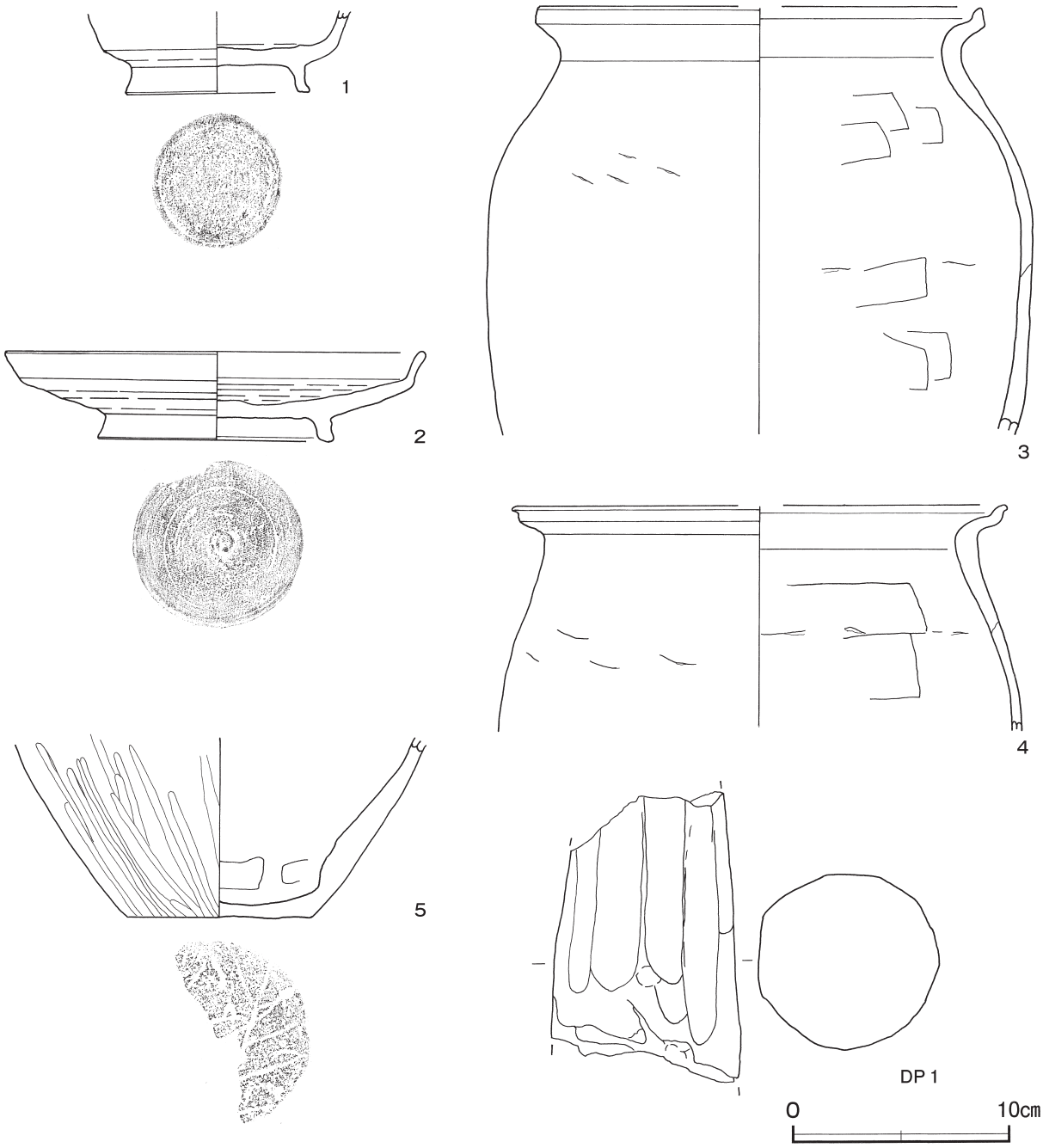
第 15 図　第１号竪穴建物跡実測図

覆土　10層に分層できる。第１層は竈が崩落して流入した層，第２層は粘土層，第３層はロームブロックが主体の層で，棚状施設が崩れた層の可能性がある。第４～７層は，各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第８層は壁溝の覆土，第９・10層はＰ５の埋土，第11層は貼床の構築土である。

土層解説

1　灰　褐　色　粘土ブロック少量，焼土粒子微量
2　浅 黄 褐 色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック微量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
5　褐　　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量
7　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量
8　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
9　暗　褐　色　ロームブロック･黒色土ブロック少量（締まり強い）
10　暗　褐　色　ロームブロック・黒色土ブロック少量
11　褐　　色　ロームブロック・黒色土ブロック少量

遺物出土状況　土師器片63点（甕類），須恵器片20点（坏15，高台付坏１，盤２，甕類２），土製品１点（支脚），金属製品３点（不明鉄製品），鉄滓４点（51.16g）が，北壁際を中心に覆土中層から床面にかけて出土し



第16図　第１号竪穴建物跡出土遺物実測図

ている。１・４は床面から出土した破片で，３・５は竈の燃焼部から出土した二次被熱を受けていない破片であることから，いずれも建物の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

所見　北壁に粘土が貼り付けてあることから，棚が設けられていた可能性がある。時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。

第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 16 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	高台付坏	－	(3.7)	8.5	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り	床面	40%
2	須恵器	盤	19.3	4.1	10.8	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中層	70%　PL 6 新治窯
3	土師器	甕	[20.2]	(19.8)	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部内面ヘラナデ　輪積痕	竈覆土中層	10%
4	土師器	甕	[22.6]	(10.4)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部内面ヘラナデ 輪積痕	床面	10%
5	土師器	甕	－	(8.2)	8.2	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端ヘラ磨き　体部内面ナデ　底部木葉痕	竈覆土中層	10%

番号	器　種	長さ	最大径	最小径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 1	支脚	(13.4)	8.6	7.0	(790.5)	長石・石英・雲母	橙	ヘラナデ	竈覆土中層	PL 9

第２号竪穴建物跡（第 17・18 図）

位置　調査区中央部のＢ３d2 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第２号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　北部が調査区域外へ延びていることから，東西軸は 3.98 mで，南北軸は 3.44 mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき，主軸方向はＮ－ 13°－Ｅである。壁高は 23 ～ 31cmで，ほぼ直立している。

床　平坦な貼床で，全面が踏み固められている。貼床は，第９～ 11 層を２～ 15cmほど埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

ピット　Ｐ１は深さ 15cmで，配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。第１～３層は柱抜き取り後の堆積層，第４層は埋土と考えられる。

ピット土層解説

1　褐　　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
4　黄　褐　色　ロームブロック少量

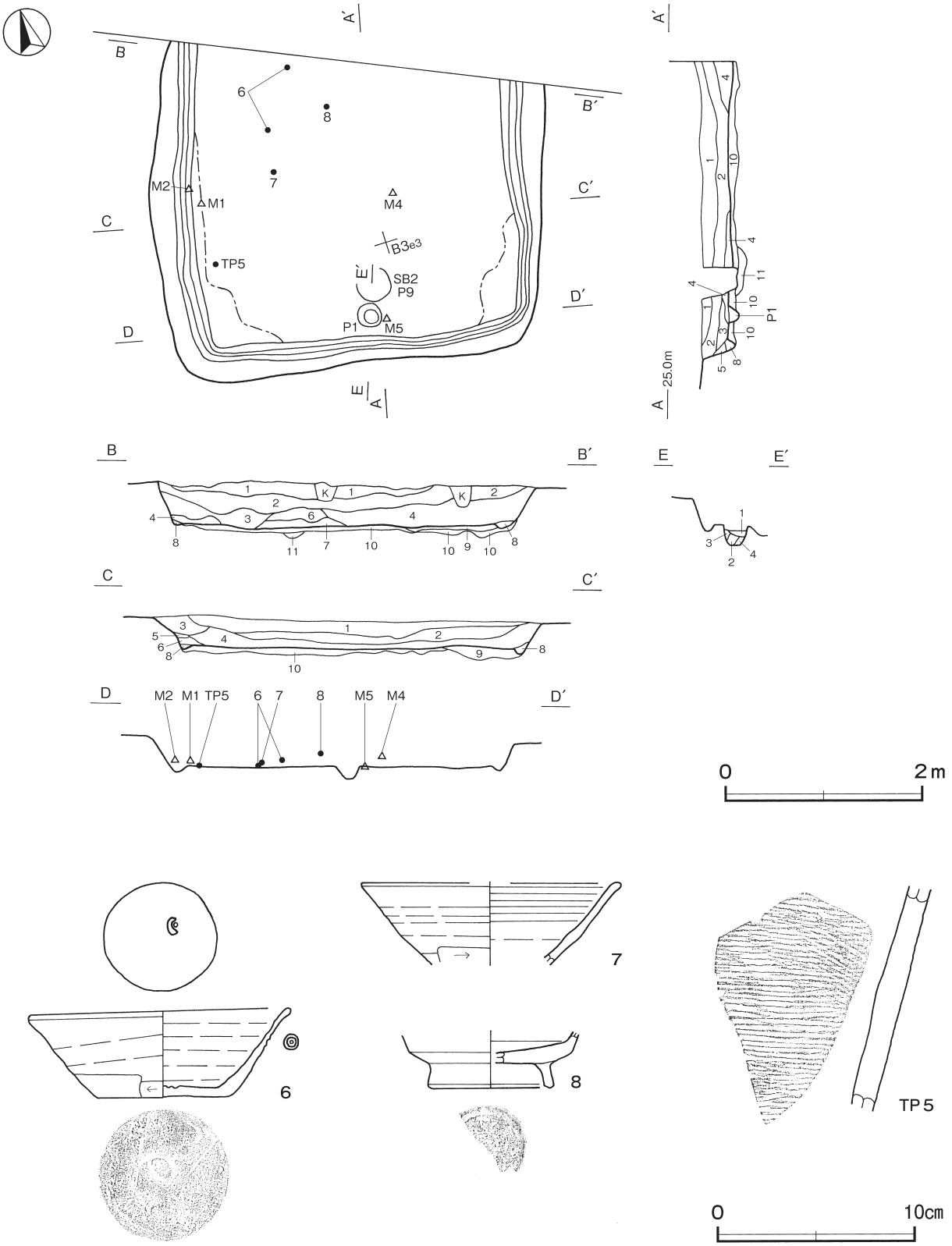
覆土　８層に分層できる。第１～４層は各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第５層は壁面の崩落土，第６・７層は竈からの流出土，第８層は壁溝の覆土である。第９～ 11 層は貼床の構築土である。

土層解説

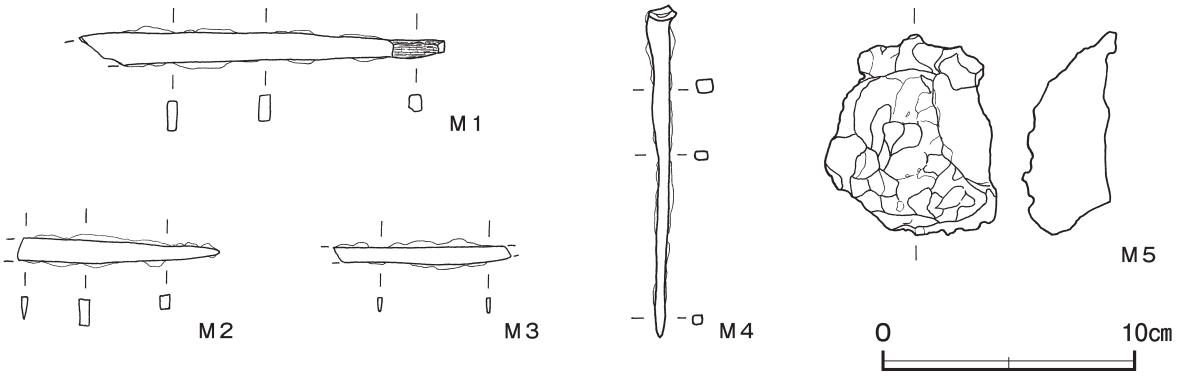
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック微量
4　褐　　色　ロームブロック少量
5　にぶい黄褐色　ロームブロック微量
6　灰 黄 褐 色　ロームブロック・焼土粒子少量，粘土ブロック微量
7　灰　褐　色　焼土粒子少量，ロームブロック・粘土粒子微量
8　灰 黄 褐 色　ロームブロック少量
9　にぶい黄褐色　ロームブロック・黒色土ブロック少量
10　黄　褐　色　ロームブロック中量
11　暗　褐　色　ロームブロック少量，黒色土ブロック微量

遺物出土状況　土師器片 72 点（甕類），須恵器片 66 点（坏 52，高台付坏１，蓋２，甕類 10，甑１），金属製品４点（刀子３，釘１），椀形滓１点が，全体に散在した状態で出土している。６～８，TP ５は覆土中層から床面にかけて出土した破片であることから，埋め戻す際に投棄されたものと見られる。

所見　床面から鉄滓が出土している。第１・３Ｂ号竪穴建物跡からも鉄滓が出土しており，これらがいずれも本跡を取り巻く位置にあることから，付近に鍛冶工房が存在した可能性が考えられる。時期は，出土土器から９世紀中葉と考えられる。



第 17 図　第２号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第18図　第２号竪穴建物跡出土遺物実測図

第２号竪穴建物跡出土遺物観察表（第17・18図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
6	須恵器	坏	13.2	4.6	6.7	長石・雲母	灰黄	良好	体部外面・底部内面上２重円のスタンプ紋を押捺 体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	床面	70%　PL 6 新治窯
7	須恵器	坏	13.0	(4.3)	－	長石・石英	灰	良好	体部内面工具によるナデ　体部下端手持ちヘラ削り	床面	40%　PL 6
8	須恵器	高台付坏	－	(2.9)	[6.0]	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り	覆土中層	30%
TP 5	須恵器	甕	－	－	－	長石・石英・ 赤色粒子	灰黄	良好	体部横位の平行叩き	床面	新治窯

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M 1	刀子	(14.5)	1.3	0.3～0.6	(31.5)	鉄	刃部・茎部一部欠損　茎部に木質付着	覆土下層	PL 8
M 2	刀子	(8.1)	0.9	0.4～0.5	(15.9)	鉄	茎部　刃部欠損	覆土下層	PL 8
M 3	刀子	(7.1)	0.8	0.2	(4.6)	鉄	刃部　茎部欠損	覆土中	PL 8
M 4	釘	13.3	1.2	0.3～0.5	17.8	鉄	断面方形　頭部は打撃によってやや潰れる	覆土中層	PL 8
M 5	椀形滓	8.0	6.8	3.8	291.7	鉄	着磁　表面茶褐色　地黒褐色　一部青灰色　表面激しい凹凸 椀形部に気孔	床面	PL 8

第３Ａ号竪穴建物跡（第19～21図）

位置　調査区中央部のＢ２e0区，標高24ｍほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第３Ｂ号竪穴建物跡内で確認され，本跡に伴う柱穴は第３Ｂ号竪穴建物の構築前に埋め戻されている。

規模と形状　壁は第３Ｂ号竪穴建物の構築時に壊されており，柱穴の位置や掘方の形状から長軸は4.40ｍ，短軸は3.70ｍの長方形で，主軸方向はＮ－25°－Ｅと推測される。

床　中央部に掘方と思われる長径1.15ｍ，短径0.80ｍの楕円形で，深さ13～25㎝の土坑状の掘り込みが確認できた。貼床は，第18層を５㎝ほど埋土して構築されており，踏み固められている。

ピット　５か所。Ｐ８～Ｐ11は深さ20～52㎝で，配置から主柱穴と考えられる。各柱穴で柱抜き取り痕が確認でき，柱が抜き取られた後，ロームブロックや焼土粒子を少量含む褐色土などで埋め戻されている。Ｐ12は深さ32㎝で，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第１・２層，第６・７層は締まりが強く，第３Ｂ号竪穴建物跡の貼床の構築土である。

ピット土層解説（Ｐ８～Ｐ 12）

1　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　焼土粒子少量，ロームブロック微量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
5　黄　褐　色　ロームブロック中量
6　褐　灰　色　ロームブロック少量
7　灰 黄 褐 色　ロームブロック少量

覆土　第 17 層は壁溝の覆土，第 18 層は貼床の構築土，第 19・20 層は床下土坑の埋土である。

土層解説

17　黒　褐　色　ローム粒子中量
18　にぶい黄褐色　ロームブロック多量
19　暗　褐　色　ロームブロック微量
20　黄　褐　色　ロームブロック中量，黒色土ブロック微量

所見　掘方調査で，Ｐ８～ P12 の存在と壁溝跡を確認し，本跡は第３Ｂ号竪穴建物以前の建物で，第３Ａ号竪穴建物跡とした。建て替えによってピットの位置を替え，床を貼り直し，竈の位置も北へずらして拡張した。掘方の底面から遺物が出土していないので時期は不明であるが，本跡の主軸方向が第３Ｂ号竪穴建物跡の主軸方向とほぼ同じであるので，時期差はそれほど無く，９世紀前葉と推定される。

第３Ｂ号竪穴建物跡（第 19 ～ 23 図）

位置　調査区中央部のＢ２e0 区，標高 24 ｍほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第３Ａ号竪穴建物跡を埋め戻し，柱の配置も移動させながら，四方に拡張して構築している。第３号掘立柱建物，第 67 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸 5.20 ｍ，短軸 4.52 ｍの方形で，主軸方向はＮ－ 15°－Ｅである。第３Ａ号竪穴建物跡と比べると，10 度西へ振れている。壁高は 40 ～ 55㎝で，ほぼ直立している。

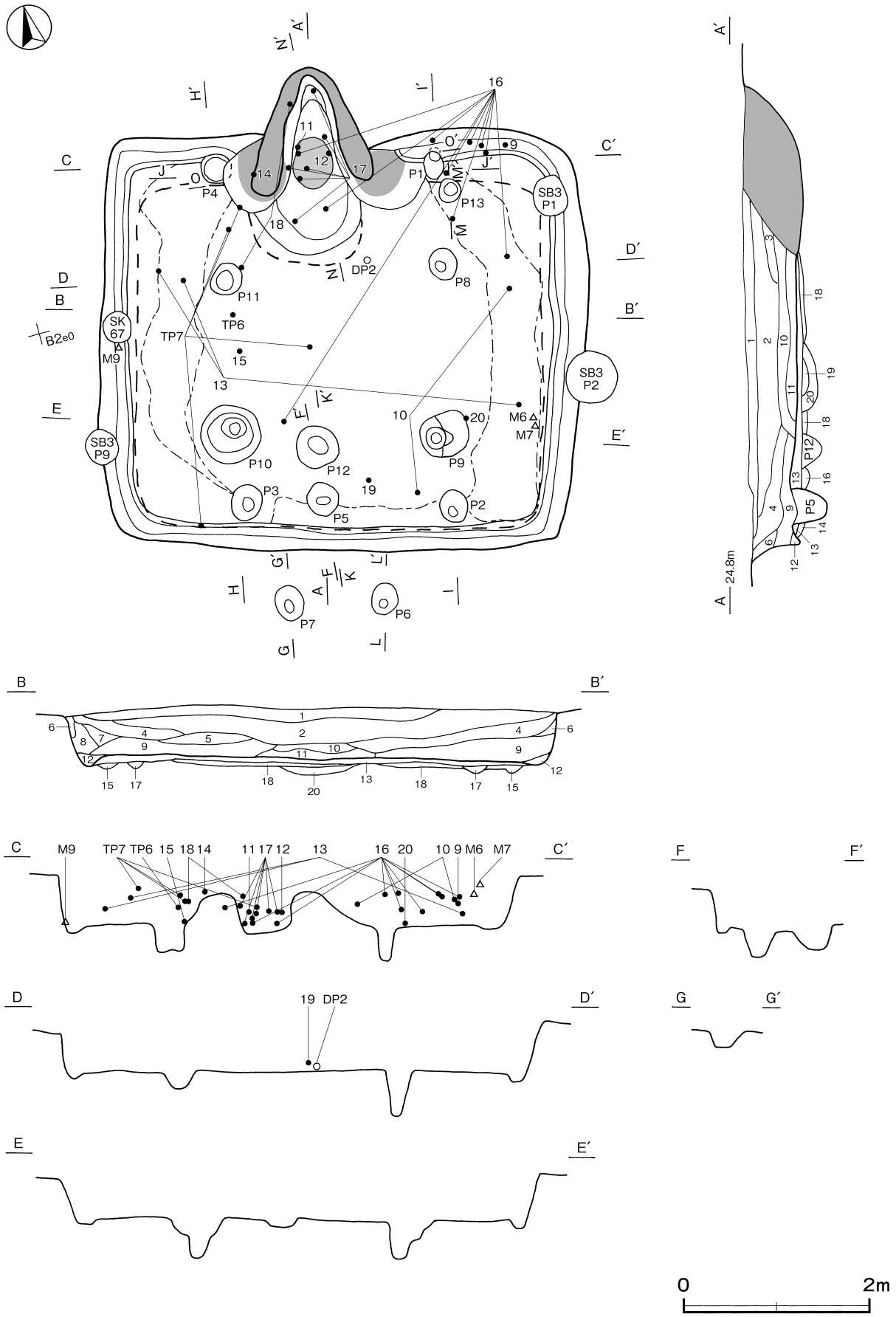
床　平坦な貼床で，ほぼ全面が踏み固められている。貼床は第 13 ～ 16 層を５～ 20㎝ほど埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 200㎝で，燃焼部幅は 48㎝である。袖部は，床面と同じ高さに焼土ブロックや炭化物，粘土粒子を含んだ第６～９層を積み上げて構築されている。焼土ブロックや炭化物を含んでいることから，竈を再構築した可能性が考えられる。火床部は床面から 15㎝ほど掘りくぼめた部分に，焼土ブロックや粘土粒子を含んだ第 10 ～ 12 層を埋土して構築されているが，火床面での赤変硬化は確認できなかった。煙道部は壁外に 72㎝掘り込まれ，火床部から外傾している。

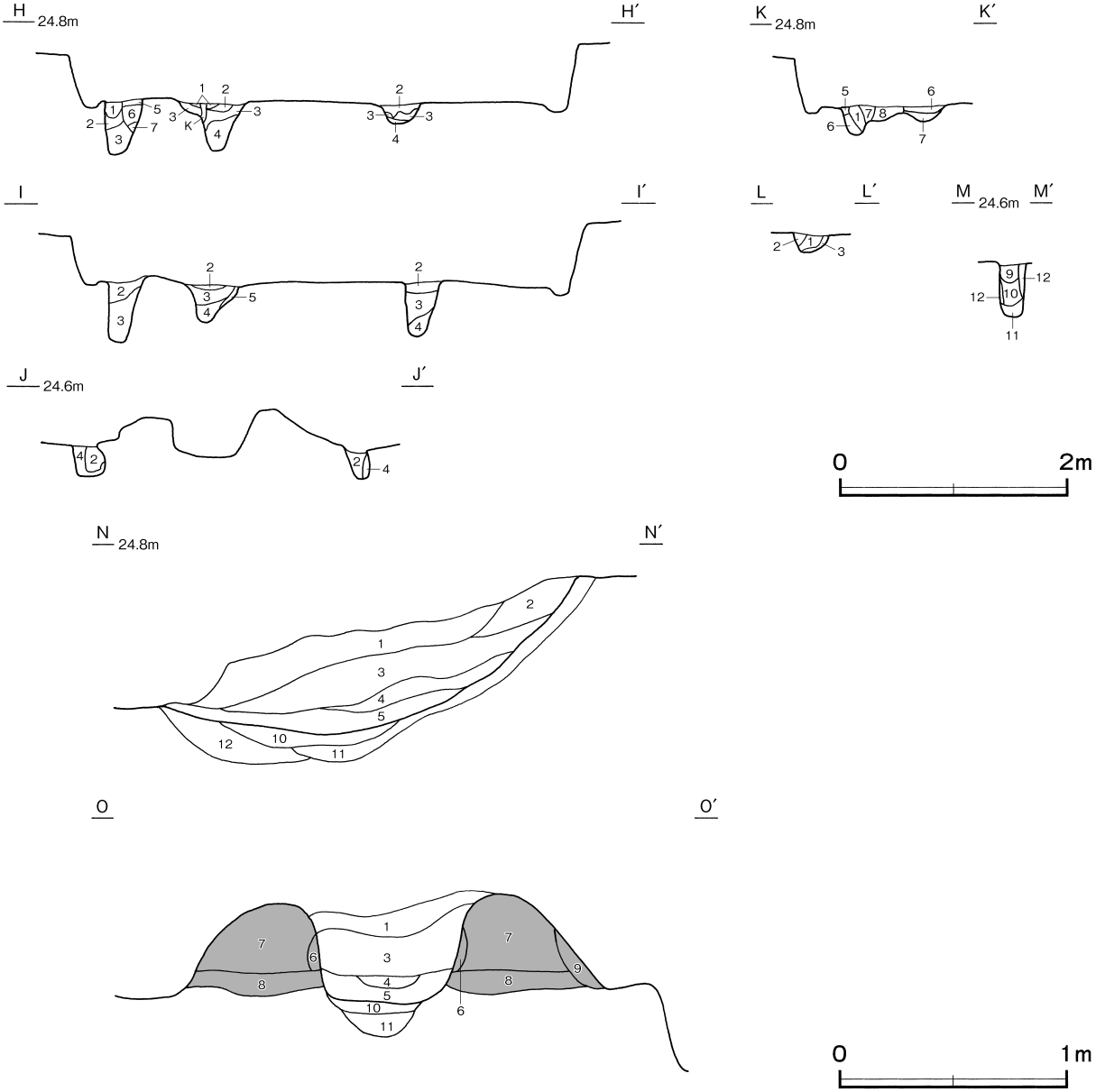
竈土層解説

1　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・粘土ブロック微量
2　にぶい赤褐色　粘土粒子中量，焼土粒子少量，ロームブロック微量
3　灰　赤　色　焼土粒子中量，粘土粒子少量，ロームブロック微量
4　明 赤 褐 色　焼土ブロック中量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子・灰少量
6　灰 黄 褐 色　焼土粒子多量，粘土粒子少量，炭化粒子微量
7　灰 黄 褐 色　焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化物微量
8　にぶい黄褐色　焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量
9　灰 黄 褐 色　焼土粒子・炭化粒子少量
10　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
11　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化物・粘土粒子微量
12　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック少量

ピット　８か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ 32 ～ 60㎝で，配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ 36㎝で，配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。第１～４層は柱抜き取り後の堆積層，第５～７層は埋土，第８層は貼床の構築土と考えられる。Ｐ６・７は深さ 15㎝で，壁外に位置していることから出入口施設の上屋に関連する柱穴の可能性がある。P13 は深さ 48㎝で性格は不明である。



第 19 図　第３Ａ・Ｂ号竪穴建物跡実測図(1)



第 20 図　第３Ａ・Ｂ号竪穴建物跡実測図(2)

ピット土層解説（Ｐ１～Ｐ７・Ｐ 13）

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
3　灰 黄 褐 色　ロームブロック多量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　灰 黄 褐 色　ローム粒子少量
6　灰 黄 褐 色　ロームブロック少量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量
8　にぶい黄褐色　ロームブロック微量
9　灰 黄 褐 色　焼土粒子少量，ロームブロック微量
10　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量
11　にぶい黄褐色　ロームブロック少量・焼土粒子・粘土粒子微量
12　灰 黄 褐 色　ロームブロック微量

覆土　12 層に分層できる。第１層は流入土，第２～５層，第９～ 11 層は各層にロームブロックが含まれ，不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。第６～８層は壁の崩落土，第 12 層は壁溝の覆土，第 13 ～ 16 層は貼床の構築土である。

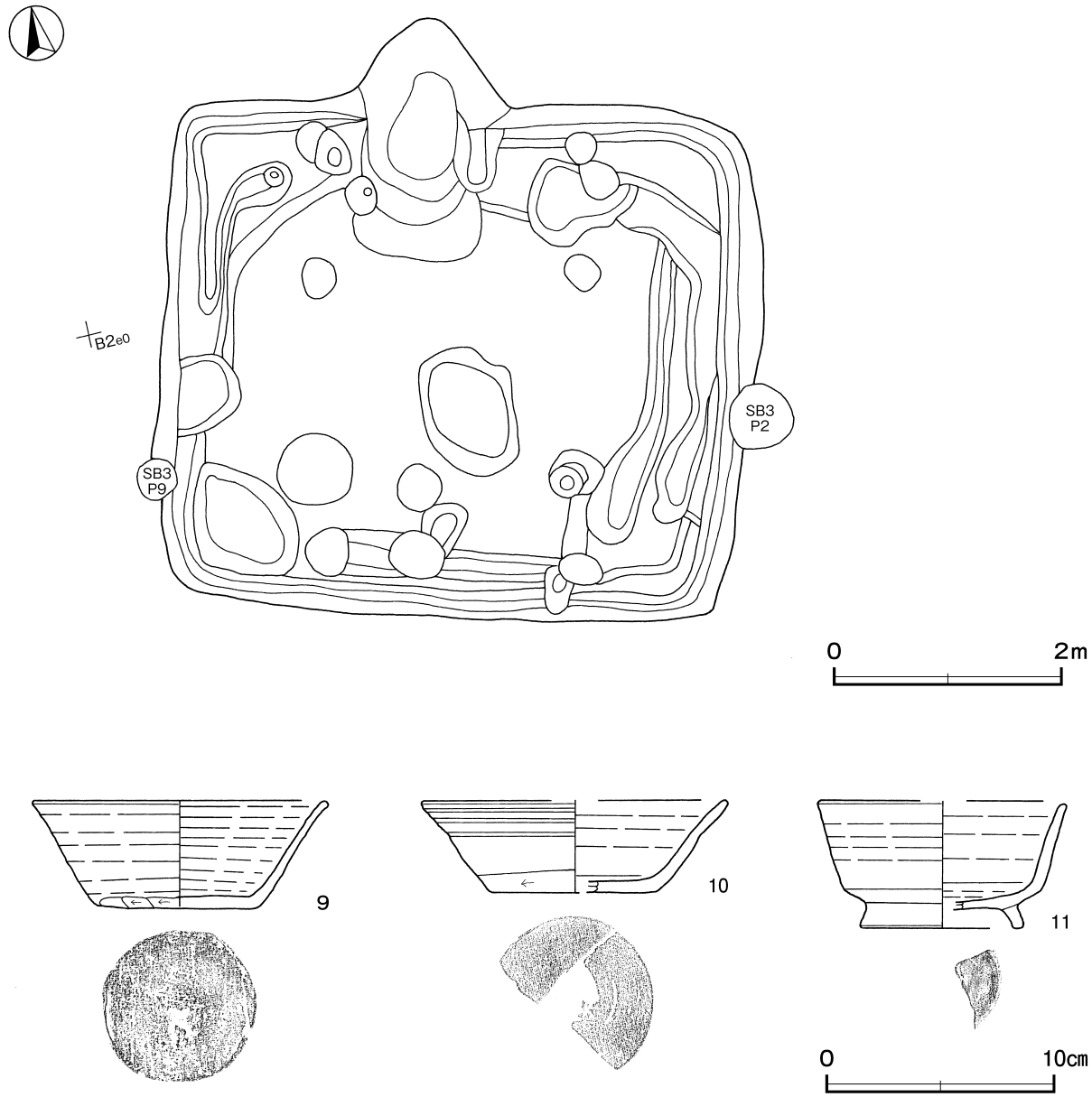
土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　焼土粒子少量，ロームブロック微量
3　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック微量
6　黄　褐　色　ローム粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
8　褐　　色　ロームブロック少量
9　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量

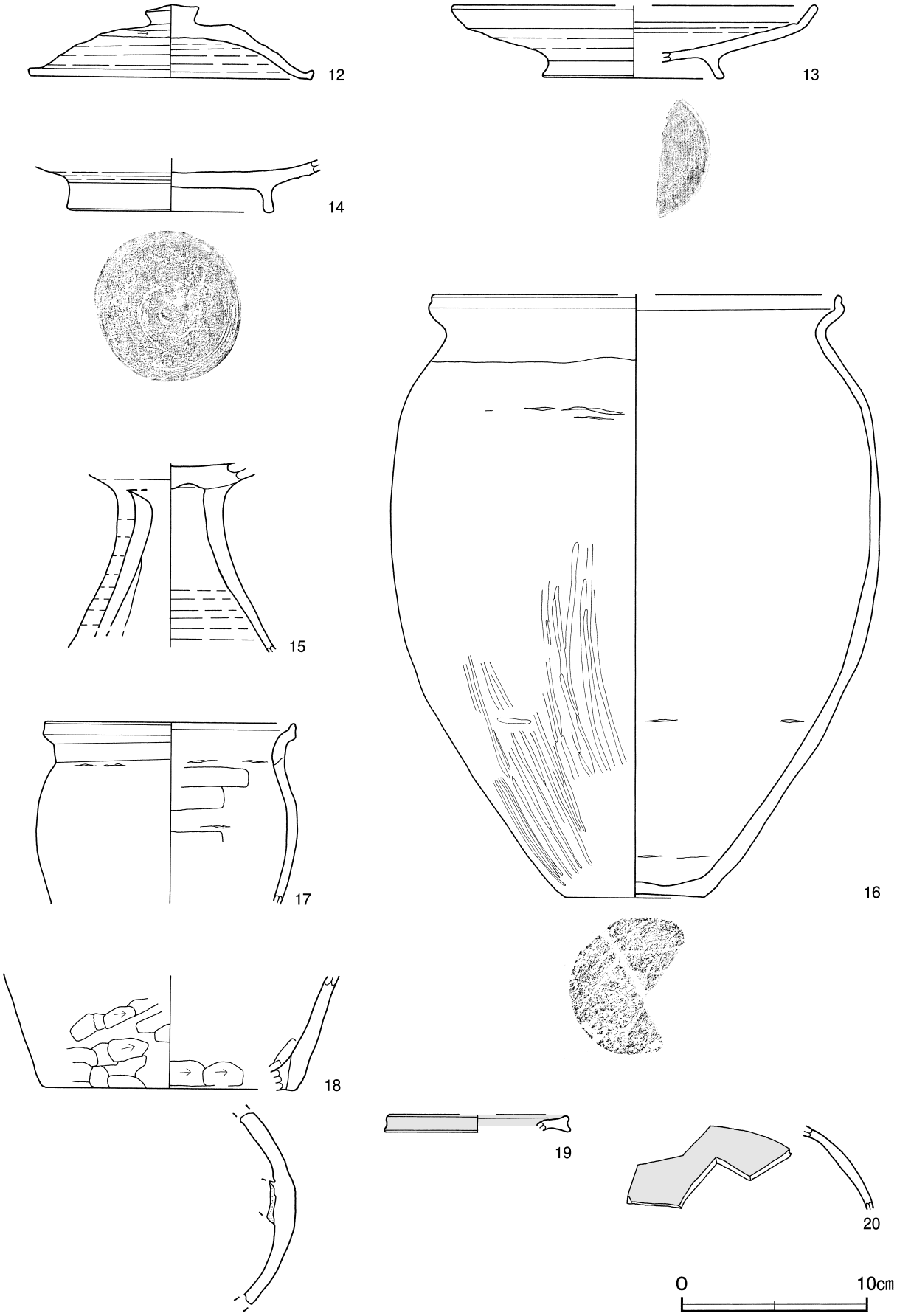
10　褐　灰　色　粘土ブロック少量，焼土粒子微量
11　黒　褐　色　ロームブロック少量
12　灰　褐　色　ロームブロック微量
13　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量（締まり強い）
14　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
15　暗　褐　色　ロームブロック微量
16　にぶい黄褐色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片 479 点（坏７，甕類 472），須恵器片 450 点（坏 246，高台付坏２，蓋９，高盤７，甕類 173, 甑 13), 灰釉陶器片６点（瓶類), 土製品６点（支脚), 金属製品５点（刀子４, 釘１), 鉄滓１点（29.66g）のほか，縄文土器片５点（深鉢），剥片５点が，全域に散在した状態で出土している。遺物は主に覆土中から出土した破片で，壁際からの出土が多いことから，建物が埋没する過程で投棄されたものと見られる。10・13・16・18・TP ７は，広範囲に散在して出土した破片が接合していることから，埋め戻す際に破砕して投棄されたものと考えられる。

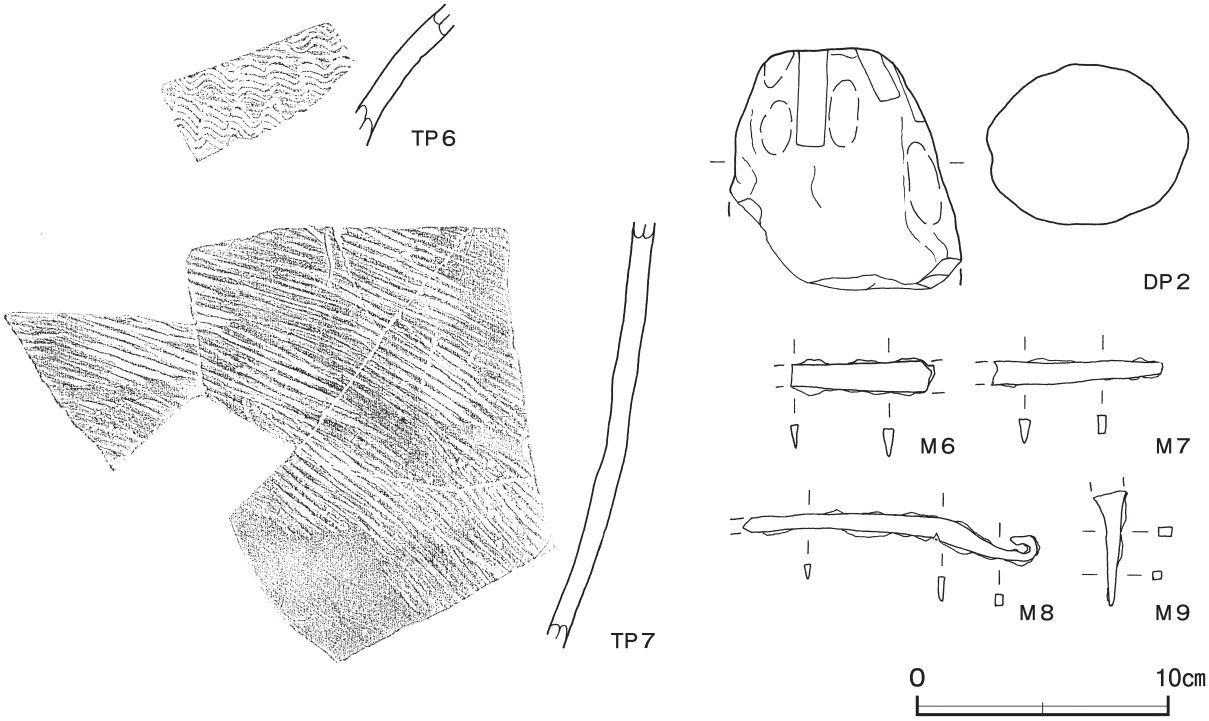
所見　時期は，出土土器から９世紀前葉に比定できる。



第 21 図　第３Ａ・Ｂ号竪穴建物跡，第３Ｂ号竪穴建物跡出土遺物実測図



第 22 図　第３Ｂ号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 23 図　第３Ｂ号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第３Ｂ号竪穴建物跡跡出土遺物観察表（第 21 ～ 23 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
9	須恵器	坏	12.8	4.7	6.7	長石・石英・雲母	灰黄	良好	体部下端手持ちヘラ削り　底部二方向のヘラ削り	覆土中層	60%　PL 6 新治窯
10	須恵器	坏	[13.6]	4.0	[7.2]	長石・石英・ 赤色粒子	浅黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中層	40%　PL 6
11	須恵器	高台付坏	[10.8]	5.6	[7.0]	長石・石英・ 赤色粒子・細礫	灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	30%　PL 6
12	須恵器	蓋	15.0	3.9	－	長石・石英・ 雲母・細礫	黄灰	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	80%　PL 7 新治窯
13	須恵器	盤	[19.8]	4.0	[9.8]	長石・石英・ 黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	40%　PL 6
14	須恵器	盤	－	(2.9)	11.0	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	良好	底部回転ヘラ削り	覆土上層	60% 新治窯
15	須恵器	高盤	－	(10.2)	－	長石・石英・雲母	灰	良好	脚部外・内面ロクロナデ　二方向の透かし孔	床面	５%　PL 7 新治窯
16	土師器	甕	[21.8]	32.4	7.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部下端ヘラ磨き　輪積痕	覆土中層	40%　PL 7
17	土師器	小形甕	13.5	(9.8)	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部内面ナデ　輪積痕	覆土下層	40%　PL 7
18	須恵器	甑	－	(6.1)	[13.6]	長石・石英・ 針状鉱物・細礫	黄灰	普通	体部外・内面ヘラ削り	覆土中層	20%
19	灰釉陶器	長頸瓶	[9.6]	(0.9)	－	長石・石英	暗オリーブ	良好	外・内面釉	覆土下層	５%　PL 7 井ケ谷78窯式ヵ 20と同一個体
20	灰釉陶器	長頸瓶	－	(4.5)	－	長石・石英	オリーブ	良好	外・内面釉	床面	５%　PL 7 井ケ谷78窯式ヵ 19と同一個体
TP 6	須恵器	甕	－	－	－	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部に５本１条の櫛描波状文を３段に巡らす	覆土下層	新治窯
TP 7	須恵器	甕	－	－	－	長石・石英・雲母	オリーブ黒	普通	体部斜位の平行叩き　体部下半ヘラ削り　内面指頭痕・輪積痕	覆土中層	PL 9 新治窯

番号	器　種	長さ	最大径	最小径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 2	支脚	(9.5)	9.2	5.0	(418.1)	長石・石英	橙	ヘラナデ　指頭痕	覆土下層	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M 6	刀子	(5.8)	1.2	0.3 ～ 0.4	(6.05)	鉄	刃の一部　断面三角形	覆土上層	PL 8
M 7	刀子	(6.8)	0.9	0.3 ～ 0.4	(5.55)	鉄	刃部・茎部一部欠損	覆土上層	PL 8
M 8	刀子ヵ	(11.7)	1.8	0.2 ～ 0.3	(10.67)	鉄	刃部先端部欠損　茎部U字状に屈曲	覆土中	PL 8
M 9	釘	(4.6)	1.3	0.3 ～ 0.4	(2.64)	鉄	角釘　頭部欠損	覆土下層	PL 8

第４号竪穴建物跡（第 24 ～ 26 図）

位置　調査区西部のＢ２c3 区，標高 24 ｍほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第 47 号土坑を掘り込み，第２号道路，第 50 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　南部の一部が調査区域外へ延びているが，南北軸 3.50 ｍ，東西軸 3.50 ｍのほぼ方形で，主軸方向はＮ－ 107゜－Ｅである。壁高は 26 ～ 40㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，南東部の一部を除き，全面が踏み固められている。南西部の壁下から東部の北半分まで壁溝が巡っている。中央部と南東部の壁際に焼土層が堆積していた。

竈　２か所。竈１は東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 80㎝で，燃焼部幅は 54㎝である。袖部は，地山を掘り残して基部とし，炭化物や焼土ブロック・粘土ブロックを主体とした第７・８層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 10㎝ほど掘りくぼめた部分に，ロームブロックと焼土ブロックを含んだ第９・10 層を埋土して構築されているが，火床面での赤変硬化は確認できなかった。煙道部は壁外に 44㎝掘り込まれ，煙道部から外傾している。奥壁には第 11・12 層を貼り付けて補強している。竈２は北壁中央部に付設されており，両袖部および火床部は遺存しない。煙道部は壁外に 62㎝掘り込まれている。竈２の袖部が遺存しないことや，北側壁に壁溝が検出されていることから，竈２から竈１に作り替えられたものと考えられる。

竈１土層解説

1　にぶい黄橙色　粘土ブロック少量，焼土粒子微量
2　にぶい黄褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4　灰 黄 褐 色　粘土ブロック中量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子・砂粒少量，ロームブロック微量
6　灰 黄 褐 色　焼土ブロック少量，ロームブロック･粘土ブロック･炭化粒子・砂粒微量
7　灰 黄 褐 色　粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
8　灰 黄 褐 色　粘土ブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
9　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
10　にぶい黄褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
11　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
12　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量

竈２土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
3　にぶい黄褐色　ローム粒子中量，粘土粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット　Ｐ１は深さ 42㎝で，南壁際に位置していることや，竈２と向かい合っていること，硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

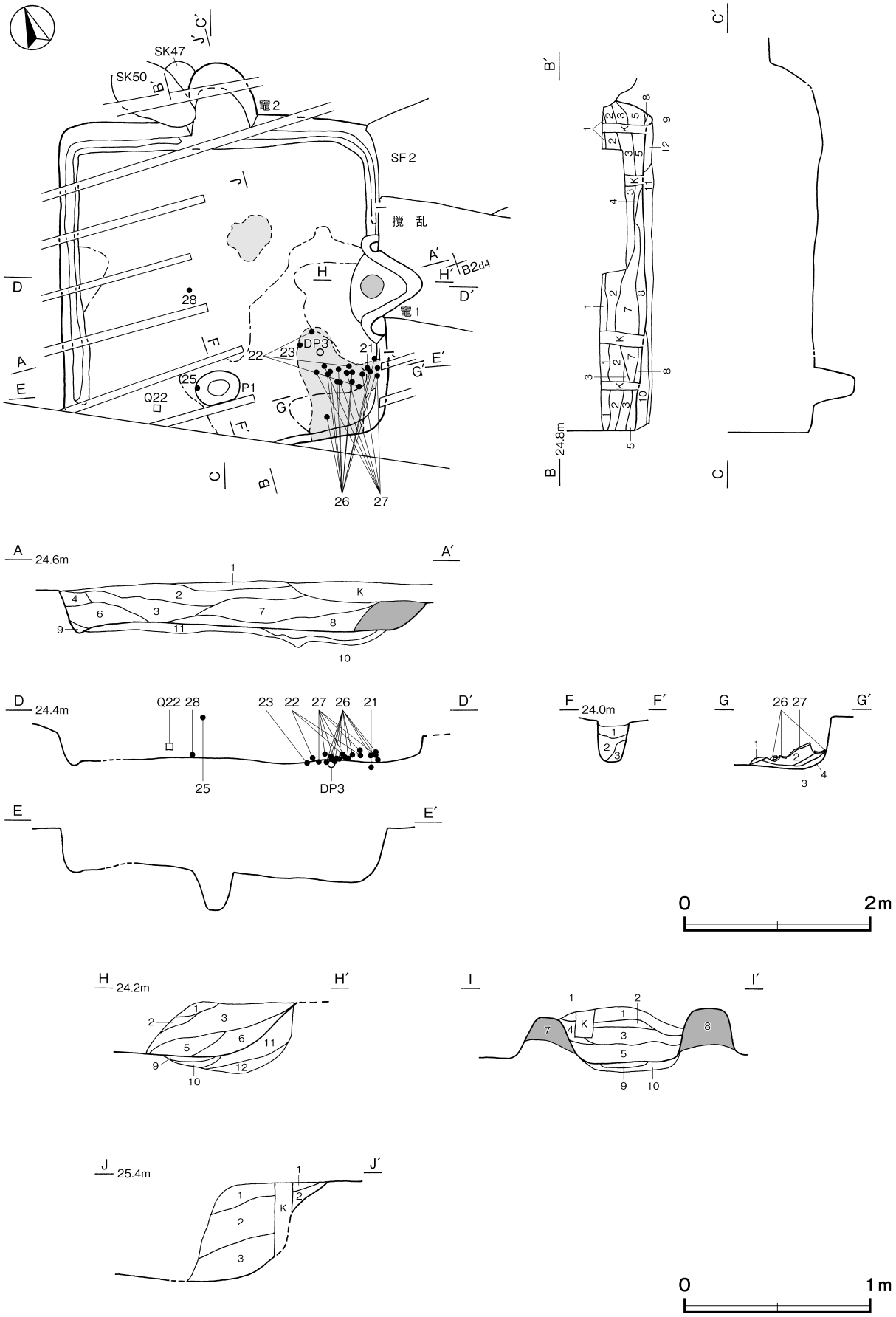
1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
3　灰 黄 褐 色　ロームブロック微量

覆土　９層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ，不規則な堆積状況をしめしていることから，埋め戻されている。第 10・11 層は貼床の構築土，第 12 層は，竈２の掘方を埋めているロームブロックや焼土ブロックを含む埋土である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　灰 黄 褐 色　ロームブロック中量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
5　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6　にぶい黄褐色　ロームブロック微量
7　灰 黄 褐 色　粘土粒子中量，ロームブロック少量
8　にぶい黄褐色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量
9　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
10　黄　褐　色　ロームブロック少量
11　褐　　色　ロームブロック少量
12　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片 42 点（甕類 41，甑１），須恵器片 59 点（坏 39，蓋２，高盤１，盤１，甕類 15，甑１），土製品１点（支脚），石器１点（砥石）のほか，縄文土器片３点（深鉢）が，竈１の南側から南壁際の覆土中層から下層にかけて出土している。21 ～ 23・26・DP ３をはじめ多くの遺物が破片で，焼土ブロックを含む



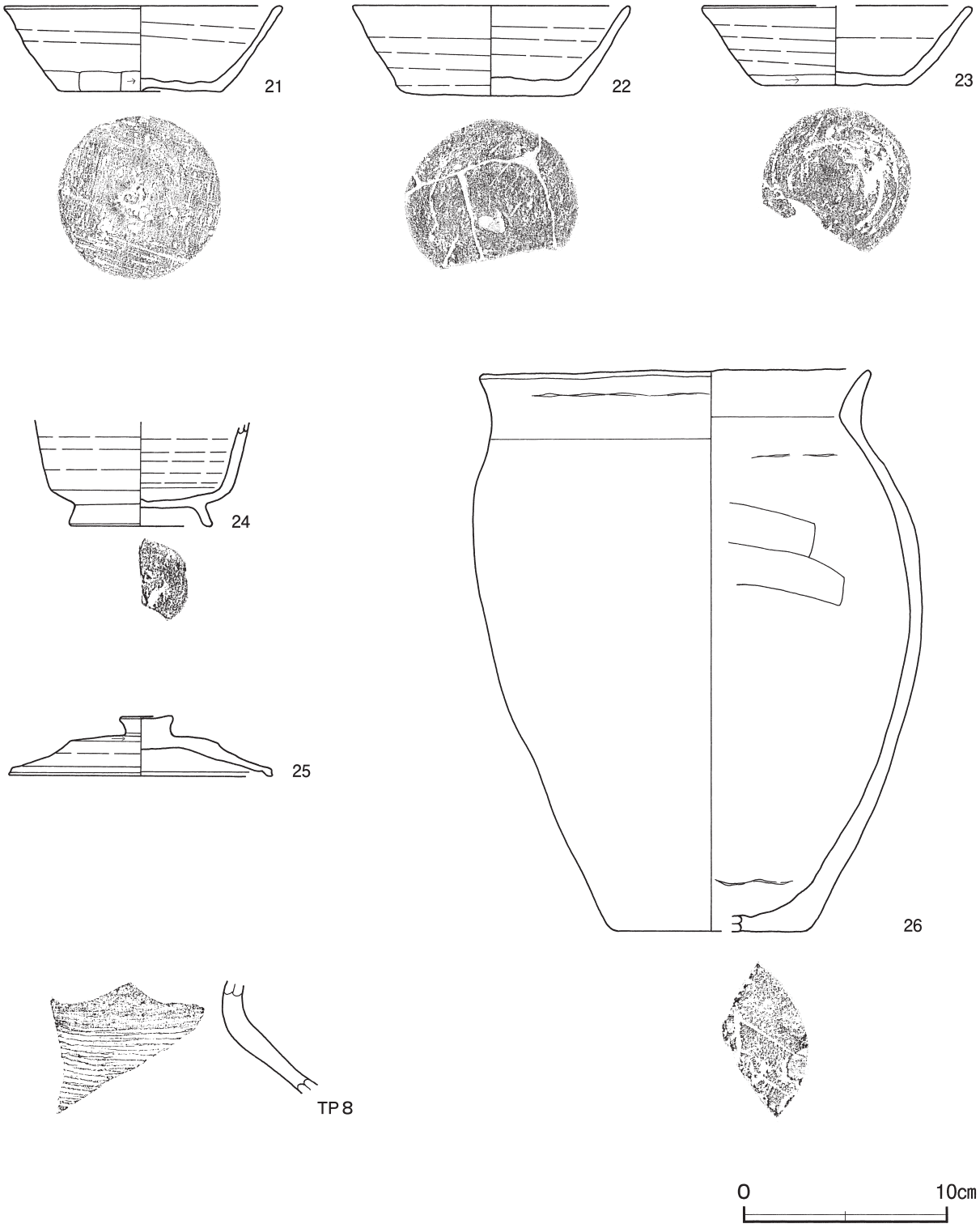
第 24 図　第 4 号竪穴建物跡実測図

赤褐色土中から出土している。二次焼成は受けておらず，上屋等が焼失した後，投棄された可能性がある。また，21 は残存状況が良好で，26 の下から逆位の状態で出土しており，遺棄されたと考えられる。

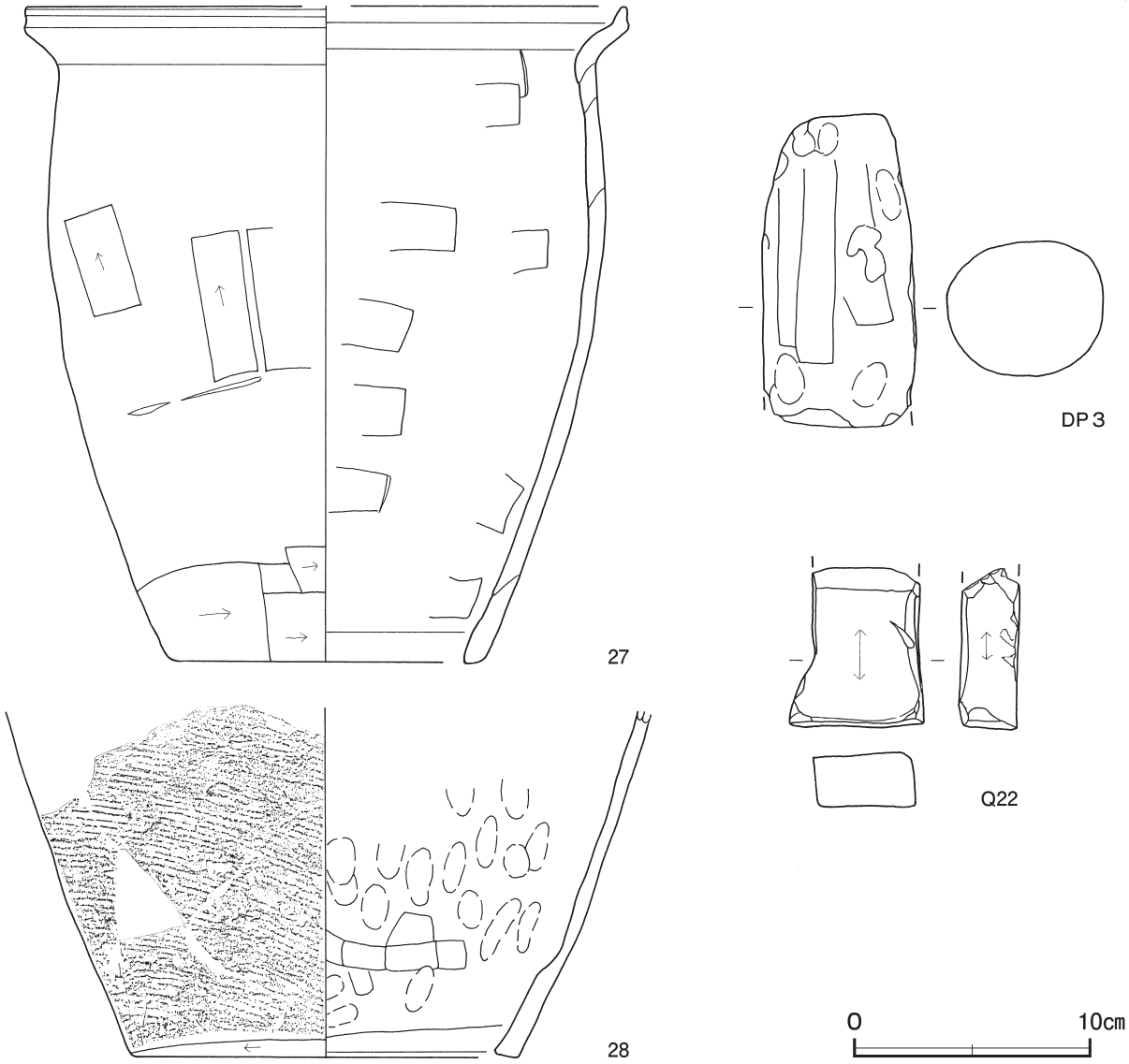
土器出土状況図土層解説

1　赤　褐　色　焼土ブロック中量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子微量

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第 25 図　第４号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 26 図　第 4 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 25・26 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
21	須恵器	坏	13.6	4.2	8.0	長石・石英・雲母	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	床面	95%　PL 6 新治窯産
22	須恵器	坏	13.6	4.4	8.4	長石･石英･雲母･赤色粒子・細礫	橙	普通	底部一方向のヘラ削り	床面	70%　PL 6 新治窯産
23	須恵器	坏	[13.1]	3.9	7.2	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	床面	60%　PL 6 新治窯産
24	須恵器	高台付坏	－	(5.2)	[6.2]	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り	覆土中	10%
25	須恵器	蓋	[12.9]	2.9	－	長石・石英・雲母	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	40%　PL 7 新治窯産
26	土師器	甕	19.1	27.5	[9.4]	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部表面剥離のため，調整不明　体部内面ナデ　輪積痕　底部木葉痕	床面	70%　PL 7
27	土師器	甑	[25.4]	27.9	[13.0]	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ　体部下端ヘラ削り 体部外面ヘラ削り　体部内面ナデ　輪積痕	床面	25%
28	須恵器	甑	－	(14.7)	16.4	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	良好	体部横位の平行叩き　体部下端ヘラナデ　体部内面指横ナデ・指頭痕　輪積痕	床面	40%　PL 7
TP 8	須恵器	甕	－	－	－	長石・石英・雲母	オリーブ黒	普通	体部横位の平行叩き	覆土中	新治窯産

番号	器　種	長さ	最大径	最小径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 3	支脚	(13.2)	6.5	4.0	(452.9)	長石・石英	橙	ヘラナデ　指頭痕	床面	PL 9

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 22	砥石	(6.9)	5.7	2.6	(159.7)	安山岩	砥面２面	覆土中層	

表４　　奈良・平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規　模	壁 高	床面	壁溝	内　部　施　設					覆土	主な出土遺物	時　期	備　考
				長軸×短軸（m）	(cm)			主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
1	Ｂ３f5	Ｎ－８°－Ｅ	方　　形	3.97 × 3.55	３～12	貼床平坦	全周	4	1	1	北壁	－	人為	土師器，須恵器，土製品，金属製品，鉄滓	８世紀後葉	
2	Ｂ３d2	Ｎ－13°－Ｅ	［方形・長方形］	3.98 × (3.44)	23～31	貼床平坦	ほぼ全周	－	1	－	－	－	自然人為	土師器，須恵器，金属製品，椀形滓	９世紀中葉	本跡→ SB ２
３Ａ	Ｂ２e0	Ｎ－25°－Ｅ	長 方 形	4.40 × 3.70	－	貼床	－	4	1	－	－	－	人為	－	９世紀前葉	本跡→ SI ３Ｂ
３Ｂ	Ｂ２e0	Ｎ－15°－Ｅ	方　　形	5.20 × 4.52	40～55	貼床平坦	全周	4	1	3	北壁	－	人為	土師器，須恵器，灰釉陶器，土製品，金属製品，鉄滓	９世紀前葉	SI ３Ａ→本跡→ SB ３，SK67
4	Ｂ２c3	Ｎ－107°－Ｅ	［方形］	3.50 × 3.50	26～40	貼床平坦	半周	－	1	－	北壁東壁	－	人為	土師器，須恵器，土製品，石器	８世紀後葉	SK47 →本跡→ SF2，SK50

(2)　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第 27 図）

位置　調査区中央部のＢ３f2 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第９・41 号土坑を掘り込み，第１号道路に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行３間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－５°－Ｅの南北棟である。規模は桁行 5.70 m，梁行 4.80 mで，面積は 27.36㎡である。柱穴寸法は，桁行が 1.9 m（6.3 尺），梁行が 1.6 m（5.3 尺）で，柱筋はほぼ揃っている。

柱穴　12 か所。Ｐ１～ P12 は主柱穴である。平面形は円形または楕円形で，長径 62 ～ 86㎝，短径 58 ～ 62㎝，深さ 23 ～ 54㎝で，掘方の断面は箱掘り状またはＵ字状である。全ての柱穴で柱のあたりを確認した。

第１層は柱痕跡，第２～５層は埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

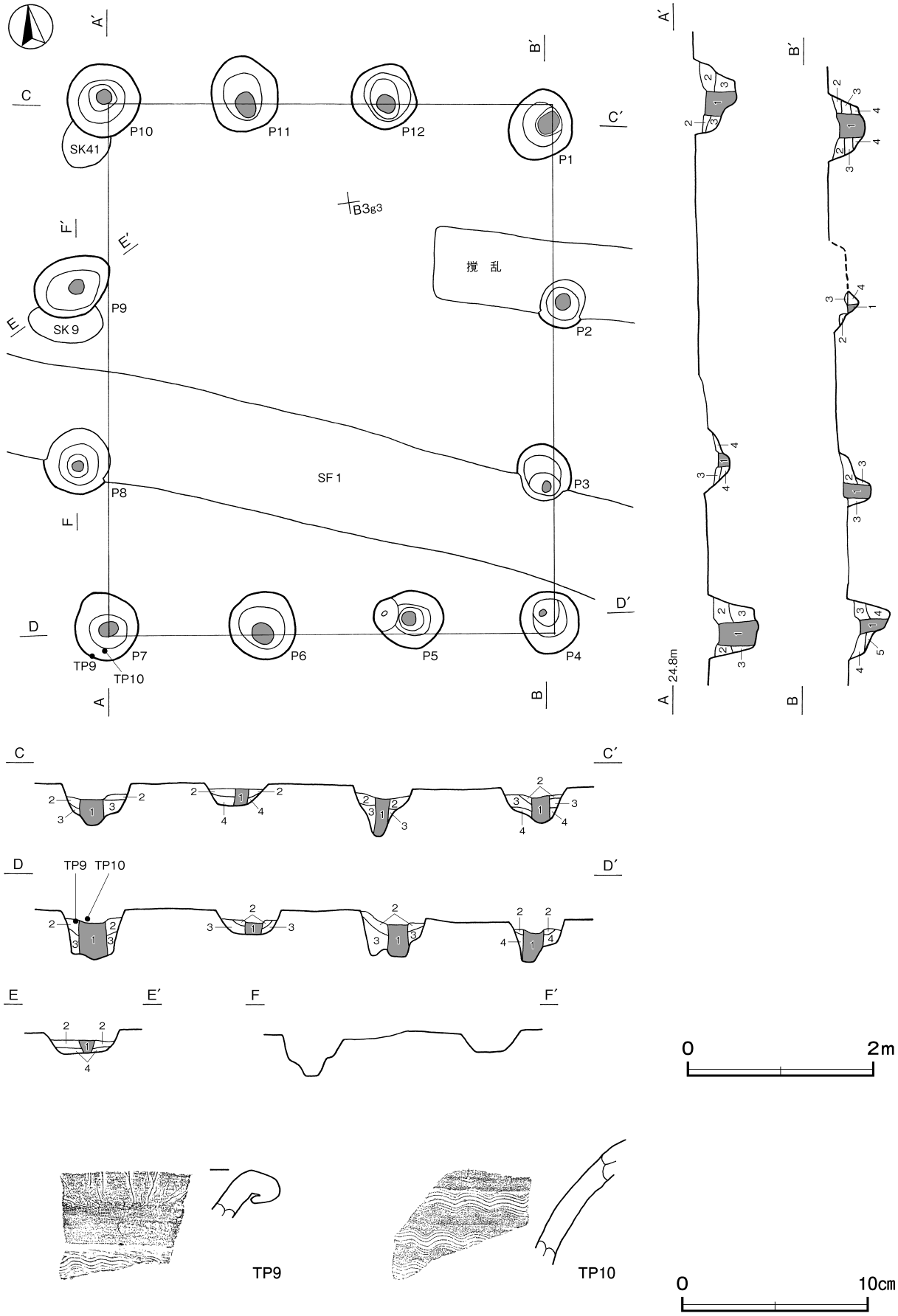
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片 13 点（甕類），須恵器片８点（甕類），石器１点（鏃），鉄滓１点（3.89g）が出土している。TP ９・10 はＰ７から出土している。土器片はＰ９～Ｐ 11 柱穴の覆土中から，石器，鉄滓は東部の遺構確認面から出土している。

所見　時期は，出土土器や，第１号竪穴建物跡と桁行方向がほぼ同じであることから，同時期の８世紀後葉と考えられる。性格は倉庫と考えられる。

第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 27 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP ９	須恵器	甕	長石・石英・雲母	黄灰	口縁部に４本１条の櫛描波状文を巡らす	Ｐ７掘方埋土	PL ９ 新治窯産
TP10	須恵器	甕	長石・石英・雲母	灰オリーブ	口縁部に５本１条の櫛描波状文を巡らす	Ｐ７掘方埋土	PL ９ 新治窯産



第 27 図　第 1 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

(3) 土坑

第 10 号土坑（第 28 図）

位置　調査区中央部のＢ３e1 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状　遺構南部が撹乱を受けており，東西径 1.22 m，南北径 1.10 mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ，長径方向はＮ－ 35°－Ｅと推測できる。深さは 40cmで，底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

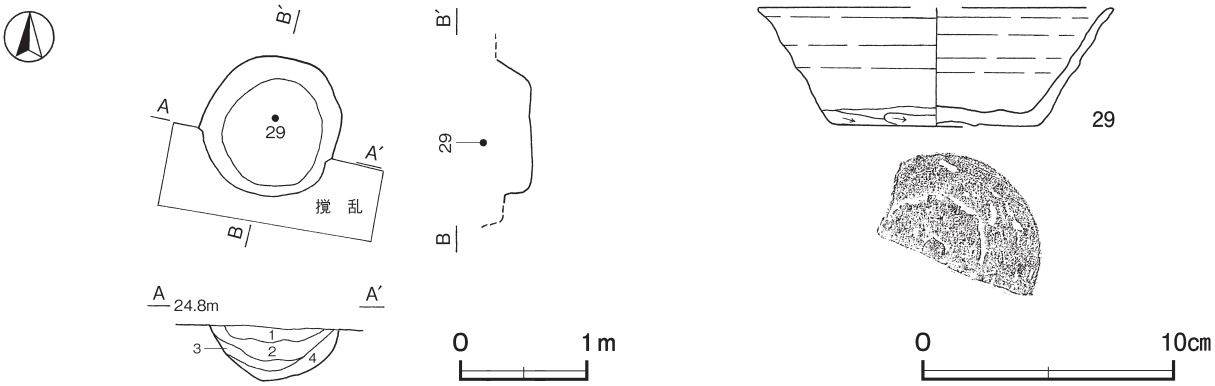
覆土　４層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片５点（甕類），須恵器片６点（坏），金属製品１点（不明）のほか，縄文土器片１点（深鉢）が出土している。29 は覆土上層から出土していることから，埋め戻す過程で投棄されたと考えられる。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第 28 図　第 10 号土坑・出土遺物実測図

第 10 号土坑出土遺物観察表（第 28 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
29	須恵器	坏	[14.0]	4.7	[8.2]	長石・石英・雲母・細礫	暗灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	覆土上層	40% 新治窯

第 64 号土坑（第 29 図）

位置　調査区中央部のＢ２d0 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第２号道路に掘り込まれている。

規模と形状　周辺が撹乱を受けているため，東西径 1.10 m，南北径 0.85 mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ，直径方向はＮ－ 63°－Ｅと推測できる。深さは 68cmで，底面はほぼ平坦である。南北壁は垂直に，東西壁は緩やかに立ち上がっている。

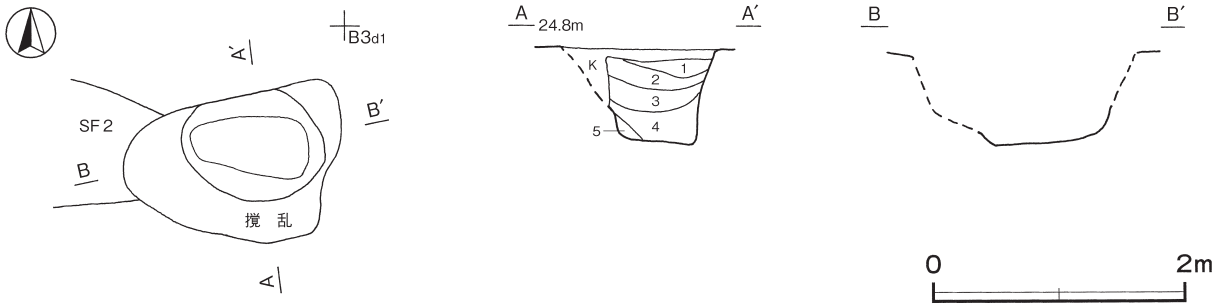
覆土　５層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
3　にぶい黄橙色　ロームブロック少量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
5　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　須恵器片３点（坏２，高台付坏１）が覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。土器は壊された後に埋め戻す過程で投棄されたと考えられる。

所見　時期は，出土土器から９世紀代と考えられる。



第29図　第64号土坑実測図

表５　奈良・平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
10	B３e1	N－35°－E	［楕円形］	(1.22) × (1.10)	40	平坦	緩斜	人為	土師器，須恵器，金属製品	
64	B２d0	N－63°－E	［楕円形］	(1.10) × (0.85)	68	ほぼ平坦	直立 緩斜	人為	須恵器	本跡→SF２

４　室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，掘立柱建物跡１棟，土坑１基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　掘立柱建物跡

第４号掘立柱建物跡（第30・31図）

位置　調査区中央部のＢ２c8区，標高24ｍほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第２号道路に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－80°－Ｗの東西棟である。規模は桁行6.30m，梁行3.40mで，面積は21.42㎡である。柱間寸法は，桁行が2.1ｍ（７尺），梁行が1.7ｍ（5.6尺）で柱筋はほぼ揃っている。

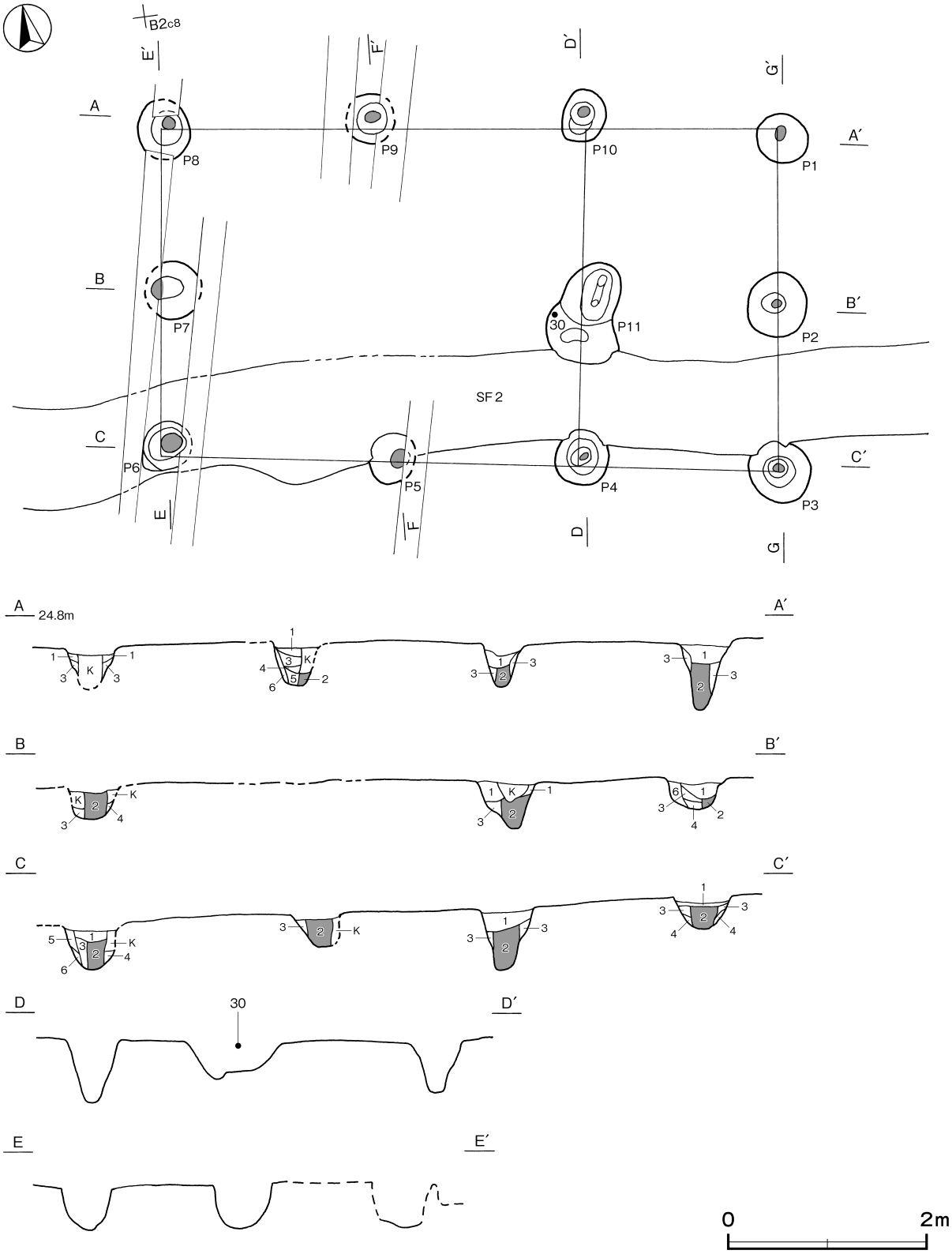
柱穴　11か所。Ｐ１～Ｐ10は主柱穴である。平面形は円形または楕円形で，長径52～62㎝，短径42～62㎝，深さ34～70㎝で，掘方の断面は箱掘り状またはＵ字状である。Ｐ11は束柱，または間仕切柱の柱穴と考えられる。平面形は不整形で，長径1.10ｍ，短径0.80ｍ，深さは45㎝で，掘方の断面は箱掘り状またはＵ字状である。Ｐ１～Ｐ10の柱穴で柱のあたりを確認した。第１層は柱抜き取り後の覆土，第２層は柱痕跡，第３～６層は埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

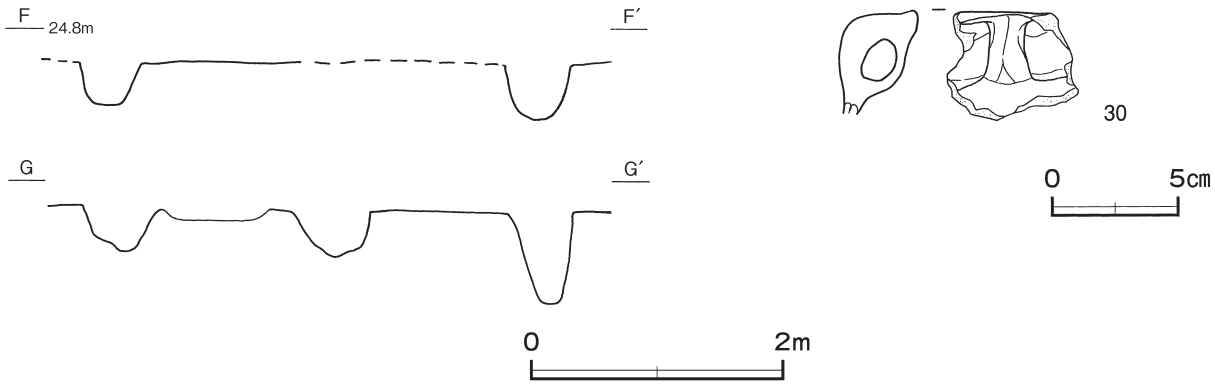
１　暗　褐　色　ローム粒子微量
２　黒　褐　色　ロームブロック少量
３　暗　褐　色　ロームブロック微量
４　黒　褐　色　ロームブロック中量
５　暗　褐　色　ロームブロック少量
６　にぶい黄褐色　ロームブロック微量

遺物出土状況　土師質土器片１点（内耳鍋）がＰ 11 から出土している。30 は細片であることから，埋め戻す過程で混入したと考えられる。

所見　時期は，出土土器から 16 世紀末～ 17 世紀前葉と考えられる。性格は倉庫と考えられる。



第 30 図　第４号掘立柱建物跡実測図



第 31 図　第 4 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 4 号掘立柱建物跡遺物観察表（第 31 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
30	土師質土器	内耳鍋	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐 明黄褐	普通	外・内面ナデ	P 11 埋土	

(2)　土坑

第 45 号土坑（第 32 図）

位置　調査区中央部のＢ２c0 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

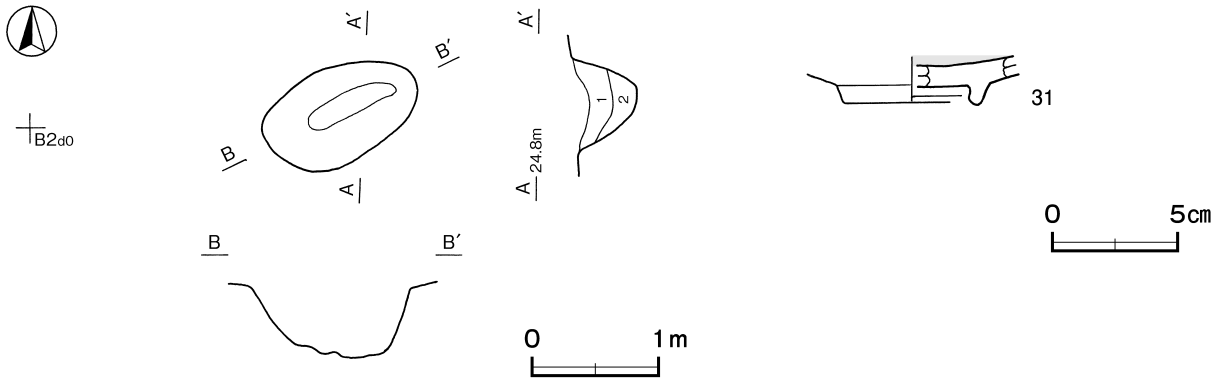
規模と形状　長径 1.26 m，短径 0.73 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 61°－Ｅである。深さは 56㎝で，底面は凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　２層に分層できる。両層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量　　2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量

遺物出土状況　陶器片 1 点（碗類）のほか，土師器片 1 点（甕類）が覆土中から出土している。31 は細片であることから，埋め戻す過程で混入したと考えられる。

所見　時期は，出土土器から 16 世紀代と考えられる。



第 32 図　第 45 号土坑・出土遺物実測図

第 45 号土坑出土遺物観察表（第 32 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様・特　徴	釉薬	産　地	出土位置	備　考
31	陶器	碗	－	(1.8)	[5.4]	長石・石英・細礫	外面ロクロナデ	灰釉	瀬戸美濃	覆土中	10%

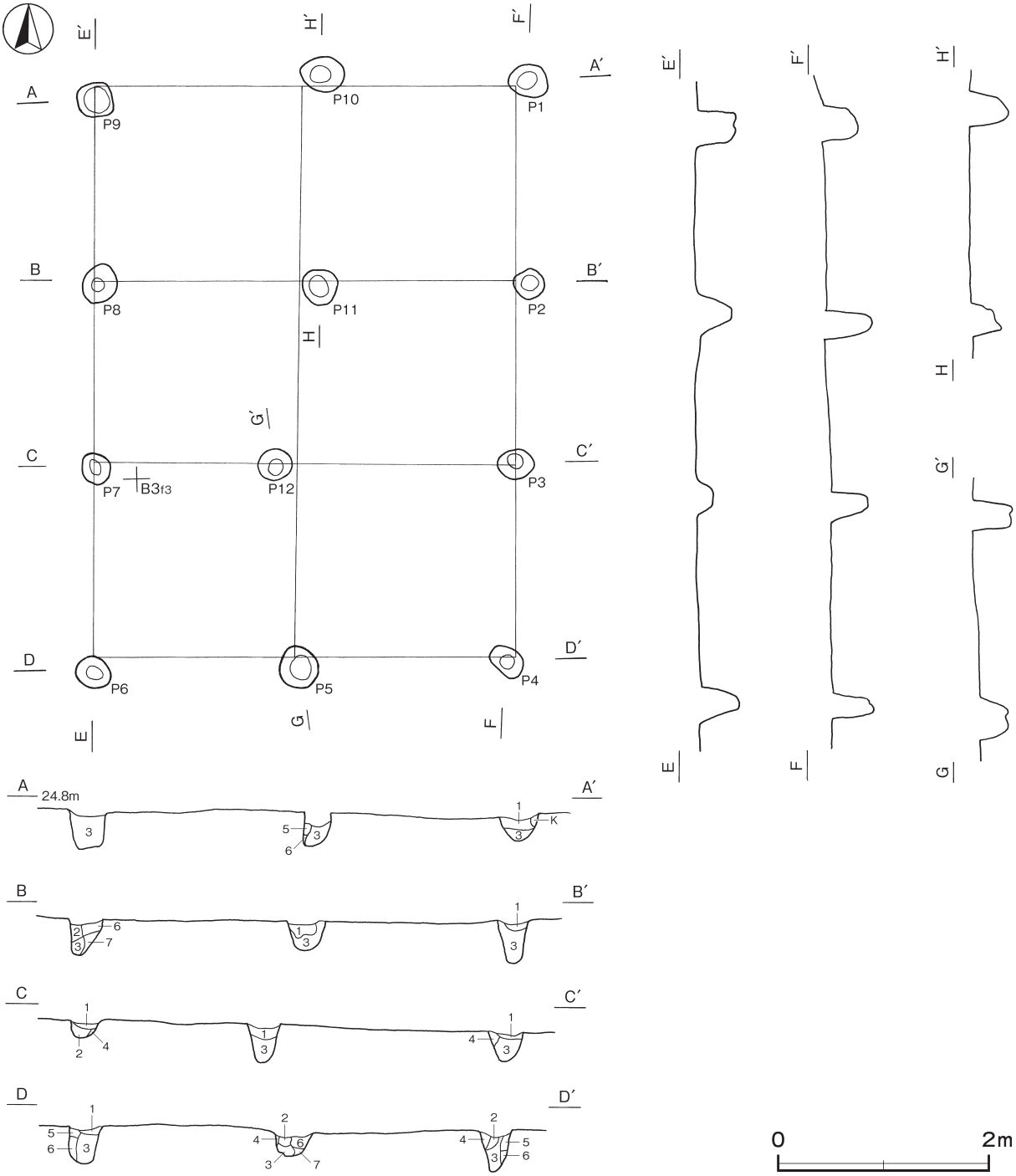
5　その他の遺構と遺物

今回の調査で, 時期が明らかでない掘立柱建物跡２棟, 溝跡２条, 道路跡３条, 土坑 53 基を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

(1)　掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡（第 33 図）

位置　調査区中央部のＢ３e2 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。



第 33 図　第２号掘立柱建物跡実測図

重複関係　第２号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造　桁行３間, 梁行２間の総柱建物跡で, 桁行方向がＮ－４°－Ｅの南北棟である。規模は桁行 5.40 m, 梁行 4.00m で，面積は 21.60㎡である。柱間寸法は，桁行が 1.8 m（6.0 尺），梁行が 2.0 m（6.6 尺）で柱筋はほぼ揃っている。

柱穴　12 か所。平面形は円形または楕円形で，長径 30 ～ 42㎝，短径 28 ～ 36㎝である。深さは 14 ～ 44㎝で，掘方の断面はＵ字状である。第１～４層は柱抜き取り後の覆土，第５～７層は埋土である。

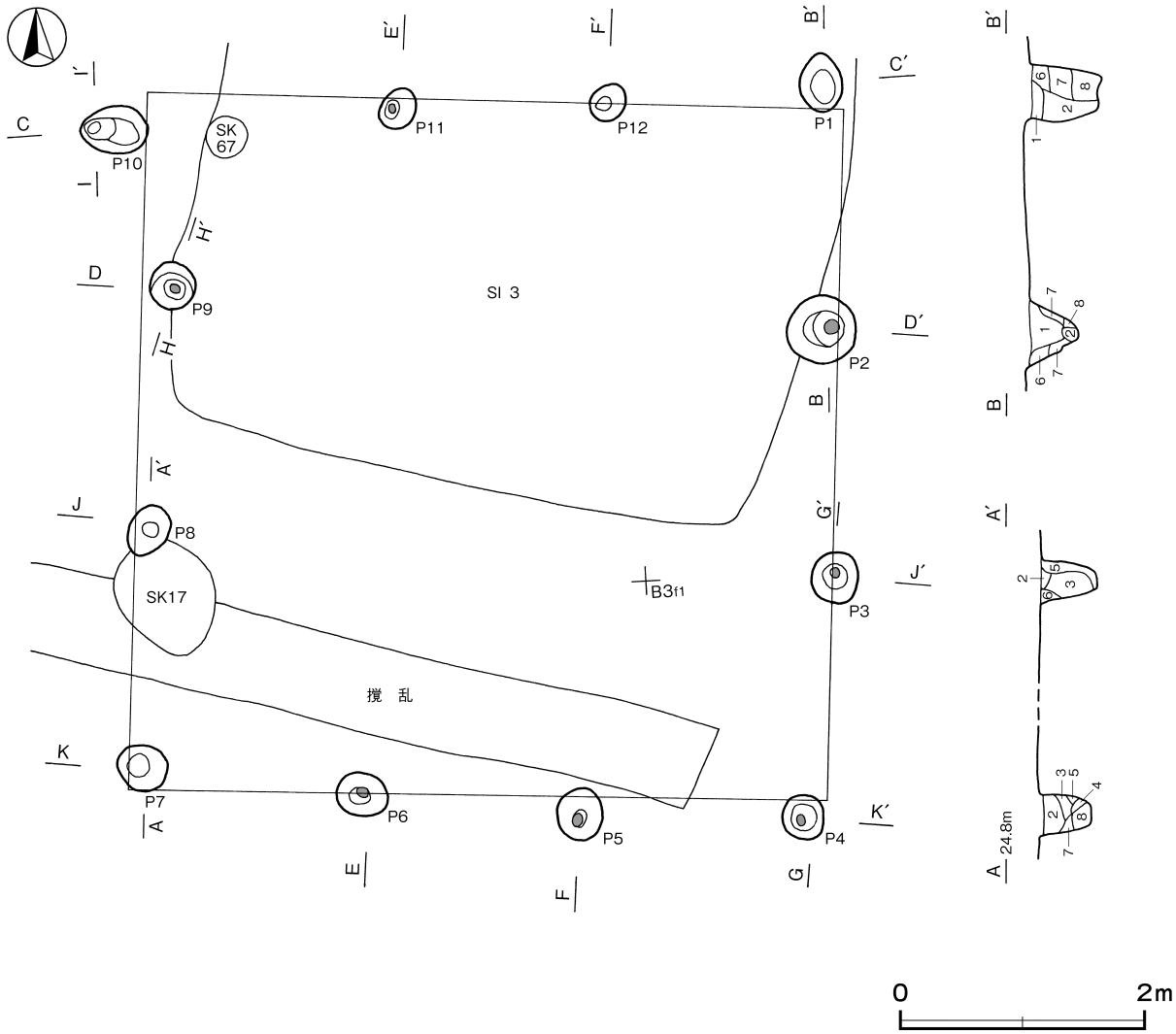
土層解説

1　灰　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
5　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
6　灰 黄 褐 色　ロームブロック少量
7　黄　褐　色　ロームブロック中量

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため不明であるが，本跡の西に位置する第３号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ同じであることから，同時期に機能していた可能性がある。性格は倉庫と考えられる。

第３号掘立柱建物跡（第 34・35 図）

位置　調査区中央部のＢ２e0 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。



第 34 図　第３号掘立柱建物跡実測図(1)

重複関係　第３号竪穴建物跡，第 17 号土坑を掘り込み，第 67 号土坑に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行３間の側柱建物跡である。規模は桁行梁行とも 5.70m で，面積は 32.49㎡である。柱間寸法は，桁行及び梁行とも 1.9 m（6.3 尺）である。Ｐ２～Ｐ６・Ｐ９・Ｐ 11 の底面で柱のあたりを確認した。

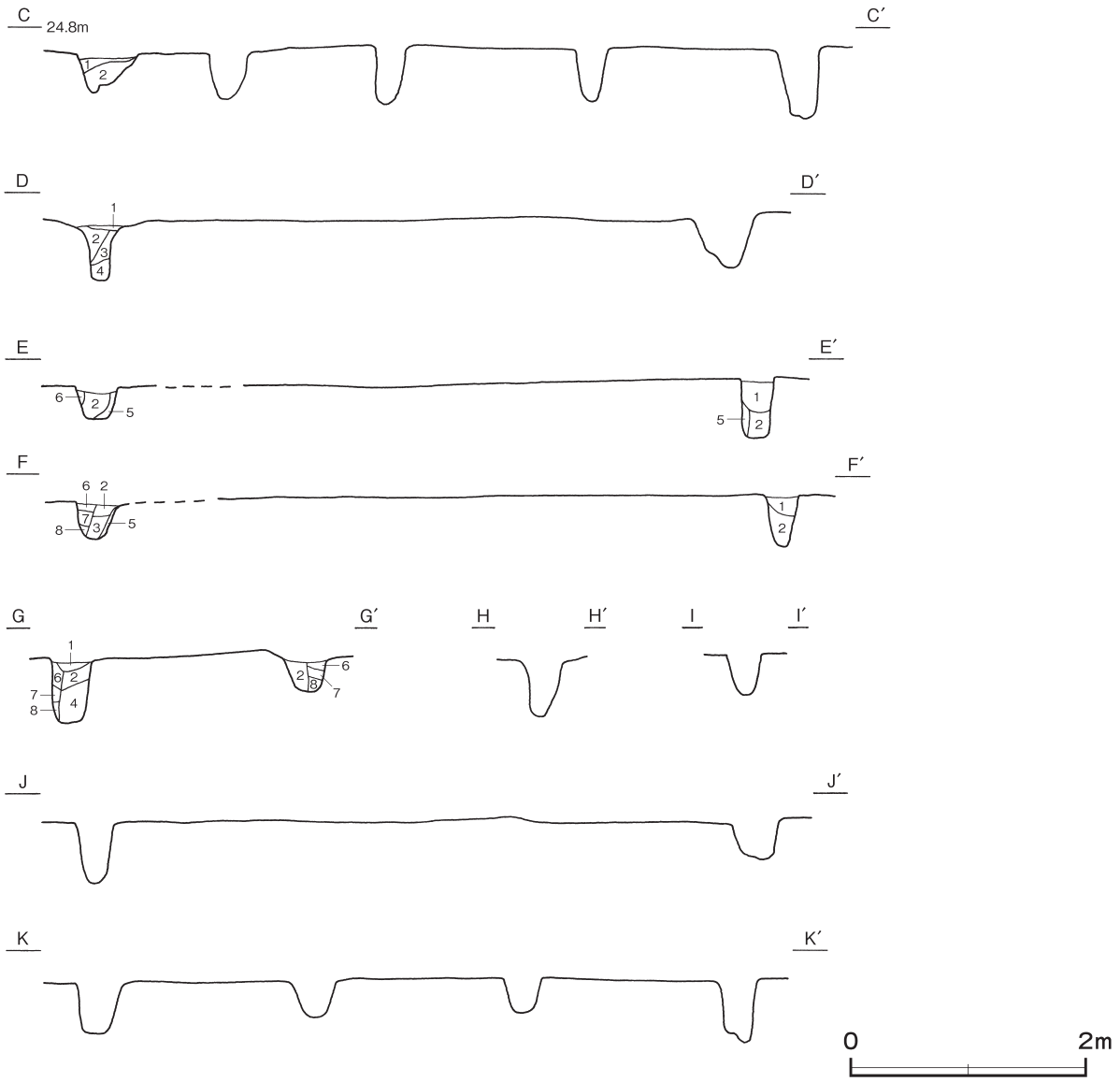
柱穴　12 か所。平面形は円形または楕円形で，長径 53 ～ 55㎝，短径 26 ～ 31㎝である。深さは 26 ～ 58㎝で，掘方の断面は箱掘り状またはＵ字状である。

覆土　第１～５層は柱抜き取り後の覆土，第６～８層は埋土である。

土層解説

1	黒　褐　色	ローム ブロック微量	
2	暗　褐　色	ローム ブロック少量	
3	黒　褐　色	ローム ブロック少量	
4	黒　　色	ローム ブロック少量	
5	褐　　色	ローム ブロック少量	
6	にぶい黄褐色	ローム ブロック中量	
7	暗　褐　色	ローム ブロック中量	
8	黄　褐　色	ローム ブロック中量	

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため不明であるが，本跡の東に位置する第２号掘立柱建物跡と，桁行方向がほぼ同じであることから，同時期に機能していた可能性がある。性格は倉庫と考えられる。



第 35 図　第３号掘立柱建物跡実測図(2)

表６　その他の掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱穴				主な出土遺物	時期	備考
			桁×梁(間)	桁×梁(m)	(㎡)	桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形	深さ(cm)			
2	B３e2	N－４°－E	３×２	5.40×4.00	21.60	1.8	2.0	総柱	12	円形・楕円形	14～44		不明	SI ２→本跡
3	B２e0	N－８°－E	３×３	5.70×5.70	32.49	1.2×2.0	1.4×1.8	側柱	12	円形・楕円形	26～58		不明	SI ３，SK17→本跡→SK67

(2)　溝跡

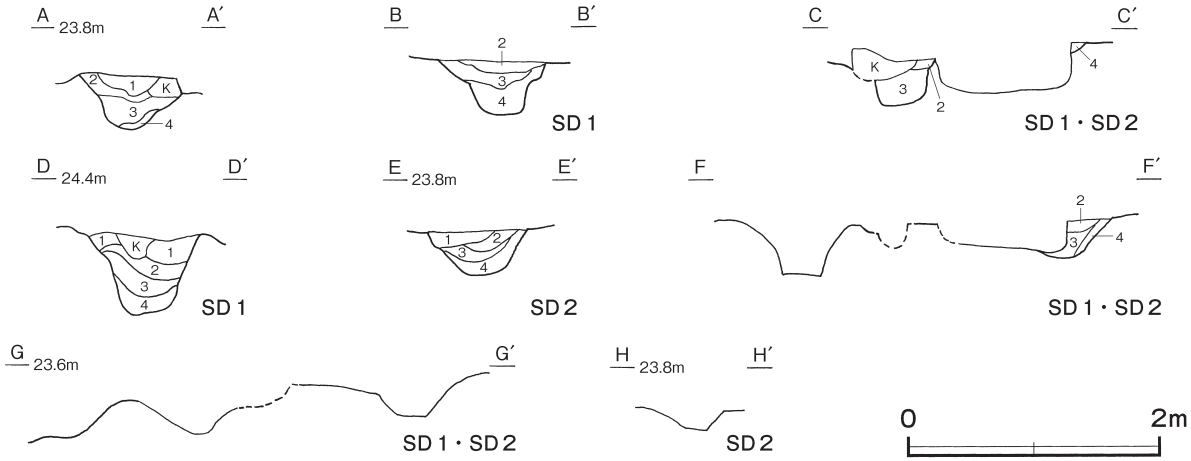
今回の調査で，調査区東部において溝跡２条を確認した。以下，土層解説と断面図（第36図），一覧表を掲載し，平面図においては遺構全体図（第３図）に掲載する。

第１号溝土層解説

１　褐　灰　色　ローム粒子微量
２　灰黄褐色　ロームブロック微量
３　暗　褐　色　ロームブロック少量
４　褐　　色　ロームブロック少量

第２号溝土層解説

１　褐　　色　ロームブロック少量
２　暗　褐　色　ロームブロック微量
３　黒　褐　色　ロームブロック少量
４　にぶい黄褐色　ロームブロック中量



第36図　その他の溝跡実測図

表７　その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	B４i2～B４j2	N－３°－W	［直線］	(6.72)	0.72～0.90	0.24～0.34	20～28	逆台形	外傾	自然 人為	須恵器， 銭貨(劣化激しく判読不能)	本跡→SK４・５・８ SD２と新旧不明
2	B４j1～B４i3	N－17°－E N－70°－W	［L字状］	(8.82)	0.30～0.80	0.16～0.30	14～36	逆台形	外傾	人為	陶器	本跡→SK２・４ SD１，SK８と新旧不明

(3)　道路跡

第１号道路跡（第３・37図）

位置　調査区中央部のＢ２f0～Ｂ３i5区，標高24ｍほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第１号掘立柱建物跡，第３号陥し穴を掘り込んでいる。

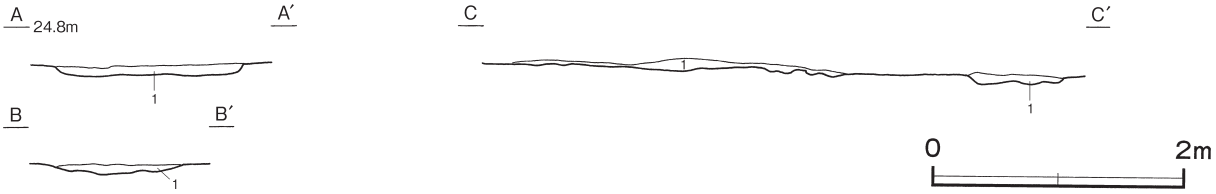
規模と形状　Ｂ３i5区から西北西に向かって延びている。確認できた長さは25.4ｍ，幅0.44～1.06ｍ，深さ

10cmである。断面は緩やかなＵ字状である。地山が硬化している。

覆土　単一層の流入土である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため不明である。本跡の西北西に，ほぼ同規模，同形状の第３号道路跡を確認しており，同一の道路跡の可能性がある。



第 37 図　第１号道路跡実測図

第２号道路跡（第３・38 図）

位置　調査区西部のＢ２c3 ～ Ｂ２d0 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

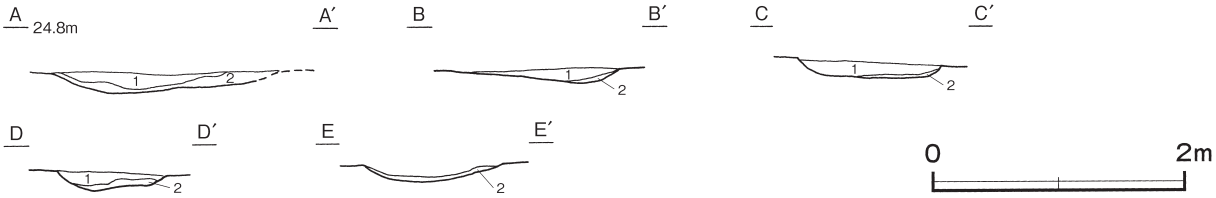
重複関係　第４号竪穴建物跡，第４号掘立柱建物跡を掘り込み，第 44・56 ～ 59・64 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　Ｂ２d0 区から西に向かって伸びている。確認できた長さは 27.20 m，幅 0.38 ～ 1.10 m，深さ 10 ～ 16cmである。断面は緩やかなＵ字状である。地山が硬化している。

覆土　２層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため不明である。



第 38 図　第２号道路跡実測図

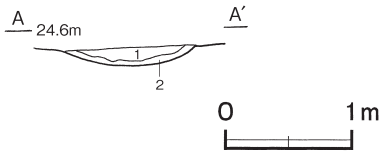
第３号道路跡（第３・39 図）

位置　調査区西部のＢ２d4 ～ Ｂ２d5 区，標高 24 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状　Ｂ２d5 区から西北西に向かって伸びている。確認できた長さは 5.4 m，幅 0.42 ～ 0.86 m，深さ 15cmである。断面は緩やかなＵ字状である。地山が硬化している。

覆土　２層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　にぶい黄褐色　ローム粒子・黒色粒子微量



第 39 図　第３号道路跡実測図

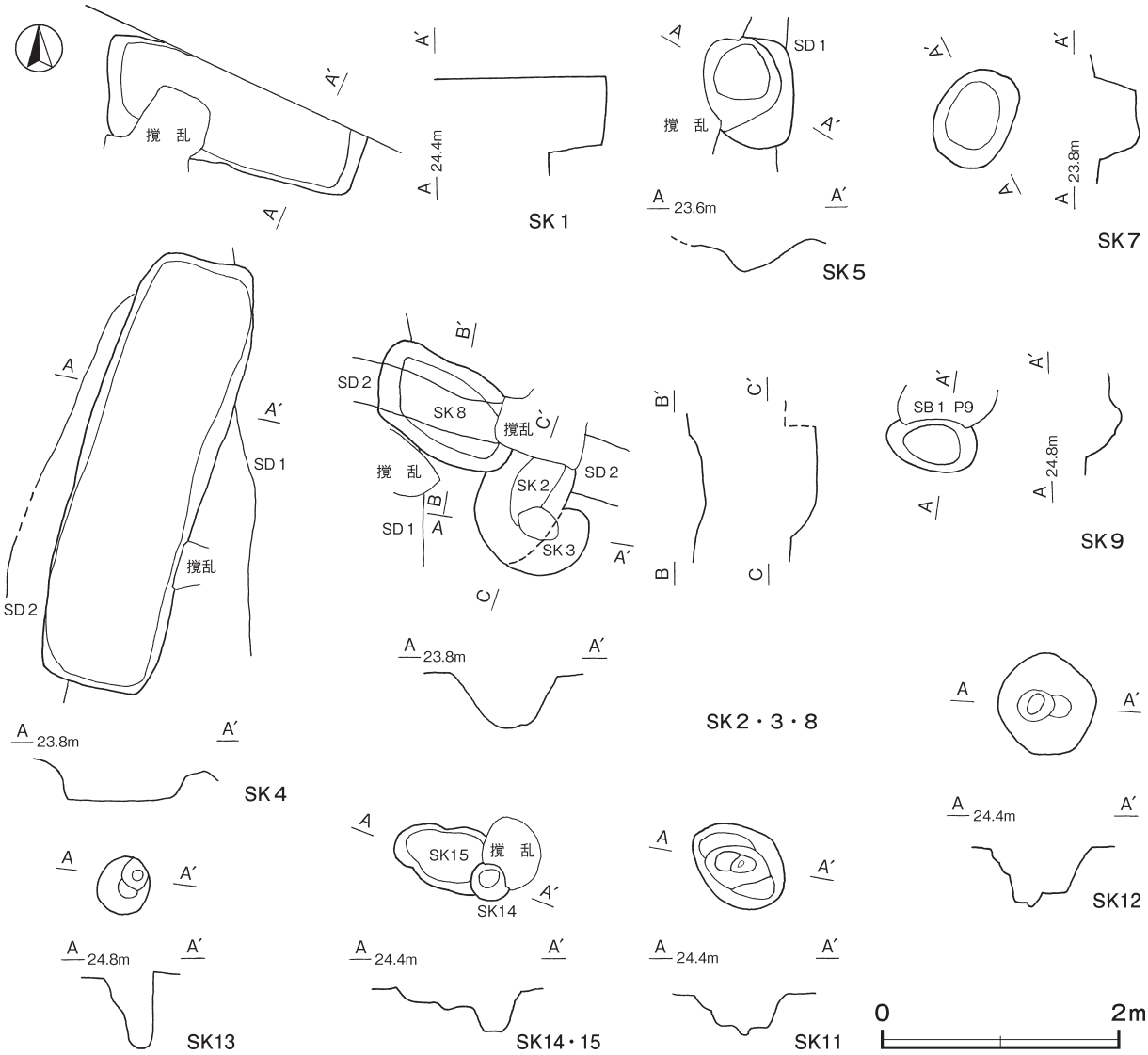
所見　出土遺物がなく，時期は不明である。本跡の東南東に，ほぼ同規模，同形状の第１号道路跡を確認しており，同一の道路跡の可能性がある。

表８　その他の道路跡一覧表

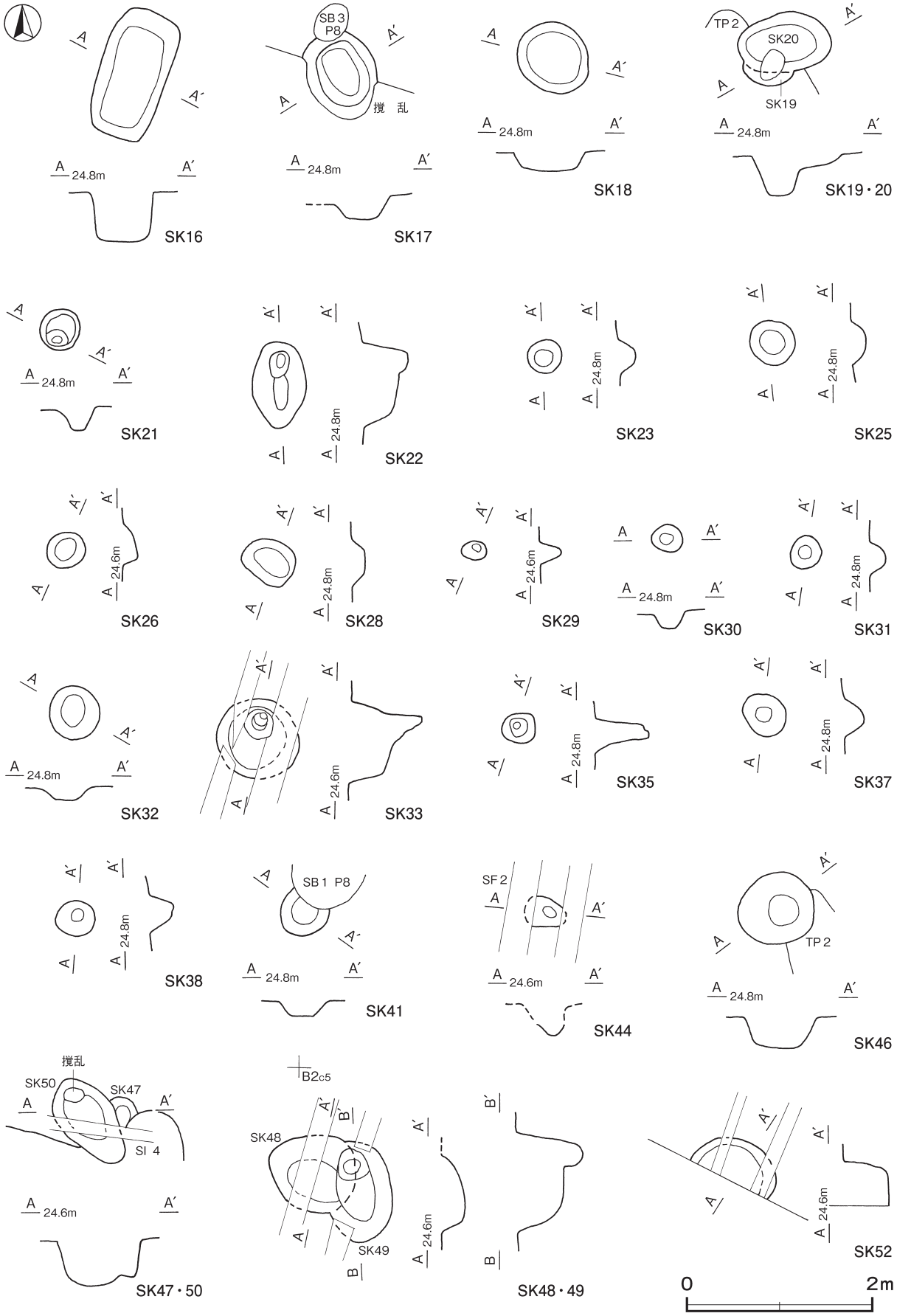
番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考
				長さ(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ(cm)					
1	B 2f0～B 3i5	N－63°－W	直線	(25.4)	0.44～1.50	0.44～1.06	10	U字状	緩斜	自然		SB 1，TP 3 →本跡
2	B 2c3～B 2d0	N－85°－W	直線	(27.2)	0.90～1.60	0.38～1.10	10～16	平坦	外傾	自然		SI 4，SB 4 →本跡→SK44・56～59・64
3	B 2d4～B 2d5	N－71°－W	直線	(5.4)	0.82～1.26	0.42～0.86	15	U字状	緩斜	自然		

(4)　土坑

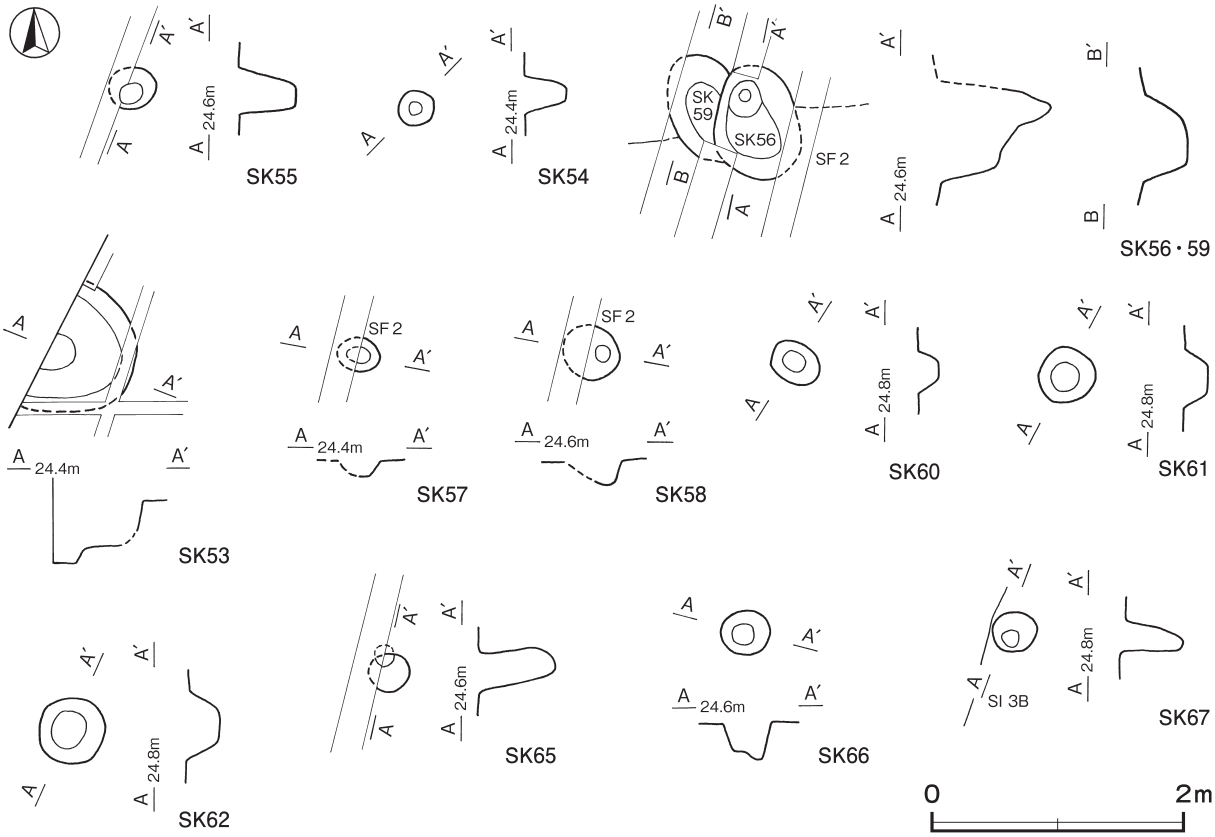
今回の調査で，時期や性格が不明な土坑 53 基を確認した。以下，実測図（第 40～42 図）及び一覧表を掲載する。



第 40 図　その他の土坑実測図(1)



第 41 図　その他の土坑実測図(2)



第 42 図　その他の土坑実測図(3)

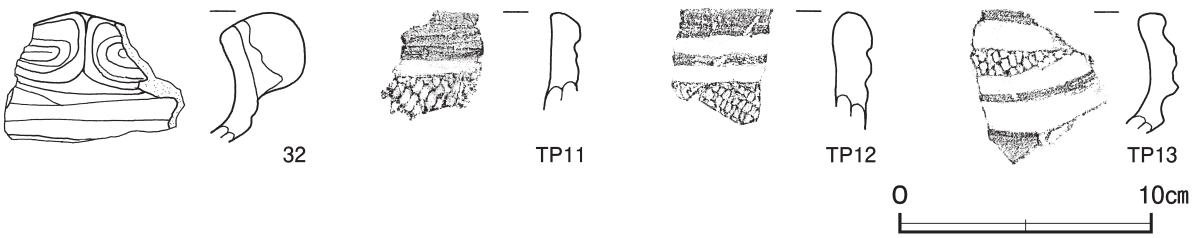
表９　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径 × 短径(m)	規模 深さ(cm)	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
1	B 4 i2	N－75°－W	［長方形］	2.26 × (0.86)	48	平坦	直立	人為	土師器	
2	B 4 i2	N－18°－E	［楕円形］	(0.92) × 0.72	26	平坦	緩斜	人為		SD 2，SK 3→本跡→SK 8
3	B 4 i2	N－44°－E	［楕円形］	0.72 × (0.62)	44	皿状	緩斜	人為		本跡→SK 2
4	B 4 i2	N－17°－E	隅丸長方形	3.72 × 1.06	30	平坦	外傾緩斜	人為	土師器，須恵器，陶器，金属製品	SD 1・2→本跡
5	B 4 j2	N－33°－W	［楕円形］	1.12 × (0.73)	28	皿状	緩斜	人為		SD 1→本跡
7	B 3 j9	N－33°－E	楕円形	0.86 × 0.58	34	平坦	外傾	人為		
8	B 4 i2	N－60°－W	［楕円形］	(1.28) × 0.72	10	平坦	緩斜	自然		SD 1，SK 2→本跡，SD 2と新旧不明
9	B 3 g2	N－72°－W	［楕円形］	0.80 × (0.48)	33	平坦	外傾	自然		本跡→SB 1
11	B 3 h8	N－54°－W	楕円形	0.90 × 0.58	36	有段	外傾	人為		
12	B 3 h8	－	円形	0.84 × 0.79	48	凹凸	外傾	人為		
13	B 3 e2	N－0°	楕円形	0.50 × 0.44	62	皿状	外傾	人為		
14	B 3 h9	－	［円形］	0.35 × (0.32)	38	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SK15→本跡
15	B 3 h9	N－60°－W	［不整楕円形］	(0.88) × 0.48	16	凹凸	緩斜	人為		本跡→SK14
16	B 3 e1	N－15°－E	隅丸長方形	1.40 × 0.66	52	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	
17	B 2 e9	N－64°－W	［楕円形］	(0.96) × (0.76)	44	皿状	緩斜		縄文土器	本跡→SB 3
18	B 2 d0	N－58°－W	楕円形	0.80 × 0.72	20	平坦	緩斜	自然		
19	B 3 f1	N－70°－E	［楕円形］	0.54 × (0.41)	18	皿状	緩斜	自然	土師器，須恵器，金属製品	TP 2→本跡→SK20
20	B 3 f1	N－80°－E	楕円形	1.10 × 0.62	16	平坦	緩斜	自然人為	土師器，金属製品	TP 2，SK19→本跡
21	B 2 c9	－	円形	0.43 × 0.43	23	平坦	外傾	人為	縄文土器	

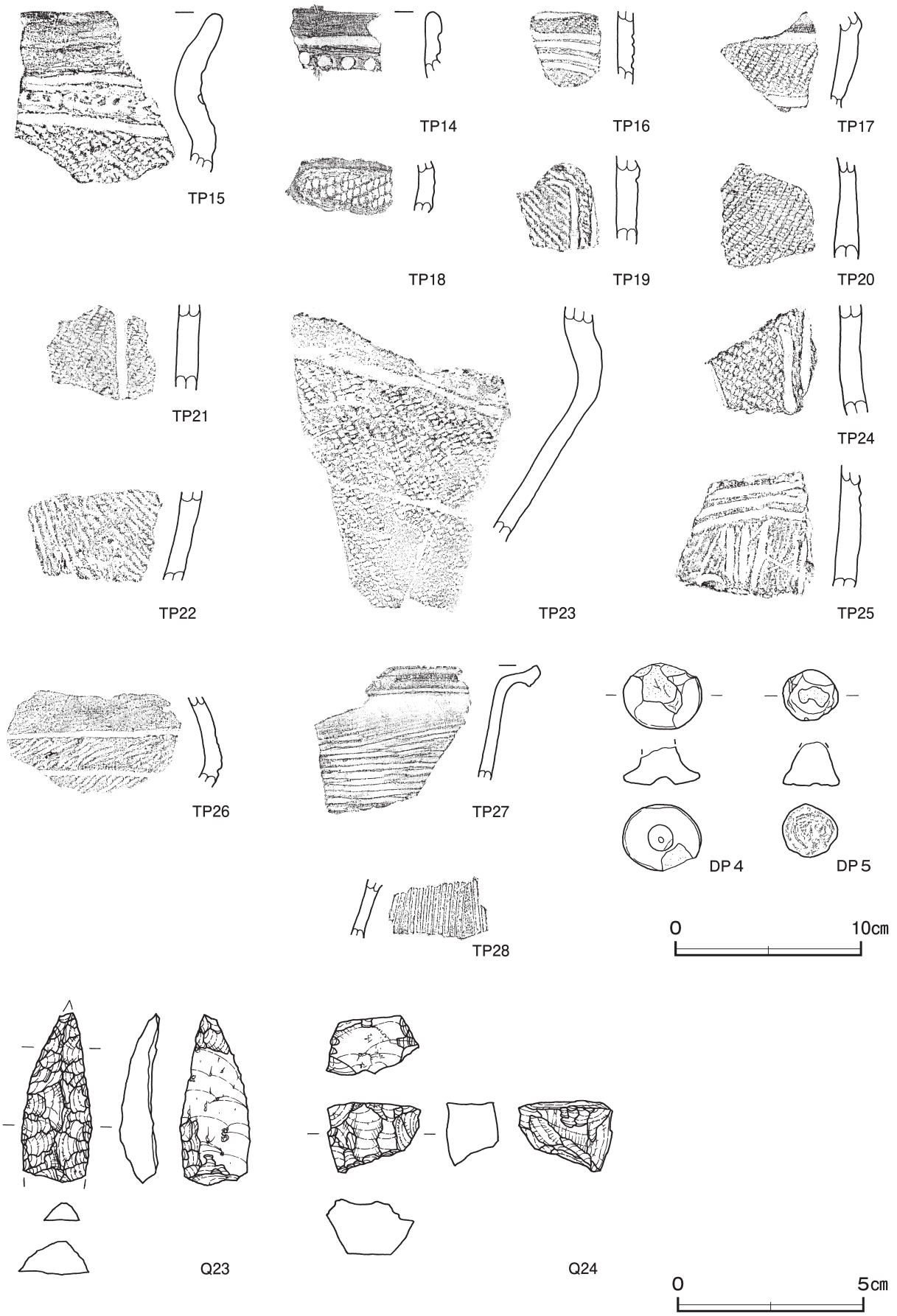
番号	位置	長径方向	平面形	規模			底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径	× 短径(m)	深さ(cm)					
22	B 2 f9	N－4°－W	楕円形	0.92	× 0.59	36	平坦	外傾	人為		
23	B 3 f1	－	円形	0.36	× 0.36	18	平坦	外傾	自然		
25	B 2 d9	－	円形	0.48	× 0.48	16	平坦	緩斜	人為		
26	B 2 e9	－	円形	0.40	× 0.40	22	平坦	緩斜	人為		
28	B 2 c9	N－50°－W	楕円形	0.57	× 0.45	14	平坦	外傾	人為	縄文土器	
29	B 2 e8	－	円形	0.26	× 0.26	24	皿状	外傾	自然 人為		
30	B 3 d1	N－82°－W	楕円形	0.36	× 0.28	16	平坦	外傾	自然 人為		
31	B 3 d1	N－38°－E	楕円形	0.36	× 0.32	18	平坦	緩斜	人為		
32	B 3 d1	－	円形	0.56	× 0.52	12	平坦	緩斜	人為		
33	B 2 c7	－	円形	0.86	× 0.86	76	平坦	緩斜 直立	人為	土師器，須恵器	
35	B 3 f2	N－70°－W	楕円形	0.38	× 0.34	58	凹凸	外傾	人為		
37	B 3 f1	N－42°－W	楕円形	0.46	× 0.40	22	皿状	緩斜	自然	土師器	
38	B 2 f0	N－82°－W	楕円形	0.43	× 0.39	23	平坦	外傾	人為		
41	B 3 f2	N－52°－W	［楕円形］	0.50	× (0.37)	16	平坦	外傾	－	縄文土器	本跡→SB 1
44	B 2 c6	N－76°－W	［楕円形］	(0.43)	× 0.31	30	皿状	外傾	人為		本跡→SF 2
46	B 3 f1	－	［円形］	0.76	× (0.54)	36	平坦	緩斜	人為		TP 2→本跡
47	B 2 c3	N－9°－E	［楕円形］	(0.40)	× (0.24)	42	平坦	外傾	－		本跡→SI 4，SK50
48	B 2 c5	N－60°－W	［楕円形］	(0.96)	× 0.82	22	平坦	外傾	人為		SK49→本跡
49	B 2 c5	N－17°－W	［楕円形］	1.09	× (0.56)	52	平坦	外傾	人為		本跡→SK48
50	B 2 c3	N－34°－W	楕円形	1.04	× 0.60	50	平坦	緩斜	自然 人為		SI 4，SK47→本跡
52	B 2 c1	N－63°－W	［楕円形］	0.91	× (0.45)	38	平坦	外傾	人為		
53	B 2 b1	N－28°－E	［楕円形］	(1.06)	× (0.67)	42	平坦	緩斜	人為	縄文土器，須恵器	
54	A 2 j2	－	円形	0.27	× 0.27	42	平坦	緩斜	人為		
55	A 2 j3	N－85°－E	［楕円形］	(0.38)	× 0.31	47	平坦	緩斜	自然 人為		
56	B 2 c4	N－6°－W	［楕円形］	0.92	× 0.68	80	平坦	緩斜	人為		SF 2，SK59→本跡
57	B 2 c4	N－64°－W	［楕円形］	(0.35)	× 0.27	10	平坦	緩斜	人為		SF 2→本跡
58	B 2 c4	N－63°－E	［楕円形］	(0.46)	× 0.42	12	平坦	緩斜	人為		SF 2→本跡
59	B 2 c4	N－24°－W	［楕円形］	0.50	× (0.39)	31	平坦	緩斜	人為		SF 2→本跡 →SK56
60	B 2 e9	N－56°－W	楕円形	0.42	× 0.32	14	平坦	緩斜	人為		
61	B 2 e9	－	円形	0.46	× 0.46	16	平坦	緩斜	人為		
62	B 2 e9	－	円形	0.52	× 0.52	22	平坦	緩斜	自然		
65	B 2 c7	－	［円形］	0.32	× (0.32)	62	皿状	直立	－		
66	B 2 b8	－	円形	0.38	× 0.38	28	凹凸	直立	－		
67	B 2 e0	－	円形	0.35	× 0.35	60	皿状	直立	人為		SI 3B→本跡

(5) 遺構外出土遺物

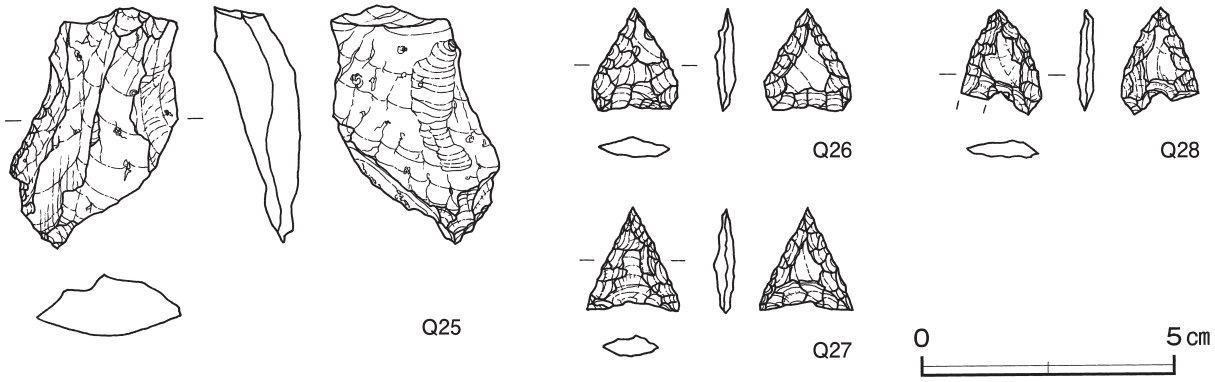
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について，実測図と観察表を掲載する。



第43図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 44 図　遺構外出土遺物実測図(2)



第 45 図　遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表（第 43 ～ 45 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
32	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	つまみ状把手→口縁部隆帯貼付→太沈線を巡らす	SK41 覆土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	単節縄文 RL →口縁部隆帯貼付→沈線を巡らす	B 2h4	
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	単節縄文 RL →口縁上部に隆帯貼付→太沈線で並行線文	SK10 覆土中	PL 9
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黄灰	口縁部太隆線により文様描画→区画内単節縄文 LR	SF 1 覆土中	PL 9
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・針状鉱物	黒	口縁部に 1 条の沈線→円形刺突文	表土	PL 9
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単節縄文 L R→無文帯下に半裁竹管による爪型文→太隆帯で胴部文様帯を区画	B 3d2	PL 9
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	単節縄文 RL →半裁竹管による横位の並行線文	SI 3 覆土中	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	1 段多条縄文 RL →口縁部沈線による区画	SF 2 覆土中	PL 9
TP18	縄文土器	深鉢	長石	黄橙	単節縄文 LR →沈線で楕円区画	SI 3 覆土中	
TP19	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	無節縄文 R →沈線で区画	B 2i4	
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	1 段多条縄文 RL →沈線が入る	SK21 覆土中	
TP21	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	0 段多条縄文 RL →沈線による懸垂文	SF 2 覆土中	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・雲母	橙	無節縄文 L	B 2i4	
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	単節縄文 LR →沈線で区画→区画内無文	C 4a1	PL 9
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄褐	0 段多条縄文 RL →隆帯貼付→沈線で区画	SK53 覆土中	
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	一部撚糸文→縦横の線文	SB 4 覆土中	PL 9
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	無節縄文 L →2 本の平行沈線を巡らす	B 3e2	PL 9
TP27	須恵器	甑	長石・石英・雲母	黄灰	体部外面横位の平行叩き	B 3e5	新治窯
TP28	陶器	擂鉢	長石・石英・細礫	暗赤	内面 10 条 1 単位の擂目	B 2f2	瀬戸・美濃系

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 4	スタンプ形土製品	(3.6)	4.2	(2.1)	(19.7)	長石・石英・雲母	橙	ナデ成形	SI 3 覆土中	PL 8
DP 5	スタンプ形土製品	2.8	3.0	(2.4)	(15.4)	長石・石英・雲母	明褐	ナデ成形	SF 2 覆土中	PL 8

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 23	尖頭器	(4.6)	1.9	1.1	(7.45)	黒曜石	縦長剥片を素材とし主要剥離面側からの連続する鱗状の剥離によって片面調整を施す　先端部は欠損　基部は背面側からの加圧によって折損している　背面中央部は稜をなし断面は三角形を呈する	SF 1 覆土中	PL 8・10
Q 24	石核	2.6	1.9	1.5	15.98	黒曜石	打面は平坦で細かい敲打痕を有する　下端部の稜は直線的につぶれており下方からの微細な剥離が連続している	B 3f1	PL10
Q 25	二次調整剥片	5.7	3.4	1.6	6.48	黒曜石	厚みのある縦長剥片　打面は単剥離面　両側縁の下部に微細な剥離痕を有する　背面には同一方向前段階の剥離痕　左側縁は主要剥離面側から，右側縁及び下端部は背面側からの急角度の調整を施す	SD 1 覆土中	PL 8・10
Q 26	鏃	2.1	1.7	0.4	1.14	チャート	平基無茎鏃	SB 1 覆土中	PL 8
Q 27	鏃	2.1	1.8	0.4	1.03	チャート	凹基無茎鏃	SB 2 覆土中	PL 8
Q 28	鏃	(2.1)	(1.6)	0.3	(0.91)	チャート	凹基無茎鏃	B 2h4	PL 8

第４節 ま　　と　　め

1　はじめに

今回の調査で，当遺跡から旧石器時代の石器集中地点１か所，縄文時代の陥し穴４基，土坑２基，奈良・平安時代の竪穴建物跡４棟，掘立柱建物跡１棟，土坑２基，室町時代の掘立柱建物跡１棟，土坑１基を確認した。また，出土した遺物は，旧石器時代の石器から室町時代の陶器と多時期及び多種にわたっている。ここでは，主として旧石器時代から平安時代までに検出した遺構と遺物について概要を述べまとめとする。

2　旧石器時代

当遺跡で，石器集中地点１か所を確認した。石器集中地点で出土した石器類の内訳は，掻器１点，削器１点，剥片 82 点（二次調整剥片１点を含む）の計 84 点で，総重量は 105.62g である。その他表土から石核，第１号道路の覆土から尖頭器，第１号溝の覆土から二次調整痕のある剥片がそれぞれ出土している。石材の内訳は，黒曜石が 85 点，安山岩１点，頁岩１点である。出土石器類の多くが不純物の多い黒曜石で，当遺跡から約 106km北西の栃木県高原山産と考えられる。下の表は，田宮平遺跡周辺で，黒曜石が出土した遺跡の一覧である。

表 10　田宮平遺跡周辺の黒曜石出土遺跡一覧

番号	遺跡名	田宮平遺跡からの方位と距離	出土位置	黒曜石の種類と点数	産地
1	西ノ原遺跡[1]	北東　約 4.0km	石器集中地点	ナイフ形石器（1），ピエス・エスキーユ（4），削器（2），石核（1），二次調整剥片（3），剥片（15）	高原山産ヵ
			表土	剥片（5）	
2	隼人山遺跡[2]	北東　約 4.0km	表採	ナイフ形石器（1）	高原山産ヵ
3	中下根遺跡[3]	北東　約 3.5km	表採	尖頭器（1）	不明
4	ヤツノ上遺跡[4]	北東　約 3.5km	表土	掻器（1）	不明
5	中久喜遺跡[5]	北東　約 3.5km	表採	尖頭器（1）	高原山産ヵ
6	下大井遺跡[6]	北　約 3.5km	石器集中地点	ナイフ形石器（1），剥片（2）	高原山産・信州系
			SI30 覆土中	二次調整剥片（1）	
			表土	削器（1），石核（1），剥片（1）	神津島産

周辺遺跡と比較すると，当遺跡の黒曜石の出土数が突出していることが分かる。また，横長剥片が多いのも特徴の一つである。石器集中地点から出土した石器類は，製品としての石器は少なく，剥片が多く出土している。その剥片も細かなものが多いことから，石器製作跡でも最終調整の場であったと考えられる。

3　縄文時代

縄文時代の遺構は陥し穴４基と土坑２基を確認した。当遺跡の陥し穴の配列をみると，第１・２・４号陥し穴が長軸方向を平行にして直線的に並んでおり，南北それぞれの調査区域外へ広がる可能性もある。また，狩猟方法は各陥し穴の周辺に柵や杭を立てたような痕跡がないことや，第１・２・４号陥し穴の延長上には稲荷川が位置し，台地が川に向かって緩やかに傾斜していることなどから，水辺に向かう動物の動線を利用した「待ち型」の狩猟方法であったと推測される[7]。

調査区域内では土器片（加曽利Ｅ式，堀之内式）の採集はできるものの，竪穴建物跡は確認できなかった

ことから，陥し穴を設置した狩猟場と考えられる。当遺跡と同じ台地上の縄文時代の遺跡は，当遺跡から北西方向約 200 mの天宝喜遺跡[8]，南西方向約 700 mの天宝喜西遺跡が所在している。天宝喜遺跡では，縄文時代早期中葉から晩期までの土器や縄文時代の土坑７基が確認されている。その中の１基は縄文時代の竪穴建物跡の柱穴の可能性があると報告されている。当遺跡近隣の縄文時代の遺跡から集落跡は確認されておらず，基点となる集落がどこに存在していたのかは明らかではない。

4　奈良・平安時代

今回確認した遺構は，竪穴建物跡４棟，掘立柱建物跡１棟，土坑２基であり，竪穴建物跡の時期は８世紀後葉～９世紀中葉の３時期に分けることができる。

Ⅰ期（８世紀後葉）・・・第１・４号竪穴建物跡，第１号掘立柱建物跡

Ⅱ期（９世紀前葉）・・・第３号竪穴建物跡

Ⅲ期（９世紀中葉）・・・第２号竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡は北壁に壁柱穴を有し，第３号竪穴建物は建物を拡張している。周辺遺跡では同様の特徴をもつ竪穴建物跡は確認されていない。また，第４号竪穴建物跡は竈を北壁から東壁へと作り替えている。周辺遺跡では，下大井遺跡で検出された９世紀前葉の竪穴建物跡の東壁で，竈を作り替えている例があるが，他では見られない。今回確認した竪穴建物跡は４棟と数は少ないが，周辺では類例が少ない特徴のある竪穴建物跡である。

また，第３号竪穴建物跡からは，井ヶ谷 78 号窯式の可能性が高い灰釉陶器長頸瓶が出土している。当遺跡周辺の下大井遺跡では，９世紀後葉の竪穴建物跡から井ヶ谷 78 号窯式の灰釉陶器長頸瓶や黒笹 90 号窯式の椀，表土からは三彩小壺蓋と黒笹 90 号窯式の灰釉陶器長頸瓶が出土している。ヤツノ上遺跡[4]では，平安時代前期の竪穴建物跡から猿投産の灰釉陶器短頸壺が出土している。当遺跡から北東へ約 3.1kmにあり，小野川左岸に位置する行人田遺跡[9]では，９世紀第１四半期の竪穴建物跡から井ヶ谷 78 号窯式の灰釉陶器長頸瓶が出土している。これらのことから，小野川周辺や当遺跡を含む稲荷川左岸の台地上の一般集落でも，９世紀に入ると施釉陶器を入手できたことが分かる。

尾張国猿投産の施釉陶器は，東海道を経由して海上交通でもたらされたと想定されている[10]。当遺跡から西へ約１kmには稲荷川があり，牛久沼に注いだ後，小貝川・利根川へと合流している。東海道は，下総国於賦（我孫子市）駅家から小貝川を渡り，常陸国（榛谷）駅家へと続く[11]。当遺跡へは，この小貝川の水運を利用し，施釉陶器をはじめ多くのものがもたらされたと考えられる。

第２号竪穴建物跡からは椀形滓１点，第１・３Ｂ号竪穴建物跡からは鉄滓がそれぞれ出土している。下大井遺跡では，８世紀後葉～９世紀前葉の竪穴建物跡７棟から鉄滓が出土し，そのうち２棟からは小片ではあるが羽口を検出している。更に，小野川左岸に位置するヤツノ上遺跡でも，平安時代の前期に比定されている竪穴建物跡から鉄滓が出土している。これらのことから，小野川周辺や当遺跡を含む稲荷川左岸の台地上に鉄生産に関わる工房跡の存在が想定される。

5　おわりに

今回の調査で，当遺跡は旧石器時代から室町時代まで，人々の生活が断続的に続いていることが分かった。縄文時代後期前半以降に空白期間があり，８世紀後葉になって集落が営まれるようになる。律令国家の施策の三世一身の法や墾田永年私財法などの開発政策が出され，新しく形成された集落と考えられる。道路幅の

調査のため明確ではないが，今回の調査区は台地縁辺部に位置しており，更に北側に広がっている可能性がある。

小野川右岸の下大井遺跡は，古墳時代中期から後期にかけての小集落で，奈良・平安時代には大規模な集落へと転換していく。当遺跡も小野川右岸に位置しており，下大井遺跡に付属する集落の可能性もある。

今後の調査・研究の進展によって，当遺跡の性格や位置付け，周辺遺跡との繋がりなど，点と点の部分が点から線へ，線から面へとなり河内郡河内郷の更なる歴史が解明されることを期待したい。

註

1）深谷憲二　柴田博行「牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　中下根遺跡・西ノ原遺跡・隼人山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第113集　1996年6月

2）註1）に同じ

3）註1）に同じ

4）小髙五十二「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）　ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集　1993年3月

5）荒井保雄　「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）　中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集　1993年9月

6）a川津法典「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1　下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集　2001年3月

b島田和宏「下大井遺跡2　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第197集　2003年3月

7）後藤孝行「中内西ノ妻遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第234集　2005年3月

8）石橋充　土生朗治「天宝喜遺跡」つくば市教育委員会，山武考古学研究所　2004年11月

9）白田正子「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）　馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集　1996年3月

10）川井正一ほか　奈良・平安時代研究班「茨城県における施釉陶器の検討（1）～（5）」『研究ノート』4～8号　茨城県教育財団　1995年～1999年

11）a古代交通研究会『日本古代道路事典』古代交通研究会編　2004年5月

b上高津貝塚ふるさと歴史の広場　第12回特別展『古代のみち－常陸を通る東海道駅路－』上高津貝塚ふるさと歴史の広場　2013年3月

写　真　図　版

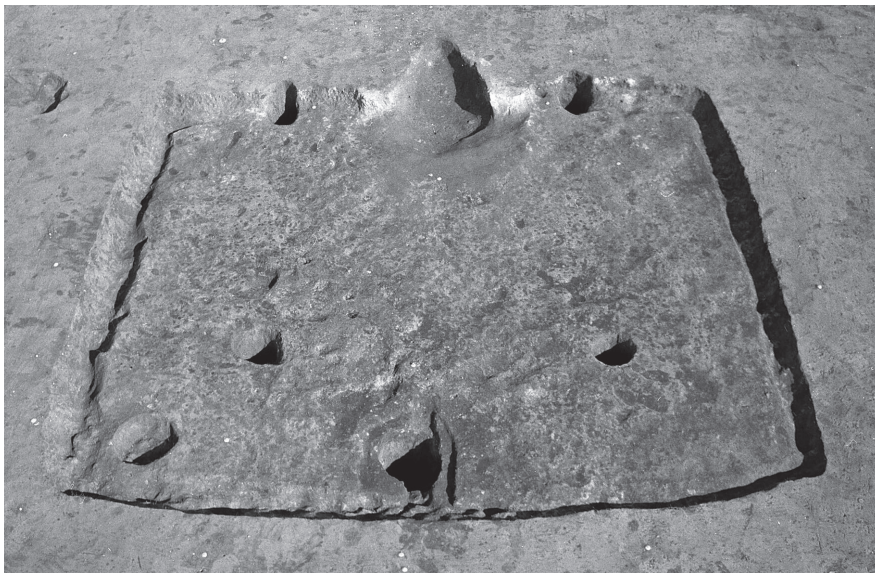
田宮平遺跡遠景（南東から）

第1号石器集中地点
遺物出土状況

第1号陥し穴
完掘状況

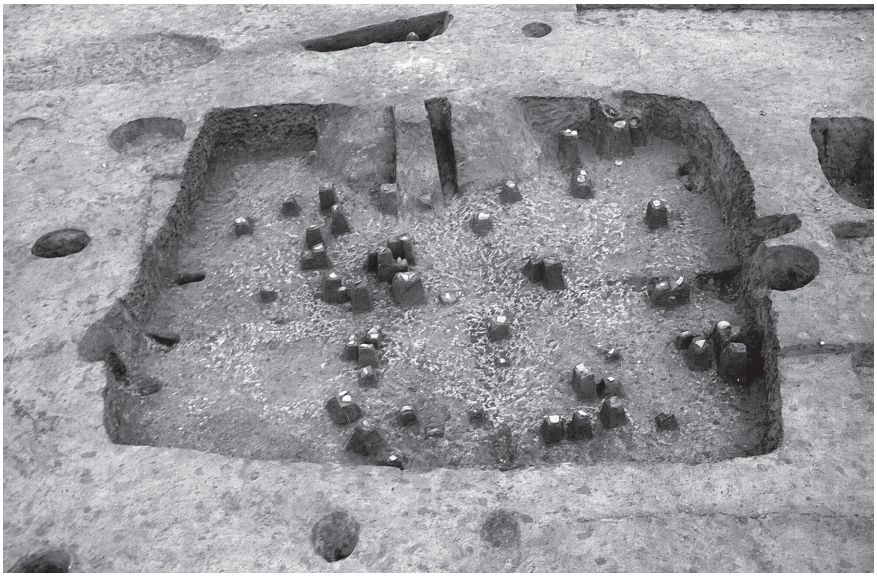
第3号陥し穴
完掘状況

第１号竪穴建物跡
遺物出土状況



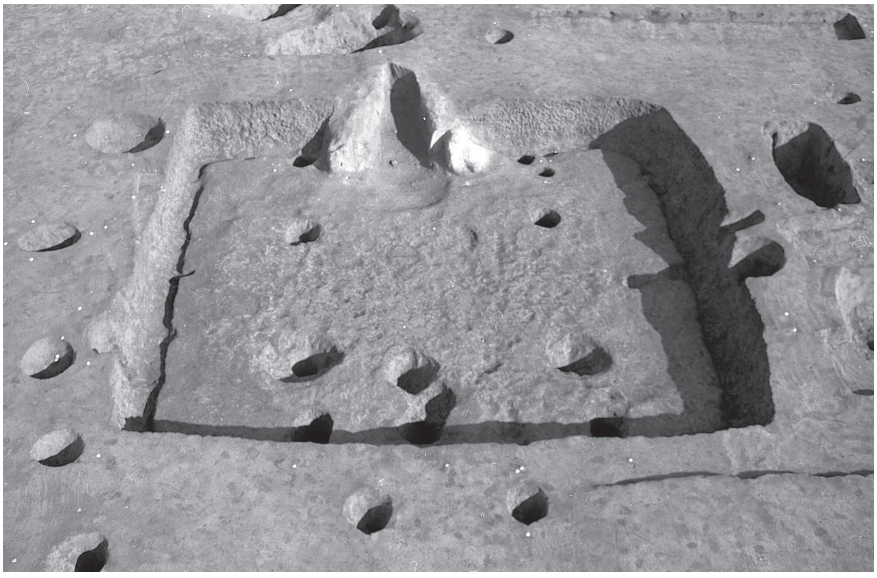
第１号竪穴建物跡
完掘状況

第２号竪穴建物跡
完掘状況



第３Ｂ号竪穴建物跡
遺物出土状況

第３Ｂ号竪穴建物跡
竈遺物出土状況



第３Ａ・Ｂ号竪穴建物跡
完掘状況

第４号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

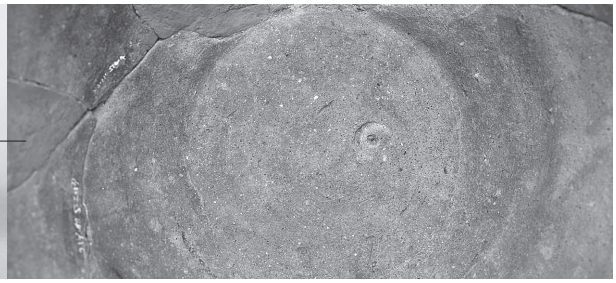
第４号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第１号掘立柱建物跡
遺 構 確 認 状 況

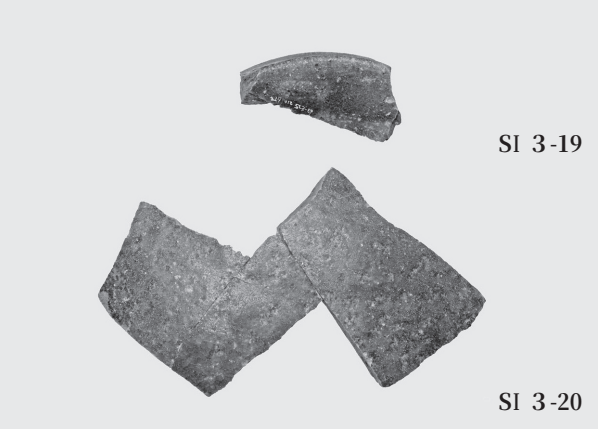
第３号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第４号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

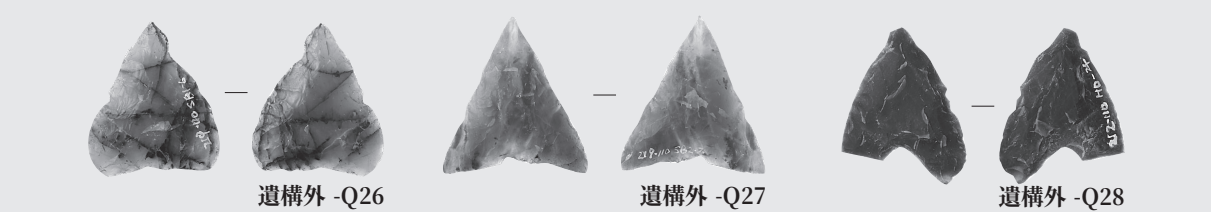
第２・３号道路跡
完　掘　状　況

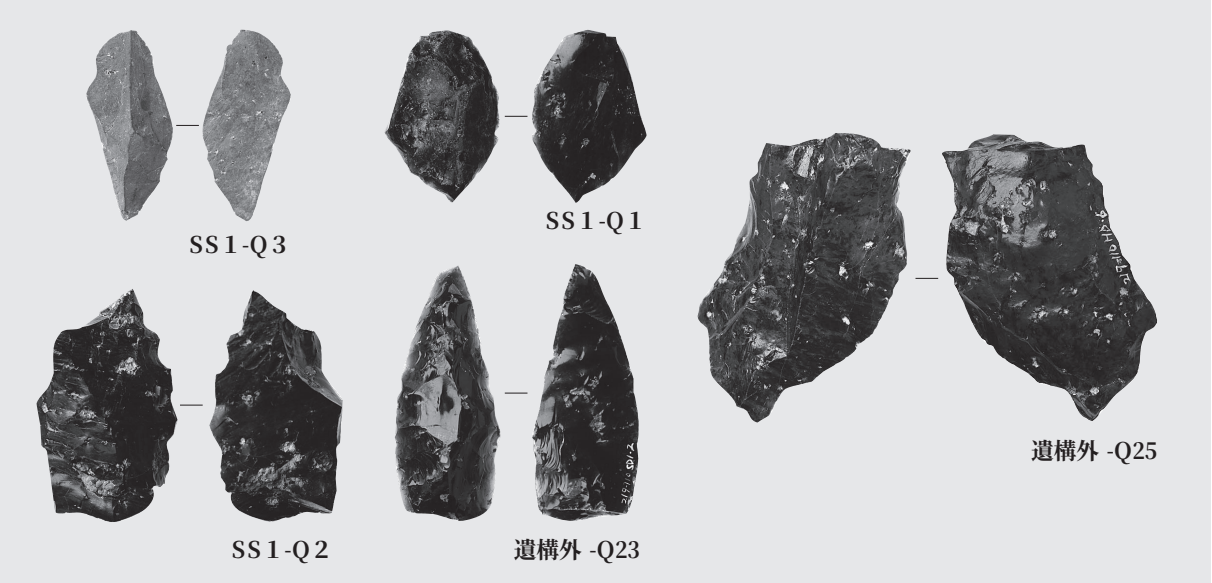


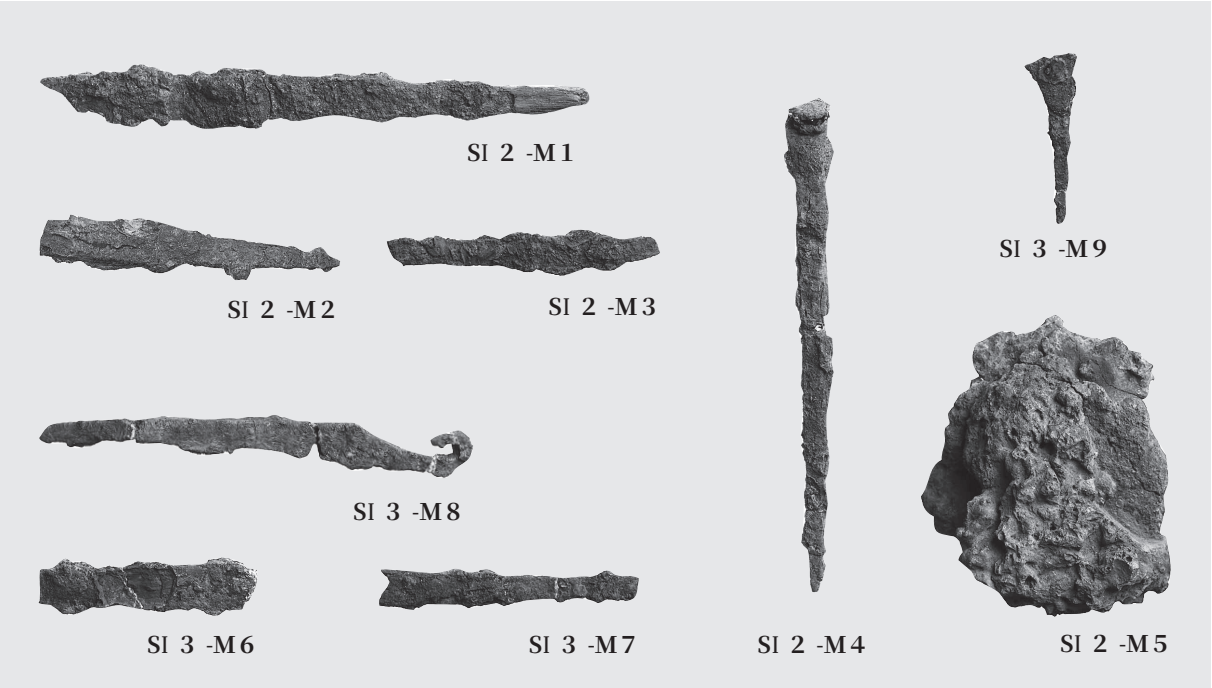
第１～４号竪穴建物跡出土土器



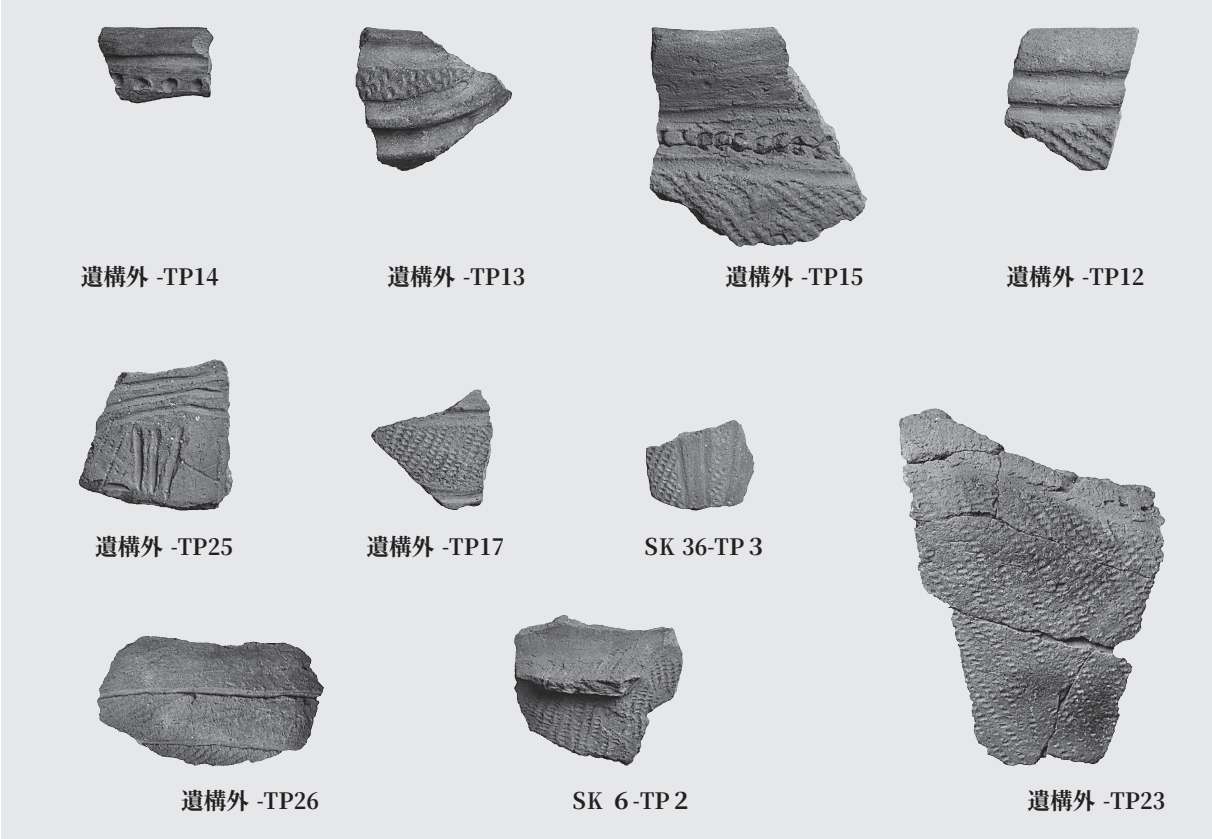
第３・４号竪穴建物跡出土土器

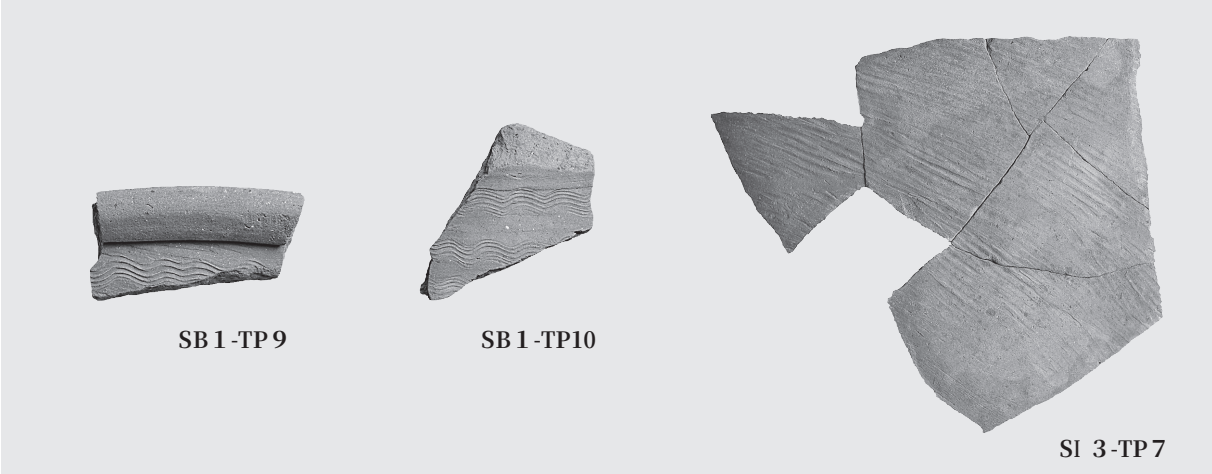






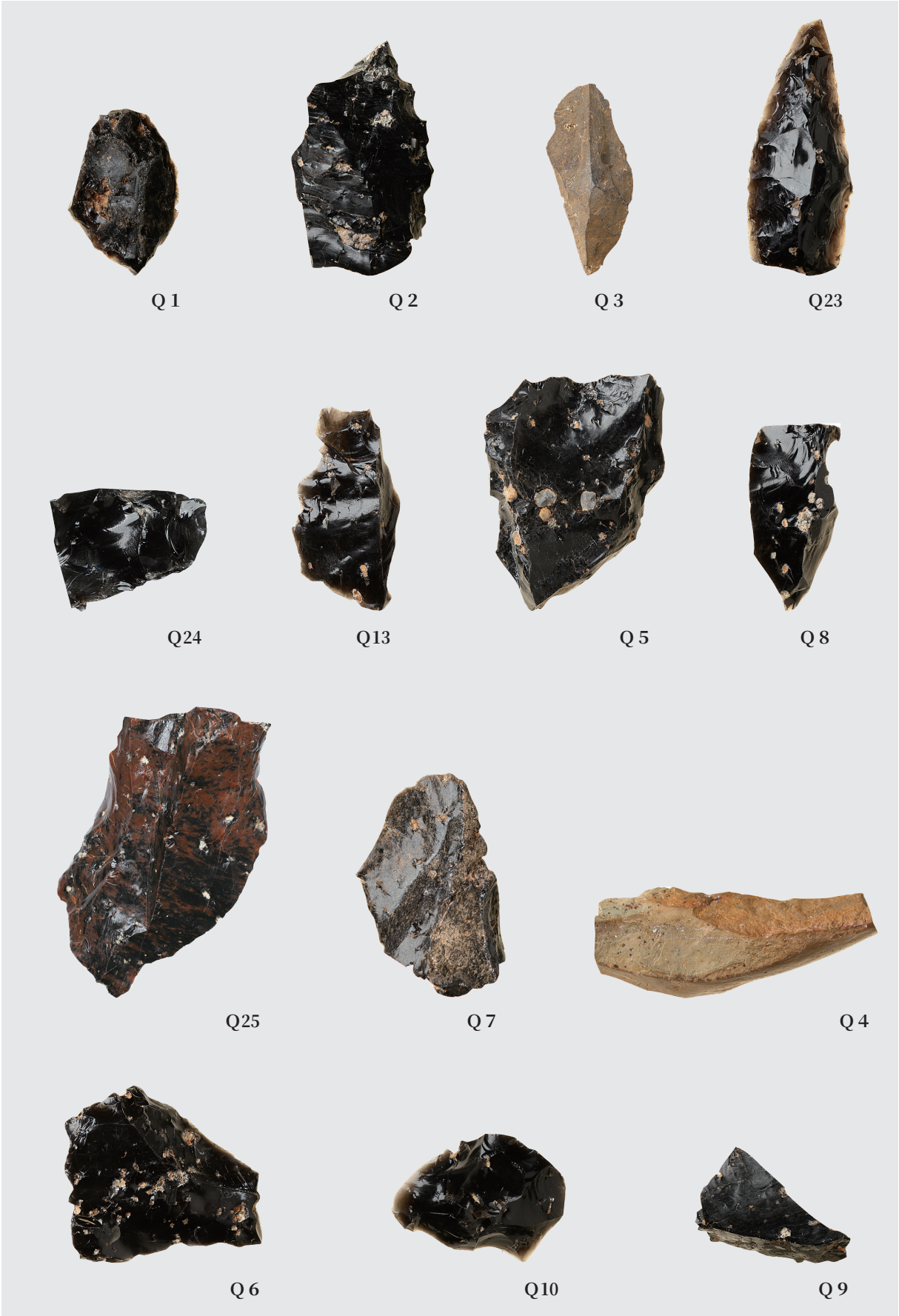
第２・３号竪穴建物跡，第１号石器集中地点，遺構外出土土製品・石器・金属製品，椀形滓





第１・３・４号竪穴建物跡，第１号掘立柱建物跡，第６・36号土坑，遺構外出土土器・土製品

PL10



出土石器類

抄　　録

ふりがな	たくうだいらいせき
書　　名	田宮平遺跡
副 書 名	都市計画道路田宮・中柏田線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 410 集
著 者 名	兼子博史
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
所 在 地	〒 310 － 0911　茨城県水戸市見和１丁目 356 番地の２　　ＴＥＬ 029 － 225 － 6587
発 行 日	2016（平成 28）年３月 18 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
田宮平遺跡	茨城県牛久市 田宮町字平 1030 番地ほか	08219 － 110	36 度 59 分 ２秒	140 度 ７分 56 秒	23 ～ 24 m	20141001 ～ 20101131	1362 ㎡	都市計画道路田宮・中柏田線整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田宮平遺跡	石器製作跡	旧石器	石器集中地点　1か所	石器（掻器・削器），剥片	
	狩猟場	縄文	陥し穴　4基 土坑　2基	縄文土器（深鉢）	
	集落跡	奈良・平安	竪穴建物跡　4棟 掘立柱建物跡　1棟 土坑　2基	土師器（坏・甕・小型甕・甑），須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・甕・甑），灰釉陶器（長頸瓶），土製品（支脚），石器（砥石），金属製品（刀子・釘），椀形滓	
		室町	掘立柱建物跡　1棟 土坑　1基	土師質土器（内耳鍋），陶器（碗）	
		時期不明	掘立柱建物跡　2棟 溝跡　2条 道路跡　3条 土坑　53 基	須恵器（甑），陶器（擂鉢），縄文土器（深鉢），土製品（スタンプ形土製品），石器（尖頭器・鏃），石核，二次調整剥片	

要　　約

旧石器時代は石器製作跡，縄文時代は狩猟場として，奈良・平安時代になると集落として土地利用されていたことが分かった。第３号竪穴建物跡は建物を拡張した様子を，第４号竪穴建物跡は竈を北から東へ作り変えた様子を確認した。第２号竪穴建物跡からは椀形滓，第１・３号竪穴建物跡からは鉄滓が出土しており，周辺に鍛冶工房があった可能性がある。

印　刷　仕　様

編　　集	ＯＳ	Microsoft Windows ７
		Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	６×７film　Nikon SUPER COOLSCAN9000
		図面類　RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType　リュウミンPro・Ｌ	
写　　真	線数	モノクロ175線以上　カラー210線以上
印　　刷	印刷所へは，Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第410集

田　宮　平　遺　跡

都市計画道路田宮・中柏田線整備事業
地 内 埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

平成28（2016）年　3月15日　印刷
平成28（2016）年　3月18日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　（有）川田プリント
〒310－0041　水戸市上水戸４丁目63－53
ＴＥＬ　029－253－5551